衛宮家の日常。

ますたー☆あじあ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

～最新話大体１５時投稿です～

【注意】士剣要素があります。

聖杯戦争が終わった冬木市、本来であればサーヴァントは座に帰るべきなのだが何騎かのサーヴァントは現世に残り、第２の人生を歩み始めた。ある者は家庭を築き、ある者はこの時代を満喫しているらしい。俺、衛宮士郎の家には多くの人がやって来る、というか何人かは住み着いているのだが…。やれやれ、今日も何かが起こりそうだ。

目次

■■■を食べたい ―― 1
大切な人へプレゼントを ～桜・士郎編～ ―― 6
『ふかふか』で『ぽかぽか』のち『すやすや』 ―― 15
大切な人へプレゼントを ～凛編～ 26
トランプで虎乱舞 ―― 37
『友達』以上『恋人』未満 ―― 45
セイバーの『天敵』 ―― 60
霊薬パニック事件 ―― 69
One on one ―― 77
衛宮先生のお料理教室 √Saber 91
衛宮先生(?)のお料理教室 √Rider ―― 103
王様とてるてる坊主 ―― 112
セイバー、おつかいへ行く ―― 121
Step up Saber ―― 131
そうだ、プールへ行こう。 ―― 144
夏の夜に咲く『花』 ―― 157
秋と言えば…? ―― 171
2人で素敵な1枚を ―― 181
衛宮家のクリスマス ―― 195

■■■を食べたい

しん、とした空間に響き渡る竹刀と竹刀のぶつかる音…俺、衛宮士郎は鍛錬を受けていた。

「ぐっ……!」

突き出される竹刀を紙一重で躱す。一瞬でも気を抜くと…

「甘い…ッ!!」

バチンという竹刀からとは思えない音と共に吹っ飛ばされる。竹刀じゃなかったら身体真っ二つだぞこれ。

「相変わらず容赦ないな…セイバー。」

「これも士郎のためです!大体、士郎が鍛錬をつけて欲しいと言ったではないですか?」

俺の相手をしてくれていたのはセイバー、聖杯戦争で共に戦い抜いたサーヴァント。聖杯戦争は終わったので鍛錬はもう必要ないのだが…毎日日課のようにやってたのが急に無くなるのは寂しい感じがして今でもやっているという感じである。

「そうだったな…集中、集中…」

もう一戦、と言おうとしたところで『ぐぅぅ〜』とお腹が鳴る。

「…」

　セイバーの体内時計は実に優秀で、特にご飯の時の正確さと言ったらなんのその。あ、セイバー顔が赤くなってる。

「飯にするか！」

「…そうしましょう、腹が減っては鍛錬はできません。」

　…ん？なんか違うような…まぁいいか。しかしさすがは王様…冷静さを一瞬で取り戻したな、あの恥ずかしそうな顔、あれはあれですごく可愛いんだが…

「…士郎は意地悪ですね…」

「っ、悪い口に出てたか…？」

「今日のお昼、私のリクエスト通りなら許してあげましょう。」

　おっと、そうきたか…まぁたまには悪くないだろう。全ては王様の言う通りに、っと。

「仰せの通りに…で、セイバー今日は何が食べたいんだ？」

「士郎です。」

☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆

　思考が止まる。まるで時間が止まってるように思考が止まる。

「は…せ、セイバー？何を言ってるんだ…？」

　この言葉が出るまで何秒かかったことが。セイバーは真顔で表情は変わっていない。

「ですから士郎、私はあなたが食べたいです。」
表情は変わらない。え、なにこれカニバリズムってやつなのか…？いや王様が…そんなことは…。
「…ちなみになんだが俺を食べると美味しいって誰かが言っていたのか…？」
まるで日本語を忘れてしまったかのように片言な日本語。それだけ動揺しているのである。セイバーははて？というような顔をして答える。
「…？士郎のことが美味しいという話は聞いていませんが、こう言うと良いと。凛が言っておりましたので。」
よし、シめる。手始めに遠坂のおかずにどっぷり砂糖入れたりしてやる。
「と言うわけで士郎！あなたを食べさせてください！」
しまった、空腹も相まってか獲物を狙う獅子のようなオーラが出ている。しかしセイバーは盛大に言葉の意味を勘違いしているよな…絶対に。
「ま、まてセイバー！そもそも俺をどうやって食べるつもりなんだよ！と、とにかく俺は絶対にいやだぞ、食べられるなんて」
「士郎、あなたに拒否権はありません」
「なんでさ?!」
「今日は私のリクエストに答えるとおっしゃったではないですか」

ぐうの音も出ない。そしてジリジリと間合いを詰められる。まずい…このままでは食べられる…！

「くそっ、こうなったら…」

逃げるが勝ち、と全力で走り出す。セイバーから逃げられるとは思わないが誰かに助けを求めることはできるはずだ…人がいれば。

☆　☆　☆　☆　☆

「あっ士郎！」

私、セイバーことアルトリア・ペンドラゴンは士郎が走り出したのとほぼ同時にスタートする。道場を出てすぐ左のところに間桐桜がいた。

「…」

顔を少し赤らめてフリーズしている、何かあったのでしょうか。

「む？…何か？」

「あっ、その…えっと…ご検討を…お祈りします…」

「恐縮千万、恐悦至極！では！」

風にのるように加速して士郎を追いかけるのであった。士郎を美味しくいただくために…。

☆　☆　☆　☆　☆　☆

この後俺はライダーを捕まえてライダーに説得してもらった。セイバーはライダーから言葉の意味を知り顔真っ赤にしてしばらく口を黙り込んでしまった…遠坂、絶対にユルサナイ。

なんだかんだで今日も衛宮家は平和です…。

大切な人へプレゼントを　～桜・士郎編～

「桜、頼まれた荷物、ここに置いておきます」
「ありがとうライダー。お昼までお茶の間でゆっくりしてていいからね」
　私、ライダーことメデューサはセイバーのマスターである衛宮士郎の家に上がって作業をしている。といっても住んでいるわけではなく、どっちかというとお泊まりが近いでしょうか。私のマスターである桜は数年前に士郎とは知り合いの関係にあった。元々、怪我をしていた士郎の家事の手伝いをしていて、それが今でも続いていると桜は説明していましたがーー
「先輩、今日のお昼は何にしましょう?」
「うーん、そうだな…冷蔵庫の中には…っと」
　第三者の私から見ると同棲しているカップルにしか見えません。桜や士郎にいうと顔を赤らめてそんなことはないと言うのですが…。
「…」
　仲睦まじくお昼のことを考えている2人を見ながら私は少し考え事をしていた。桜や士郎には日頃色々お世話になっている。家事や掃除の仕方はもちろん、日々の過ご

し方など…。

「急用を思い出しました。士郎、桜私は昼食は外出先で済ませますのでお昼は不要です。」

「あらそう…気をつけてね、ライダー」

「りょーかい。夕飯までには帰ってきてくれ」

「了解しました。それでは行ってきます」

思い立ったら即行動です。ふむ、しかし困りましたね…お礼の品、何を渡すかなんて何も考えていません。誰かに相談して見ましょうか…。と言ってもセイバーに相談するのは論外でしょう。そもそも彼女とは馬が合いませんし、喧嘩が始まって怒られては本末転倒です。

「とりあえず新都に行ってみましょうか」

私はうーんうーん、と考えながら新都へ向かうバスの出るバス停へと向かったのでした。

☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆

新都の大きなデパートにやってきました。ここで何かあれば良いのですが。まずは士郎のものから探しましょう。

「そうですね士郎といえば――――」

思考を巡らす。そういえば殿方がどんなものを欲しいのか、なんて考えたことありませんでした、失策です。どうしたものでしょうか…。

「おや、誰かと思えば…こんなところで何をしている、ライダー」

「…アーチャー、私はサーヴァントとは言え女性。一人でデパートに来て買い物するのはおかしいですか？」

アーチャー、彼は衛宮士郎の理想。聖杯戦争ではアーチャーと士郎は死闘を繰り広げたと聞きました。アーチャーと士郎は和解した、とは聞いたのですがどうなんでしょうか。っと、折角なので私の買い物に付き合わせるとしましょうか。

「アーチャー、あなたがプレゼントされて嬉しいと思うようなものはありますか」

しかも都合がいいことにアーチャーと士郎は同一人物、思考も似ているはずなので間違いなさそうです。

「ん？私が貰って嬉しいものか…そうだな、最新の調理器具を貰えると嬉しい、圧力鍋というやつだ」

なるほど、調理器具ですか。確かに料理をしている士郎はとても楽しそうだ。

「なるほど、ありがとうございます。では」

「…？なんだったんだ…」

圧力鍋があれば士郎は楽に料理ができますし、私たちはおいしいご飯を頂ける。一石

二鳥というのはこういうことを言うのでしょうか。お金はアルバイトでの稼ぎがあるので問題はありません。

「士郎はこれで決まりですね。喜んでくれるでしょうか…」

アーチャーが言うならたぶん大丈夫…なはずです。さて、と一息置いて次に選ぶのはーー

「桜には何をプレゼントしましょうか――」

☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆

桜とは聖杯戦争を共にし、良き関係だがこれといってほしいなぁと呟いているのを聞いたことがない。

「おや…」

目に留まったのは女性の髪留めがたくさん置いてあるお店だ。確か凛が言ってましたね、女性の髪は命だとかなんとか…

「桜には綺麗で美しい女性でいてほしいですね…」

つい本音が口から洩れる。…さて、どれから見ていきましょうか。髪留めといっても様々なものがある。桜の髪の色は…おや、あれは…。

「凛、何をしているのですか?」

「あら、ライダーどうしたの?」

凛はこういういうのは得意分野だと、私の直感がささやいています。
「桜の髪留めを買ってあげようかと思いまして…」
はは～んと納得したような笑顔で私を見る。なるほど、これが士郎のいう小悪魔すまいる、というものでしょうか。
「桜は薄い紫色の髪の毛だからね～。そうね～…」
と一緒に悩んでかれこれ1時間、二人で導き出した答えは…
「これね」
「私もこれがいいと思います」
ピンク色のヘアゴムに桜を模した飾りのついた髪留め、というよりはヘアゴムというべきでしょうか。
「わざわざ時間を割いてくれてありがとうございます、凛」
凛がいなければまだどれにするか悩んでいたでしょう。
「全然大丈夫よ、桜に喜んでもらえるといいわね」
「はい、凛、このお礼は必ずいたします」
「ええ、楽しみにしておくわ」
じゃ！といって凛は一人別の場所へ行ってしまいました。今度凛にもプレゼントするとしましょう。そして私は帰路についたのであった。

☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆

「ただいま戻りました」

荷物は先回りして部屋において、正面に戻る。面倒ですがそうしないとサプライズになりませんので。

「お帰り、ライダー。飯はもう少し待ってくれ」

お茶の間に入って桜がいないことを確認する。桜は…入浴中のようですね、好都合です

「ライダー、どうかしたのか？」

「士郎、少しここでお待ちを」

「？」

そしてプレゼントを持ってきて、渡す。

「士郎、私からの感謝の気持ちです。受け取ってください」

受け取った士郎は少し恥ずかしそうにしている。ふむ、士郎にはこういう一面もあるのですね。

「わざわざよかったのに…ありがとなライダー。もしかして今日の外出はこれを買うためにに？」

「はい、ちょうど良いタイミングかと思いまして。どうぞ開けてみてください」

プレゼントの包装をとると士郎は眼を輝かせる。アーチャー、ありがとうございます。
「これは…圧力鍋じゃないか！ほんとにいいのか？」
「はい、その鍋でこれからも私たちに美味しい料理を作るってください士郎。」
このかわいい士郎をセイバーに見せつけてやりたいですね…果たしてセイバーはどんな顔をするんでしょうか。
「士郎、圧力鍋をじっくり見るのは良いですが早くしないとセイバーに怒られますよ？」
「っと、そうだった。プレゼントありがとなライダー。大事に使わせてもらうよ」
「喜んでもらえて何よりです。では着替えるので一度部屋に戻ります」
士郎はあぁと軽く返事をすると料理を始めた。本当に料理が好きなのですね、士郎は。
「あとは桜…あら？」
部屋に戻る途中で消したはずの部屋の電気がついていることに気付く。
「少し遅かったですか」
「あ、お帰りライダー。お風呂先にいただきました」
桜がお風呂から上がってくる前に部屋に戻るつもりでしたが、桜の方が少し早かったようです。桜にわからないように渡すプレゼントを置いていましたが…よかった、気付

いてないですね。
「桜これを…」
　隠しておいたプレゼントをとり出し、そっと桜に手渡す。
「これは…？えっと、今日は初めてライダーに会った日、じゃないし、私の誕生日でもないし…」
「桜、それは私からの感謝の気持ちを込めたプレゼントです。
「ライダーが私に…？今日の用事ってこれのために？」
　こくり、と頷く。桜は少し驚いた表情の後に
「ありがとうライダー、わざわざ私のために」
　桜の満面の笑みが目の前にある。これだけが見れただけでも今日買いに行った買いがあったというものです。
「これは…桜の…」
「桜は綺麗ですから、花もあなたも」
「ラッ、ライダー！」
　よっぽど恥ずかしかったのか顔を真っ赤にしている。さすがにストレートすぎましたか。
「ふふっ、でも桜それは事実ですよ。桜はもっと自信を持っていいですよ」

もう、と呟いてじっとヘアゴムを見る。
「桜、付けないのですか？」
「じゃあ、ライダーがつけてくれる？」
私は笑顔で桜の髪をセットする。
「はい、できましたよ桜」
「うわぁ…」
満面の笑み、何度見ても桜の笑顔は素敵です。
「桜、士郎やセイバーには見せに行かないのですか？」
「行きます！いまから！」
勢いよく桜は部屋を出ていく。士郎と桜、どちらも初めて見る反応でなかなか新鮮でした。たまにはこういうサプライズはありかもしれませんね。
茶の間から笑い声が聞こえてきますね、私も混ぜさせてもらいましょう。
衛宮家は今日も平和です…。

『ふかふか』で『ぽかぽか』のち『すやすや』

「うーん…今日はものすごく天気がいいな！」
俺、衛宮士郎は外で洗濯物を干しながら空を見上げる。雲ひとつない快晴である。
「士郎、庭掃除終わりました」
セイバーに庭掃除を頼んでいたが流石だ、俺よりかなり早く終わる。
「セイバー、今日はすごく天気がいいから布団を干そうか」
「布団を干す…洗濯するのですか？」
あんな大きな物は洗濯機に入りません、と言いたそうな顔をしている。もしかしてセイバーは干した布団の気持ち良さを知らない…？
「あー、違うぞセイバー。洗濯機には入れないでそのまま天日干しにするんだ。個人的になんだが、布団がふわふわですごく気持ちよく寝れるんだ」
「ほう…天日干しするだけでよいのですか…」
どうやら本当に知らないらしい。いい機会だし、体験してもらおう。
「セイバー、布団を持ってくるのを手伝って貰えるか？その…なんだ女性の部屋に勝手に入るのは忍びないというか…」

単純に誤解されたくもないし…な。遠坂や桜に見られたらそれはもう…あぁ、想像するだけで寒気が…。
「分かりました、手伝います」
各部屋から布団を回収してきて日当たりの良い縁側に並べる。見ているだけで夜が楽しみになってくる。
「ところで士郎」
「ん？」
「布団を天日干しするだけでは汚れは取れませんが…これは気持ち良く眠れる以外に何かあるのですか？」
確かに、汚れは落ちないのだからする必要がないのでは、というのは当然の意見であると言える。
「そうだな、天日干ししてある程度時間が経ってから布団を叩くんだ。そしてダニやホコリを落とすんだよ、確かに外側の汚れは落ちないけど内側の汚れは洗濯しても取れないのがあるからな、こうして定期的に内側を清潔に保つんだよ」
上手く説明できているだろうか…セイバーはなるほど、と頷いている。
「それは良いですね、そしてふかふかで気持ち良く寝れるとは一石3丁ですね」
「ははっ、そうだな。よし少し俺は洗い物してくるからセイバーはゆっくりしていてく

れ」

「分かりました」

洗い物をし終えてから布団を物干し竿にかけて叩くとしよう。時間的にも丁度いいだろうし。

☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆

「…」

私、セイバーは葛藤しています。縁側で良く日向ぼっこをしていますが今日は横に布団があります。しかも干すと気持ち良くなると言うではありませんか。まだ干してそんなに時間は経っていませんが士郎は戻ってくる気配はありませんし…。

「す、少し触るだけなら…」

好奇心には勝てませんでした…手でそっと押してみると、太陽の光で適度に暖かくなっていて…ふかふかでした。

「おお…これは素晴らしいです…！」

キラキラと目を輝かせながら布団へ移動する。もう身体を止めることは出来ず布団に横になる。私（セイバー）に電流が走る…こんな、こんな世界があったとは…！

「これは…太陽の匂いと…士郎の…」

スン、と匂いを嗅ぐ…というよりこれは士郎の布団なので士郎の匂いがして当たり前

なのですが…

「ーーっ」

あゝ、今私はどんな顔しているんでしょう…少なくとも士郎には見られたくない顔をしているのは確かです。…恥ずかしさで死にたくなると思います。

「…士郎…■■■■ます…」

自分でも聞き取れないくらい小さな声でした。いつか、いつか士郎にもう一度伝えたいのですが…恥ずかしくて…。

「…気持ちが良いですね…これが布団の魔力と言うのでしょうか…」

さまざまな感情を胸にしたまま瞼を閉じる…そしてそのまま夢の世界へ…。

☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆

「〜♪」

鼻歌交じりに洗い物をする。人が増えて洗う量は増えたが賑やかで毎日が楽しくてこの程度、何も苦行にはならない。

「さて…っと、ぼちぼちかな」

キュッと蛇口をひねり水を止めてふと時計に目をやる。

「うん、良い時間だな…そろそろ布団叩きの時間かな」

布団叩きを手に取り窓辺へ向かう。向かった先ではーー

「セ、セイバー?!」
布団で横になるセイバーがいた。…というかその布団俺の…。いや今はそれどころではない。
「どうしたセイバー?!何かあったのか?!」
サーヴァントとはいえ、何かあってからでは遅い。セイバーを抱き上げ呼びかける。
「…ん、しろぉ…?」
…ん?普通に眠ってただけ…?いや、ならいいんだが…。セイバーさん、とりあえず布団から降りてくれませんかね、干して意味がない…。
「しろぉも…いっしょにぃ…ねよぉ…」
「おわぁっ?!」
セイバーに力強く引き摺り込まれる。もちろん抵抗できるわけがない。セイバーは布団に俺を布団に倒すと抱き枕のように腕と足を絡めてくる。
「せ、セイバー!まてまて!!これはやばいって!!」
俺だって思春期真っ只中の高校生だ。刺激が強いと言うかなんか色々次元を超えてる!
「しろぉはえらいねぇ…きょうはゆっくりやすみましょう…」
布団は太陽で心地よいくらいに暖かく、セイバーは俺の頭を撫でながらそのまま眠っ

てしまった。
「ーーっ!!!!ーーっ!!!!」
セイバーの抱き枕になった俺は声が出せない。初めは抵抗していたが抜け出せる気配がなかったので諦めて自然体になる。もうどうにでもなれ。と同時に睡魔が襲う…瞼が鉄板のように重い。
「セイバー…良い匂いがする…」
最後の最後に自分が思ったことを口に出して夢の世界に旅立つ…。
☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆
「ただいま～!」
「先輩、ただいま戻りました!」
お昼の買出しへ行っていた桜と凛が帰ってきた。
「おかえりなさい、桜、凛」
本を片手に2人を迎えるのは私、ライダーです。
「おや、セイバーと士郎は一緒ではなかったのですか?」
しばらく物音一つしなかったので、と付け加えて桜に問う。
「え?先輩とセイバーさんは家でやることがあると言ってたから残っているはずだけど…」

と、同時に凛や駆け足でこちらに来る。おやあれは小悪魔スマイル、何か面白いものでも見つけたのでしょうか

「あの仲良しさん、縁側で寝てるわ」

「これは…」

「先輩とセイバーさん…」

完全に寝ているようですね、ここまで近づいても起きないあたり。

「あの2人がこんな風になっているとは」

私は驚いていた。そもそも2人はこんな公にイチャイチャしてるのを出すタイプではないからです。

「どうやら布団の魔力に呑まれたようね！」

おほほ、と高笑いの凛。布団の魔力、といっても害のある魔力ではないのでしょう。しかし…

「2人とも幸せそうですね」

「ええ…凛か桜、どちらかカメラは持っていないのですか？」

この記録は残しておいたほうがよさそう、と私の直感が告げている。いろんな意味で。

結局凛と桜、2人どちらも写真をきっちり抑えたのでした。起こすのは可哀想だった

のでそのままそっとしておこうということで私たちはその場をそっと離れた。

☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆

「ん…っ」

しまった、ずいぶん寝てしまったようです。ん…？

「ふぇっ?!しっ、士郎?!」

自分の腕の中で士郎が眠っています。それはもうスヤスヤと。

「んー…あ？」

超至近距離でお互いに目が合う。3秒くらい見つめ合ってーー我に帰る。

「うわわっ、悪いセイバーー！悪気があったわけじゃないんだ！」

「もっ、申し訳ありません士郎…その…」

お互いに耳まで真っ赤にして距離を取る。ー気まずいです…。

「あらお目覚め？」

この声は

「遠坂！」

「凛！」

…まさか。

「遠坂お前…見たのか…？」

恐る恐る士郎は聞く。
「んー？なんのことかしらねー？」
ニマニマと小悪魔スマイルを私たちに向ける。
「凛、何か隠してますね…？」
「せ、セイバー…？」
「あぁそれでしたら」
む、ライダー…何か知ってそうですね。
「続けてください、ライダー」
「ちょっ、ライダー?!裏切る気?!」
裏切る…？隠し事をしているのは間違いなさそうですね。
「恋人のように抱き合って寝る2人を撮影されてました」
「ーーー」
私の記憶はここで途絶えている。
☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆
俯き加減でもわかる、セイバーの顔が赤い。とこの一触即発の雰囲気の中冷静に判断してるあたり俺はこんな環境に慣れつつあるのかなーと一人で思ってたりした。とりあえずまずはセイバーを落ち着かせないと。

「せ、セイバー、まぁ後で消して貰えばいいからとりあえず落ち着け、な？」
　こんなところでエクスカリバーなんて振られたら家が崩壊どころか冬木市が消えてしまいかねない。
「なぁ遠坂それで…あれ、遠坂…？」
　先までいた遠坂の姿がない…逃げたな、あいつ。
「士郎」
「あぁ分かってる。他人に迷惑をかけない程度にあの悪魔を懲らしめてきなさい」
　こうなった時のセイバーは止められない。だから一応念押しして迷惑はかけるな、とだけ付け加えておく。
「イエス、マイマスター…フフ、凛、お覚悟を…」
　頑張れ遠坂、お前の罪は重い…。のちに遠坂は語る、あれはもう2度と体験したくない、とーー。
「先輩！これを」
　ん？これは寝ているセイバーと俺…
「桜お前…！」
　まさか桜も写真を撮っていたとはセイバーに見つかる前に…
「ごめんなさい、ついその…可愛くて記憶に残して起きたいと思って…」

どうやら桜は元から俺に見せるように撮っていたようだ。
「桜、その写真俺にもくれないか？思い出として撮っておきたい」
「はい、分かりました」
こうして俺の宝物に一つ追加された。セイバーにバレたら竹刀で半殺しにされそうだが…仕方がない、だって…
「セイバーは寝ていても可愛いし綺麗だからな…」
ボソッとつぶやいて布団を各部屋に戻す。またこんな日がないかな、と心のどこかで思っているのはここだけの話だ。
今日も我が家は平和である。

大切な人へプレゼントを　～凛編～

士郎と桜にサプライズプレゼントをして早数日…私は未だに凛へプレゼントを選べずにいた。

「…」

ふぅ、とため息をつきカタログを閉じる。どうしましょうか…。うーんと考えていると扉の叩く音が聞こえた。

「ライダー、いるか？」

「士郎ですか、どうぞ」

「遠坂から伝言だ、明日新都へ行かないかだそうだ」

凛と新都へ…？何かあるのでしょうか、しかも私と。士郎や桜、セイバーなら分かりますがなぜ私に…？

「了解しました、折り返しは私からしておきます」

「ん、了解」

士郎が扉を閉めた後も考えることは何故凛が私を誘ったのかーー。

「考えても仕方ありませんね、とりあえず折り返しの電話をしておきましょうか」

結局凛とは１０時に現地集合となりました。凛は私に何かさせたいのでしょうか…それとも…。

凛との電話の後、私は悶々としながら1日を終えるのでした…。

☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆

翌朝、出かける支度をする。その横で桜がじっと見つめている。

「にしても姉さんがライダーと出かけるなんて…不思議な感じですね」

たしかに、これまで凛と2人っきりで出かけるなんて事はなかった。

「そうですね、凛と2人っきりで出かけるのは初めてですが…大丈夫です桜、何かあった時は必ずお守りします」

と言っても凛は優秀な魔術師なので変な事件に巻き込まれるなんて事はないでしょう。

「ふふ、お願いするねライダー」

「それでは行ってまいります」

「はい、いってらっしゃいライダー」

新都行きが出ているバス停へ向かう。表情は平然としているのでしょうが私の心の中はいろんな気持ちが渦巻いてます…。

「ーーあっ」

私としたことが物思いに耽りすぎたようです…道を間違えました…。
そんなこんなでなんとか新都へ到着…おや。
「あらライダー。予定より早いわね、きっちり合わせてくると思ったのだけれど」
凛の方が早かったようです、１０分前行動というやつでしょうか。まだ予定の時間より１０分くらい早く着いているとは。
「凛、待たせてしまいましたか？」
「いいえ、私も本当についさっき着いたのよ」
ところで、と話を切り替えて凛は私に問う。
「この前のプレゼントの件なんだけど…私から１つ質問があるの」
真顔で問われる。
「はい、なんでしょうか凛」
「あれって…なんでもいいの？」
なんでも、ですか…。
「はい、なんでも」
この時、私は忘れていました。相手はあの遠坂凛、通称赤い服の小悪魔だと言うことを。
「へぇ～…なんでもいいのねぇ…」

時すでにお寿司…いえ、遅しでしたか。凛のあの笑顔は小悪魔モードの合図なのですから。

「じゃ、私へのプレゼントは私が決めるという事でいいでしょ?」

…あぁ、これはいけない気がします。イケナイ気が。少なくとも私のお財布は薄くなりそうです…。

「私が求めるのはーー」

☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆

「一日、私に付き合ってもらうこと!」

と、笑顔でライダーに伝えるのは私、遠坂凛よ。ライダーは…ぽかんとしている。

「おーい、ラーイーダー…」

呼びかけるが帰ってこない。ちょ、ちょっと…ライダー?!

「凛、本当にそれでいいのですか?」

いきなり帰ってきた?!それはそれでびっくりするのだけれど?!

「え…えぇ、それでいいの。これにはちゃんと理由があってね。あんまりライダーと私って話すことないじゃない?だから親睦を深めようと思って…私たち、気が合いそうな気がするのよ」

正直な私の気持ちを伝える。なにかとライダーと2人きりっていうのはなかったし、

ライダーとはもっと仲良くなりたかったから丁度良い。
「まぁ…その、今日一日私とデートってことね！」
ライダーとデート、女の子同士でデート。…別に士郎が構ってくれないからとかじゃないんだから！
「…なるほどでは今日一日私は凛の彼女というわけですか」
彼氏だと思うんだけど、というのは言わなかった。ライダーはそういうのは気にしそうだったから。
「そ、だから…彼女は大人しく…エスコートされるのよ！」
ライダーの手を握る。
「ひゃっ、凛?!」
「まずはデパートでお買い物と行きましょうか！」
ライダーは体勢を立て直し、私の横を歩く。
「…よろしくお願いします…」
私はちらっとしか見てないが、小声でそう呟いたライダーは少し俯き加減で顔が赤くなっているのが見えたーー。
☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆
お昼前、私たちはお昼を食べるために公園へと向かった。

「うぅ…凛、本当に似合っていますか…?」
「うん、似合ってるわ!もっと自信を持っていいのよライダー」
なぜ最初にデパートに行ったか、それは…。
「り、凛私に洋服は…これで十分です!」
「えぇい、問答無用!今日は!一日!私の言うことを!聞くって!約束でしょ!」
「契約内容が変更されてます!そう言う約束ではーー」
まずはライダーをおめかしする事からだった。スタイルがいいのにそんな地味な服装ではライダーの良さが引き立たない。何分かの格闘の末、結局無理やり連れ込み、買ったのは…。
「ワンピースって意外と露出する部位が多いのですね…うぅ」
白色のワンピース。王道を行くような服だがライダーの髪の色と相まってよく似合っている、羨ましいくらいに。というか露出度で言ったら聖杯戦争の時の服装のはどうなるのよあれ…あれは恥ずかしくないのにこっちは恥ずかしいんだ…。
公園の中でも人気のない場所にある大きな木の下にシートを敷き陣取る。
「お昼は…凛が用意してくれたのですか」
「ええ、サンドイッチを作ってきたの」
ジャジャーンと蓋をあける。ライダーは食い入るようにそれを見る。

「…失礼は承知の上なのですが…申し訳ありません、凛は料理ができないものと思っておりました」
あー…否定はできないわね、だってこれ以外にまともにできる料理はないのだから。
「あ、あははは…」
苦笑いで誤魔化す。気付かれないうちに話題を変えましょう。
「サンドイッチくらいなら私でも簡単にできるから今度ライダーも作って見たらどう？」
「そうですね、時間があるときにでも挑戦してみます」
ふふっと微笑むライダー。ライダーもこんな表情するんだ…。
「では凛、いただいても良いでしょうか？」
「どうぞどうぞ。感想、聞かせてよね」
ライダーはハムサンドをはむっと食べる。ゴクリ…で、味は？
「美味しいですよ、凛。さすがです」
やった…！わざわざ早起きして作った甲斐があったものね！心の中でガッツポーズしながら
「そう？それは良かった。まだまだ沢山あるからゆっくり食べましょう」
少し遅めのお昼休憩が始まった。さて、この後はどこへ行こうかしら！

☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆

夕暮れ、帰路につく。昼食の後、カフェに行ってゆったりした後に書店に行ったりと充実した時間を過ごした。

「凛」

ライダーが立ち止まる。私も足を止めて振り返る。

「どうしたのよ、ライダー。改まっちゃって」

「今日、凛へ日頃の感謝を込めて恩返ししようと思ったのですが…申し訳ありません。また一つ貸しを作ってしまったみたいですね」

あちゃー、逆に気を使わせちゃったか…。うん、素直に伝えた方がいいわね。

「ライダー、その日頃の感謝の気持ち、忘れちゃダメよ?そういう気持ちが大事なんだから」

ライダーの手をそっと触れる。ライダーは少し驚いたみたいだけれどすぐにいつもの表情に戻る。

「気持ち…ですか…」

「今日一日、貴方と過ごせてすごく楽しかったわ。人によってお礼って変わってくるのよ。必ずしも物が欲しいとは限らないの。今回の私みたいに貴方とともにもっと親睦を深めたい、仲良くなりたいから今日一日私と付き合ってらう、っていうのもあるわ。

日頃の感謝している人の要望に応える。これも立派な恩返しの一つだと私は思うわ」
伝わってくれたかしら…。あくまで私の意見ではあるのだけれど。ライダーはなるほど…と頷いている、ちゃんと伝わったみたいね。
「凛」
「なーに、ライダー？」
「また、このように2人で出かけたりすることは…できますか？」
この時のライダーはまるで少女のように眩しく見えた。
「えぇ、もちろん！是非お願いするわライダー！」
こちらもとびっきりの笑顔で返す。始めは不本意をつくような形で強引にだったけど結果オーライよね、多分…。日は沈み、暗がりの中私たちはバスに乗り、衛宮君の家へ帰宅した。
☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆
「ただいまー！あー楽しかったぁ！」
「ただいま戻りました」
パタパタとやってくるのはーー
「おかえりなさい、姉さん、ライーー」
桜がフリーズする、それもそのはずよね！こんなライダーは見たことないはずだか

ら。
「ライダー…すごく似合ってる！可愛い！」
桜の純粋な反応を見てライダーは恥ずかしがっている。いいわねぇこういうのは…。ちょっと意地悪したくなるケド…良い雰囲気だから邪魔者はそっと退場…。
「ありがとう、桜。これは凛が選んでくれたのです、私のために」
「姉さんが…ふふっ、そう」
玄関からキャッキャッとはしゃぐ声が聞こえる。うん、あの時無理矢理でも連れて行って正解だったわね。その場をそっと離れた私は茶の間に入る。
「おかえり遠坂、随分と遅くなったな」
と声を掛けてくるのはこの家の家主であり、台所のリーダー衛宮くん。見た所、絶賛料理中のようね。
「そうね、ちょっとはしゃぎ過ぎたかしら」
と言った後に衛宮君がふふっと笑う。
「…なによ、その笑いは」
「いや、悪い。あんまりにも満足そうな表情を遠坂がしてたんで…ついな。久々に見るもんだから」
…そういうとこだけは鋭いわね、衛宮君。

「そうね～、久々に満足いくお出かけだったから…あっ、士郎暇なら玄関に行ってライダーを見ておいた方がいいわよ～」
「?:そうか、じゃあちょっと…」
　夕飯の支度がひと段落したところだったみたいで衛宮くんは玄関に向かうと…桜と同じような反応をする。
「ふふっ、今日は本当に楽しかった」
　夕飯前の衛宮くんのお家の玄関ではライダーの話で大盛り上がり、茶の間からチラッと見た感じだと、ライダーは恥ずかしそうだったけどまんざらでもなさそうね。
「…ちょっと、そこの集まりに私も入れなさいよ～!」
　と私も参加する。今日の夕食は少し遅くなりそうね。
　今日も衛宮くんのお家は平和ですよ…っと!

トランプで虎乱舞

「セイバーちゃん!!!こうなったら私とさしで勝負よ!!!」
納得がいかないと言わんばかりにセイバーに勝負を挑むのは藤ねえこと藤村大河。一応俺の姉貴の立ち位置にいる。
「この勝負に今日の夕食のおかず一品をかけるわ！」
…ああ見えても教員である。教員は生徒の模範となる行動を取るべきじゃなかったのか、藤ねえ…。しかもがっつり賭け事だし。
「ほう、負けた方は今日の夜空腹で喘ぐというわけですね」
セイバーは冷静に分析する。藤ねえはフッフッフッっと余裕の笑みを浮かべながらセイバーを挑発する。
「あら、セイバーちゃんにはこの勝負は厳しいかしらねぇ…？だって空腹で喘ぐなんてセイバーちゃんはなりたくないもんね～？」
藤ねえはどうしてもセイバーと勝負がしたいらしい。効果は抜群でセイバーはやりましょう、と立ち上がる。しかし、藤ねえは一つ大きなミスを犯している。
「今日の夕食で喘ぐのはあなたです、大河。おかず一品がかかっているのであれば私も

全力でこの勝負に挑みましょう」
ーーセイバーを煽りすぎたことだ。こうなったセイバーもう誰にも止めることはできない。…まぁ隙を見て俺が家主権限で救済してやればいいだろう。
「では始めましょう、大河」
「えぇ…負けないわよ～！」
…なぜこうなってしまったのか、事の発端は少し前に遡るーー。
☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆
お昼を食べ終わった茶の間、おれはせっせと台所の掃除を行う。と言っても軽くだが。そんな中、桜がある提案をする。
「そうだ、たくさん人がいる事ですしみんなでトランプをしませんか？」
今日は衛宮家に住む（？）住民全員が茶の間にいるという珍しい状況である。
「そういえば、トランプもそうだけどみんなでボードゲームとかした事ないな」
台所を掃除しながらふと口にする。
「先輩もトランプ参加します？」
「ん参加したいのは山々なんだが…台所の掃除が終わるまで俺抜きでやっててくれ」
客観的に鑑賞するのも面白そうだ。こうしてトランプ大会が始まったのである。
「あ”ぁ”～!!な”ん”て”え”え”え”…」

今にも泣きそうな顔で叫ぶのは藤ねえ…みんなでかれこれもう２０回目だろうか？連続最下位記録を更新中である。こんなに最下位になり続けるのはもはや才能と言える。

「も、もう一回よ…！次は勝てそうな気がする…！」

藤ねえの強い要望により２１回目が始まる。セイバーが藤ねえのカードを抜く…のだが

「…」

セイバーが一番右のカードを引こうと手をかけようとすると

「…！」

なんという事でしょう、藤ねえは満面の笑みである。

「…」

そっとその隣のカードをセイバーを引こうとすると

「…!!」

悲しそうな顔…まて藤ねえ、流石にそれはわかりやすすぎる。なるほど、藤ねえ隠し事は苦手だもんな…。

「セイバーちゃんは…サイキッカー?!」

悲痛な藤ねえの叫び、無情にもジョーカーは藤ねえの持ち札から移ることなく…

「あ”ぁ”ぁ”ぁ”…」
もはやここまでである。藤ねえは皆に背中を向けて悶絶している。それを見かねた桜が違うルールでのプレイを提案する。
「じゃ、じゃあポーカーなんてどうでしょうか藤村先生」
「そ、そうね…ポーカーなら…」
なんだっけ、デジャヴ?フラグ?…どちらでもいいがなんとなく結末が俺には見えた。
「な”～ん”～で”～さ”～…」
藤ねえ、それは俺のセリフだ、と突っ込みたいのを抑える。藤ねえはノーペアに次ぐノーペア、やっとワンペアかと思いきや他の人はア以上…もうこれ才能でいいよな、そうしよう。連続最下位の人がいる中で絶対王者がいる、それはーー
「大河も大概ですがセイバーの引きの強さも異常かと」
と本音を漏らすライダー。そう、絶対王者はセイバーである。ポーカーでは今のところ普通にフルハウスだったり、4カードと、もはや無双状態である。
「私の直感はAクラスなので」
…ドヤ顔である、遠坂曰く本来のセイバーの幸運のパラメータも高いとか言ってたな。ん?これセイバー以外の人勝ち目がないのでは…?

と、こんなことがあって夕食のおかず一品をかけたポーカーが始まったのである…。

☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆

ディーラーはライダーがやってくれることに。結末が知りたくなり俺は一時作業を中断する。

「…言い忘れていましたが3勝先にした方が勝ちです。特に大河、恨みっこは無しでお願いします。」

念には念をと釘をさすライダー。うんうんと藤ねえが頷くのを見てライダーがカードを5枚配る。お互いにカードをめくって手札を見る…お?どちらも顔が渋いな。

「ライダーさん、2枚交換よ!」

先に動いたのは藤ねえ。交換した手札を見てーーお、どうやら今回は何かしらが揃ったようだ。一方のセイバーは

「ライダー、オールチェンジです。5枚ください」

ナニィ?!5枚交換?!正気かセイバーー…。そして第1戦目の結果はー

「ふっふっふっ、これが私の本気よ!セイバーちゃん!!」

藤ねえは…3カードか。セイバーは…

「申し訳ありません大河、私は4カードです」

…はい?手札全てを交換したら4カードだって?!冗談じゃない?!…あっ藤ねえの意

識が遠くにいってるなあれ。
「さぁ、次へ行きましょう」
　セイバーのスイッチが完全に入っている。もうやめてセイバー！藤ねえのライフはとっくにゼロだぞ！そしてあっさりとセイバーがストレートで3連勝を決めた。
「私の方です、大河。約束通り今日のおかずは私がいただきます」
「うわ～ん！セイバーちゃんの鬼！悪魔ぁ！」
　子どもか。さて、そろそろ俺も動くとしますか。
「はいそこまで。なんでいつのまにか賭けポーカーになってるんだ？家主権限で賭けた物の取引は無効とする」
　ちらっと藤ねえを見る。予想通り満面の笑みで何事もなかったようにするが…そうはさせない。
「たーだーし」
　藤ねえの動きがピタリと止まる。
「生徒の模範となるべき先生が生徒の目の前で賭け事とは…しかも言い出したのは先生である藤ねえだって話を聞いたんだけど？」
　藤ねえは凍ったように微動だにしない。…これはお灸をすえるべきだろうな。
「よって、藤ねえだけおやつは抜き！藤ねえの分のおやつはみんなで分けて食べる」

家主特権をこれでもかと振るう。
「えっえっ、う、嘘よね士郎？」
「藤ねえ…俺は嘘言わないぞ」
藤ねえはその場で背を向けて横になる。これを機にやらないように！
「セイバー、次こうなりそうだったらセイバーも藤ねえを止めてやってくれ」
セイバーはすいません、と謝りながら
「どうしても勝負事になると熱くなってしまうので…あと今回は、不覚ながら大河の挑発に乗ってしまったのもあります」
「大丈夫セイバー、あれは誰でも怒る。藤ねえはこれを機に反省すること！いい？」
「ひゃい…もうしましぇん…」
やれやれ、反省しているようだし少しおやつをあげることにしよう。
「トランプで虎乱舞（トランプ）ってか…。しかしまぁ、今回のセイバーは無双だったな。まさに敵無しって感じだ」
藤ねえは藤ねえで負けるたびに舞う…というか悶えてたな、しばらくトランプ見たくないとか言いそうだ。
「直感スキルはAクラスなので」
ドヤァ…とドヤ顔。写真撮って平常時のセイバーに見せたいなこれ。

「はいはい、セイバーの強さはよく分かったけど…今度は俺も混ぜてくれよ。一通り作業終わったからな」

賭け事は無しの純粋なトランプが始まる。結果はーー言うまでもない。

今日も我が家は平穏だ。

『友達』以上『恋人』未満

「セイバー、ちょっといいか」
「士郎ですか、どうぞ」
　扉を開けるとセイバーはファッション誌を読んでいた。
「士郎、それはなんですか？」
「あぁ、これか。新作のおやつだ、試作だからそんなに量はないし味の保証はできないけどな」
　ほう、と興味ありげなセイバー。そんなセイバーを横目にファッション誌に目をやる。
「セイバー、ファッション誌読んでたのか？」
「ええ、女の子たるものファッションには気を使うべきであるとテレビで言っておりましたので」
　なるほど、そういえばセイバーは今来ている服と甲冑以外見たことがないな。
「そういえばセイバーは聖杯戦争に2回参加しているんだろ？1回目の時、服はどうしたんだ？」

　セイバーは霊体化することができない。かといって甲冑で日中の街中を歩くのは不審者だしものすごく目立つ。
「1回目はスーツを着ていました。アイリ…いえ、1回目のマスターだった人曰く、とてもクールでカッコいいと言われました」
　セイバーの1回目の聖杯戦争のマスター俺の爺さん、衛宮切嗣だった。霊体化できないセイバーに服を買ったりとかなり苦労してそうだ。それと、とセイバーが付け加える。
「スーツを着てバイクに乗ってました」
　スーツにバイクか…。うん、クールなセイバーが簡単に脳裏に浮かぶ。これはこれで…ありだな…。
「…郎？士郎？」
「ん？あぁ悪い考え事していた」
　そっと試作で作ったお菓子に手を伸ばしながらセイバーは話を続ける。
「しかし、この時代にはいろんな服があるのですね。…士郎はわたしにはどんな服が似合うと思いますか？」
「うーん、そうだなぁ…」
　軽くファッション誌に目を通しながら似合いそうだ、と思った服をセイバーに着せた

姿をイメージする。
「セイバーは…その可愛いし、綺麗だからな…どんな服でも似合いそうだけどな…」
「しっ、士郎！」
なんだよ、と言おうと顔を顔を上げると目の前に顔を真っ赤にしたセイバーの顔がある。あ、この光景どこかで…。
「そ、そこまで褒めるのならばわたしの服を買いに今度新都へ行きましょう！」
「セイバーの服を選びに？いいぞ、いつ行こうか」
喜んで快諾する。
「で、では、明日はどうでしょうか？」
「ん、了解。桜とライダーに話しておいておくから家のことは気にしなくていいぞ」
恥ずかしさを紛らわすかのようにセイバーはおやつを頬張る。
「これは美味です。もちもちしててひんやりしている…、この時期のまだ少し暑さが残る季節にはもってこいのおやつです」
なかなかの高評価だ。作るのには手間がかかったがその分美味しそうに食べてもらえるのは作った甲斐があるというものだ。
「そりゃよかった、これはわらび餅って言うんだ。市販でも売ってあるんだけどーから作ってみたんだ」

よほど美味しかったのか、すごいスピードでわらび餅が消えていく。うん、これはまた作ってあげよう。
「ごちそうさまでした」
「お粗末様でした」
一連のやりとりをしながらセイバーが呟く。
「さっきまでファッションのことを語っておいてすぐに食い気に早変わりとは…我ながら情けないです」
はぁとため息を吐きながら机に突っ伏する。
「セイバーが食い気をなくしたら死ぬほど心配する、割と本気で。それにーー」
セイバーは顔を上げこちらを見る。
「幸せそうに食事をするセイバーが見るだけで幸せになれるから」
と続けるとセイバーはプイッとそっぽを向いてしまった。な、なんか悪いかと言ったかな俺…。
「そういうのはずるいです、士郎…」
「ん? 何か言ったか?」
「なっ、なんでもありません! では明日、楽しみにしておりますので!」
と言って準備があるとかなんとかで部屋から追い出されてしまった…。

「とりあえずライダーに言っておくか」
桜は部活動で不在、ライダーを通じて伝えてもらおう。
☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆
「了解しました、桜に伝えておきます」
「ありがとうライダー、助かるよ」
ライダーは書物をそっと閉じて続けざまに言う。
「士郎、明日のセイバーとのデートは凛や桜には言わない方がいいでしょう」
「え、というかデートじゃなくてセイバーの服を見にいくだけであってそれは…」
はぁと大きなため息をつきながらライダーは頭をかかえる。
「士郎は鈍いと思っていましたが、これほどとは…。士郎、貴方は明日セイバーと2人で服を買いに新都へいくのでしょう?それは立派なデートですよ」
「確かに…そ、そうだよな」
ライダーに言われて意識する。デートか、セイバーと…デート。
「ーーっ」
改めて意識する。明日は…しっかりエスコートしないとな。それからどこにいくかも決めないと…。
「…士郎」

「ひゃい?!」
　思わず変な声が出る。
「…ファイトです」
「あ、あぁ…頑張るよ…」
　ライダーも応援してくれてるんだし、頑張らないとな…。
☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆
　翌日、朝食を済ませてデートの準備をする。デートだと思う谷に鼓動が早くなる気がした。
「お待たせしました、士郎」
「俺も今準備を終えたところだ、行こうかセイバー」
　２人でゆっくり新都へ向かう。まずはどこに行こうかーー。
「こうして士郎と２人きりで過ごすのは…初めてな気がします」
　胸が高鳴る。確かに思い返してみれば休日にゆっくり２人で出かけたことなんてなかったな…。
「そうだな…昨日は楽しみで寝れなかった」
「わ、私もです…」
　セイバーが寝れなかったというのは珍しいな。よし!

「セイバー、今日は楽しい1日にしような！」
「よろしくお願いします、士郎」
そして今日のために考えたプランをセイバーに説明しながら信徒へ向かう。まず最初に向かったのはもちろん…
「はじめはここ、だな…」
新都でも洋服を取り扱うお店が密集しているエリアのある店舗の前に着く。セイバーに合いそうな服が多くありそうなところはここだ、と思いやってきた。
「士郎はここのお店で私の服を見繕ってくれるのですね」
「あぁ、昨日約束したしな。まぁ…あんまり期待しないでくれよ、あんまり自信はないからな」
早速中に入り選んでみる。セイバーもいろいろ見ている。うーん、これはちょっと地味すぎるな…。これは…セイバーには派手すぎるし…。と悩むこと1時間くらいか、あるものが目につく。
「お…これは…」
ミッドナイトパープルというのか、かなり暗めの紫色のワンピースで白色の部分が少しある。そっと手に取りセイバーの元へ。
「セイバー、これ着てみてくれないか？」

「分かりました。少しお待ちを」
　セイバーは試着室へ向かう。試着室の外で待つ事にしたがどうせなら靴も選びたいところだな、サンダルとか似合いそうだ…ん？
「アレが良さそうだな…」
　ワンピースのすぐそばにあったサンダルを手に取る。試着が終わったら一緒に履いてみてもらうか。
「し、士郎！そこに居ますか?!」
「おう、いるぞ」
　試着室のドアが開く…。ゴクリと息を飲む。
「…ど、どうでしょうか…」
　暗めの服のせいか、俺が慣れてないせいかセイバーの肌の色が目立つような気がした。白くて綺麗な肌、いつもよりスカートの丈が短いのでスラッとした足がよく見える。
「士郎…その…あんまりじっくりみられると…恥ずかしい…」
「わっ、悪い…」
　慌てて目をそらす。そ、そうだ感想を言わないとな…。
「似合ってるぞ…見とれてしまうくらい…な…」

直球だが俺の本心である。色気もそうだが似合っている、まだ少し暑さの残る今の季節にはちょうど良さそうだ。
「士郎が似合っているというのなら似合っているんだとは思うのですが…」
セイバーはスカートをぎゅっと握りしめる。
「こ、これは短すぎではないのですか？」
セイバーは恥ずかしいのか目で訴えてくる。確かにいつもの私服よりスカートは短い。
「でもセイバー、遠坂のスカートもそれくらいだぞ？」
というか穂群原学園の制服のスカートもそれくらいだったような…。
「慣れるまでに時間がかかりそうです…」
「セイバーが嫌なら変えてもいいんだぞ…？」
「いえ。せっかく士郎に選んでんらった服ですそれに…」
セイバーが顔をそむける。
「士郎の好みの格好であればなおさら…」
「ん？何か言ったか？」
「いえ！何も！」
セイバーはそういうとしばらく着ている服をまじまじと見てフフッと笑う。セイ

バーも気に入ってくれて何よりである。
「そうだセイバー、これ履いてみてくれるか？」
先ほど似合うかもと思って手に取ったサンダルを渡す。
「わかりました」
履いて立ち上がるセイバー。うん、よく似合っている。
「士郎はセンスがないと言っていましたが十分あると思いますよ」
「そりゃどうも。相当悩んだからな…遠坂とかだったら怒られそうだ」
「今日一日はこの姿で過ごします！」
そういうとセイバーは試着室を出ていく。
「ちょ、ちょいまちセイバー！まだお金払ってないから！」
バイトで貯めたお金でセイバーの洋服を買う。それほど高くはなかったので俺のお財布のダメージは少ない。そして何より――。
「～♪」
このセイバーを見るだけ買ってよかったと思う。セイバーは上機嫌だ。この後は…っと。
「セイバー、近くに新しいカフェができたんだがそこに行かないか？」
「そうですね、そろそろお腹も空いてきたのでちょうどいいころ合いかと」

カフェに入り食事を済ます。お互いがっつり食べずにそれなりに食べるだけにした。この後もまだ行くところもあるし、お腹いっぱいまで食べると移動がきついからだ。
「士郎、パフェがおいしかったです」
「本当か？俺は食べてないからまた今度来るか」
「ええ、その時はまたお供します」
笑顔で言葉を返すセイバー。食事をして落ち着いたがこのまま帰るのももったいない気がした。
「なぁセイバー、もう少し付き合ってくれるか？」
「はい、私は問題ないのでお付き合いします」
「よし、じゃあ次は――」
☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆
「ふぅ…さすがに疲れたな…」
「そうですね…羽目を外しすぎました…」
あの後、デパートで買い物、バッティングセンターやゲームセンターで遊んだりと大はしゃぎした。セイバーは負けず嫌いだからなおのことだ。
「でも今日は楽しかったな」
「ええ、私も楽しかったです士郎」

バスを降りる。あとは家まで歩いて帰るだけだが…。
「どうしたのです、士郎?」
立ち止まる、えぇい衛宮士郎!ここで勇気を出していなかったら後悔するぞ!
「あ、あのさセイバー…」
なんですか?と首をかしげるセイバー。口に出る寸前で言葉が詰まる。落ち着け落ち着くんだ…大きく深呼吸する。
「手を…つないで帰らない…か…?」
勇気を出し提案する。セイバーは…固まっている。
「せっかく2人きりだったのにさっきまでははしゃいでて…その…恋人みたいなこと…できてなかったし…」
何を言っているんだろう俺は。もうどうにでもなれ!とほぼやけくそだったのかもしれない。
「あぁもう!その、俺はセイバーと手を繋いで家まで帰りたいんだ!…ダメ…か…?」
セイバー顔を真っ赤にしてしまって下を向いてしまった。
「私も手を繋ぎたいです士郎…」
小声だったがはっきりと聞き取れた。言い出したのは俺だしここはしっかりエスコートしないとな。

「セイバー、手を」
　セイバーに手を差し出す。少しびっくりしたのか一瞬驚いた表情をするがすぐに笑顔になる。
「はい、よろしくお願いします士郎」
　この手をつなぐ時のセイバーの笑顔はとびきり愛おしかった。今まで見た笑顔の中でもとびきりに素敵でまるでーー。
「…世界に一つだけの花、かな」
「どうしたのです？士郎」
　セイバーはギュッと手を握りしめてくる。と同時に今まで自分が言った言葉を全部思い出し恥ずかしくなる。
「な、なんでもないぞセイバー。帰ろうか」
　目を少し反らしながらゆっくりと歩き出す。顔が燃え上がるように熱い。セイバーもそれを見てか、俺と同じように顔を赤らめる。
「はい、士郎。帰りましょう」
　お互いゆっくり歩く。何も言葉は交わさない…俺とセイバーの心にあるのはずっとこの時間が続けばいいのに、ということだった。

☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆

1秒でも長く、そんな思いが私たちが家に向かう足の速度を下げていく。家の前に辿り着いてもお互いに手を離そうとしない、というよりいつ離してもいいか分からないし、いつできるかも分からない。そんな気持ちが手を離したくないという私の気持ちに拍車をかける。

「セイバー」

士郎が私を呼ぶ。私は顔を上げる。この時、士郎にはどんな風に私の顔が見えたのだろうか。不安そうな顔、泣きそうな顔…とにかく私があまり良くない顔をしていたのは確実だ。

「また…一緒にデートしてくれるか?」

士郎は私に顔を向け、笑顔で問う。デート…そうだ、私は服を選んでもらうという口実で士郎をデートに誘った。士郎には直接デートをしましょうと誘ったわけではない。無自覚なのかもしれないけれど…それでもデートだと自覚してくれて私は嬉しかった。

「はい…!また一緒にデートしましょう」

そう答えるのが精一杯だった。それ以上の言葉が出てこなかった。そして私の方から手を離す。

「士郎、大河や桜が待っています。早く入りましょう」

「あぁそうだな」

今日のデートはこれでおしまい。でもまたいける、次があるから私は安心して手を離したのだ。
「士郎お願いがあるのですが…」
「ん？なんだ？」
「大河や桜にはサプライズでこの姿を見せたいので一度と部屋に戻りますね」
「あぁ、そういうことか、了解だセイバー。こっちは2人の気を引いておくよ」
私は部屋まで走り抜ける。部屋に入り扉を閉めて私は少しだけ涙を流した。悲しいわけではなく、嬉しくて嬉しくて、幸せを噛み締めながら涙を流した。
「こんなに泣いてると士郎に心配をかけてしまいますね」
涙を拭く。あぁ私は幸せ者だ…。
「セイバー、すまん。桜と大河が見たがっているんだが…大丈夫か？」
部屋に籠り過ぎたようですね。鏡で目が腫れていないか確認する。
「申し訳ありません、士郎。少し手間取ってしまいました、今行きます」
そう言って私は部屋を出る。大河や桜はどんな反応をするのか楽しみだ。
今日の士郎の家は平和で…幸せな日でした。

セイバーの『天敵』

「さて、今日の晩飯は何にしようか」
台所に立つのは俺、衛宮士郎だ。桜と交代でやっているが桜が部活で忙しい時は代わりに俺がやることになっている。今ではセイバーがテレビを、ライダーは雑誌を読んでいる。…仲が悪いのに同じ部屋にいるのは珍しいな。
「2人とも、今日の晩飯は何が食べたい？」
特にいいメニューがパッと思い浮かばなかったのですぐ近くにいた2人に聞いてみる。
「士郎、ハンバーグがいいです」
「焼き魚がいいですね」
おおう…2人とも全く違うもんを提案したな…。両者睨み合う、今にも火花が散りそうなくらいだ。
「セイバー、申し訳ありませんが今日は私の要望を通して欲しいのですが」
今日みたいに晩飯のおかずで喧嘩…まではいかないが言い合いになることは多々あることだ。できれば平和に、譲り合って欲しいなと思う俺と桜だがどうもセイバーとラ

イダーは馬が合わないようだ。
「ライダー、食べ物の以外でしたら譲りますが…ここは譲ることはできない」
セイバーは食べ物が絡むとものすごく真剣になる。というかもうほんと王様って感じだ。悪い意味でも良い意味でも…。
「おいおい2人とも落ち着いてくれ、どっちも作るから喧嘩する必要ないだろ?」
こんなところでセイバーとライダーが喧嘩を始めたら俺の家どころか冬木市まで壊滅しそうだからな…話題を変えて話を振ってみるか。
「そういえばライダーの好きな食べ物って聞いたことなかったな、何かないのか?」
ライダーは基本的に出てきたものはなんでも食べてくれる。ただ、これまでその中でもこれが良かったなどは聞いたことがない。
「特にこれと言って好きというものはありませんね、士郎の料理は全て美味しいので。まぁでも…そうですね、嫌いと言うわけではありませんが蛇が…食べれないですね」
「蛇か…うちで出ることは滅多にないだろうけど気をつけるよ」
そういえば、と思い出したようにセイバーが続く。
「ではこの前大河が持ってきて置いていった蛇酒は持ち帰らせた方が良いのではないでしょうか?」
何い?!いつのまにかそんなものを持ち込んでいたんだ藤ねえは…。

「そうだな、今度持ち帰られるとしよう。ライダーあと馬も…ダメなんじゃないか？」
　思い当たる節があるので聞いてみる。
「そうですね、馬もダメですね」
「了解、馬には気をつけるよ」
　少し離れたところでセイバーが不満そうな顔でこちらを見てくる。
「随分ライダーに良くしますね、士郎」
　怒ってると言うより嫉妬…なのか？
「何を言うんだセイバー、料理を作る身としては美味しか食べてもらうためにそういう情報は大事なんだぞ。第一、セイバーにも聞いただろ？」
「む、たしかに…記憶はあります」
　思い出したように言うセイバー。けど好きなものは聞いたことあるけど嫌いなものは聞いたことがない。
「だけどセイバーの好みは聞いたことはあるけど苦手なものは聞いたことなかったな、何かないのか？」
　セイバーも基本出したものは美味しく食べてくれる。だからこれと言って嫌いそうなのはなさそうなんだけど…。
「私に特に嫌いなものだったり苦手なものはありませんので安心してください、士郎」

フフン、と胸を張るセイバー。好き嫌いがないことにライダーに勝る、と自慢していると思うのだが、ライダーの場合は嫌いではなく食べれない、だからな。…というとセイバーが止まらなくなるので心の中で押さえておく。

「そういえば士郎、今朝大河がこれを置いていきまして」

冷蔵庫から発泡スチロールから取り出され、俺に手渡される。

「藤ねえから?どれどれ…」

ガムテープを剥がして中身を確認する。ライダーとセイバーは興味津々で覗いている。

「中身は…タコか」

しかもかなり元気で発泡スチロールを離してくれない。

「くっ…こいつ…なかなか活きが…いいな…っ!」

「士郎、夕飯でタコを使うのはどうでしょうか?鮮度が下がる前に頂いた方がよろしいかと」

「ん、そうだな。鮮度がいいやつは鮮度が下がる前に美味しく頂かないとな」

時間が経って素材の鮮度が落ちるのは料理を作る者として見逃せないからな。今日何かしらの料理で使ってみるか…ってセイバー…?

「ど、どうしたんだセイバー…そんなに距離を取って」

　さっきまでのワクワクしてたような雰囲気が一変、セイバーだけまるで宿敵に出会ったような…敵意を剥き出しにしている。
「ば、バカな…異界の魔魚(タコ)が何故ここに…?!あれは食べ物ではない…はず…」
　ええ…セイバー…?もしかしてだけどーー
「いけません士郎!早くそれ(タコ)から手を離してください!」
「セイバー…?タコが…苦手なのか?」
　セイバーが剣を構える。ちょちょ、待て待て!!!こんなところで暴れられたら困る!!!
「嘘だろセイバー…?この前たこ焼き買ってあげたらすごく美味しいって言いながら食べてたじゃないか!」
　あまりにも美味しかったのか俺の分まで食べてしまう食いっぷりを見たのに本体を見たらこの反応とは…
「なんと言うことだ…私はあの切っても切っても斬り伏せることができなかったあの魔魚を口にしていたと言うのか…!」
　セイバーが膝から崩れ落ちる。
「どうするのですか士郎…」
　うーん、このまま処分するのももったいないからな。
「セイバー以外のみんなに振る舞うようにするよ、処分するのはもったいからな」

このままなのもアレなので下処理を開始する。その後ろでセイバーが立ち上がりライダーに訴えかける。
「ライダーはあの魔魚を食べると言うのですか?!」
「わたしは海の幸であれば分別なくいただきますので」
そんなことを目にもくれず、俺はタコと格闘している。…ここで気付いていれば止めれたかもしれない。
「くっ…しかしライダー、あなたはオリーブオイルをかけ過ぎなのではないのですか?アレではおかずの風味が崩れてしまう!」
「食事は個人の自由でしょ、セイバー」
俺が下処理が終わる頃には2人は言い争いになっていた…こうなると俺には止めることが出来ない。
「いいでしょう、あなたとは今ここで決着をつけましょう」
「こちらも…そうさせていただきます」
2人とも戦闘態勢に入る。…ってうぉい!!まてまてまて!!!早まるなって!!!…だけど俺じゃ止められない…どうすれば…。
「先輩、お夕飯ですか?何か手伝えることがあればお手伝いしますけど…」
ナイスタイミング、桜。これで我が家…いや、冬木市が救われる。

「さ、桜…！いやこっちは問題ないんだが、あの２人を止めてもらえるか？」
「え？…あぁわかりました」
　なんとなく察したのか桜は２人の元は向かう。
「何をしているんですか、セイバーさんにライダー？まさかこの前のように何かを破壊するような喧嘩をするのではないですよね？」
　あ、桜がお怒りモードだ。あぁなると桜はお説教が終わるまで解放してくれない。２人にはいいお灸だろう。
「さ、桜…?!い、いえわたし達はただ…そろそろ日本の珍味に挑戦してみるべきではと話しておりまして…。そ、そうですよね、セイバー？」
「そ、そうです。その通りです。そういうわけなのです桜」
「そうですか…？私にはそのようには見えなかったんだけど？ライダー…？」
　後ろでお説教がはさまってる中、タコを調理する。シンプルに酢の物で頂こう。
「さて次は…」
　メインのおかずに取り掛かる。下準備をしながら後で嫌いなものをメモに書いとかないとなと思う俺であった。
☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆
～1時間後～

「出来たぞ～飯にしよう」
　この声と同時に手を開いている人が取り皿を出したり、お箸を置いたりと手伝いをするのが我が家のルールだ。
「それじゃ、いただきます」
　本日のメニュは小ぶりなハンバーグと焼き魚、それと食べれる人用に酢の物がある。
「セイバーさんは酢の物いらないんですか？」
　桜が気遣って良かったらと差し出す。
「ありがとうございます、桜。ですが今日はなんだか酢の物の気分ではなかったので大丈夫です」
　やんわりと断るセイバー。ちょっと前の慌てふためく姿を見て、食べないのかとは俺とライダーは言えない。しかしセイバーがタコが嫌いだったとは…後でこれもメモしておかないとな。
　食事を終え、皿洗いをする。横でセイバーが手伝ってくれているお陰でいつもより早く済まそうだ。
「セイバー、明日の食事なんだけど…」
「？明日は何か特別な日でしたか？」
「いや、そう言うわけじゃないけど…今日のお詫びと言ってはなんだがセイバーが食べ

たいものを作ろうかなと思ってさ」
お財布に大ダメージを与えるようなものは買えないが多少なら問題ない。今日の食事中のセイバーはいつもよりテンション低めな感じだったしな。
「ほう、少し考えさせてください」
うーんと考え込むセイバー。アレでもないからでもないと考えている。
「決まりました、士郎。明日の料理のメニューはーー」
顔を輝かせて話すセイバー。うん、やっぱりセイバーはこうでないとな。
色々あったが今日も我が家は平和です。

霊薬パニック事件

「シーローー…ウッ!!」
「おわっ…?! い、イリヤか…ビックリした…」
俺に抱きついてきた子は郊外のお城（イリヤ曰く別荘だそうだ）に住む魔術師だ。いや、見た目で判断できるわけないよな…子供のように見えるが魔術師としては超一流なのだ。で、ちょくちょく俺の家に来るのだ。
「今日はねー、士郎にプレゼントがあるの。日頃の感謝を込めてねー」
ニコッと笑いながら、はいこれと渡して来る。早速中身を開けてみる。
「これは…お酒か?」
普通じゃ見られないような装飾が施されている容器にブランデーに近いような色の液体が入っている。…見た目は完全にお酒だ。
「お酒じゃなくて霊薬。別に何か悪い効果があるわけじゃないわ、そうね代表的な効果としては魔力の回復とかかしら」
そういえば、イリヤの家には蒸留所があるんだっけ。ん?霊薬って蒸留所でできるのか?するとそこにセイバーが現れた。

「魔力のようものを感じてきてみれば…イリヤスフィール、これは…霊薬ですか？」
「そーよ、日頃の感謝を込めて士郎へプレゼントしたの」
　誇らしげなイリヤ。しかしセイバーは難しい顔をしている。
「士郎、あなたはもしかしたらこれは匂いでダメかもしれないです」
　マジか…匂いで…そんなに強烈なのか。
「無理して飲め、とは言わないわ。セイバーや凛が飲んでも問題ないから」
「サーヴァントも問題ないのですか？」
「大丈夫だと思うわ」
　セイバー飲む気だな…グラス持って来るか。
「へぇ…アインツベルン特製の霊薬かぁ…」
「…遠坂、お前いつのまに…」
　気付かないうちに遠坂まで来ていた。うちは集会所か何かか？
「リンも飲む？霊薬」
「あら、いいの？じゃあお言葉に甘えて…士郎ぉ～グラス２つ持ってきて～」
「はいはい、持ってきますよっと…」
　適当にグラスを用意する。封を切るとなんとも言えない感覚に襲われる。
「…確かにセイバーの言う通り、かなりきついな…」

正直、匂いだけでダウンしそうだ。遠坂はニヤニヤしながら俺をみる。
「衛宮君は匂いだけでダウンしそうねー」
「士郎、無理だけはしないように」
遠坂に煽られるがセイバーが釘をさす。大丈夫だセイバー、俺は多分飲むことはできない…まぁでもせっかく貰ったものだしな。
「飲むはできなさそうだが…せっかくの贈り物だし、舐めるくらいには…」
イリヤが霊薬の入っている容器を手に取る。
「2人ともどうする、水で薄めたりする?」
「私はそのままでいいわ」
「では、水で少し薄めていただけますかイリヤスフィール」
遠坂はそのままとは…変なことにならなきゃいいんだが。
「リンはそのままで、セイバーは水で薄めてねー、フンフフーン♪」
上機嫌で霊薬を注ぐ。この部屋に立ち込める匂いだけで酔ってしまいそうだった。
☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆
遠坂とセイバーはグラス、俺は2～3滴くらいの量だ。
「それじゃ、かんぱーい!」
遠坂との掛け声とともに霊薬を飲む。2～3滴の量の霊薬を飲む…それと同時に視

界が歪む。
「うっへぇ…こりゃきついぞイリヤ…」
瞬間的なものであったが、俺にはきついのは確かだ。一方で前の２人はというとーー
「うーん、なかなかイケるじゃないこれ！なんだか不思議な味ね」
「はい、これは美味しいです。何かに例えるのは難しいですが少なくとも美味しいです」
と、大絶賛である。俺からすると前の２人がグビグビ飲んでいるのは異様としか思えないのだが…。
「イリヤ、霊薬に相性とかあるのか？」
「相性はないけど弱い強いはあるわ。士郎はものすごく弱いんだと思う」
う…直球で言われると少し傷付くというか、その飲めなくて悔しいというか…。
「「…」」
ん…？なんか２人の様子がおかしいような…。顔が赤くないか…？
「しろお…」
セイバー?!なんだその声?!聞いたことない…って待て待て!!!
「セイバー服!!服を脱がない!!!ここは風呂場じゃないぞ!!!遠坂も何か言って…」
遠坂に助けを求めるが…遠坂も…セイバーと同じ状態だ。２人が服をはだけさせながら徐々に距離を詰めてくる。う、嘘だろ…まさか…

「な、なぁイリヤ…さっきの霊薬って、まずいものなんじゃ…」
流石にこれはおかしい。霊薬を飲む前はこうではなかったのだからなおのことだ。
「お、おかしいわね…そんな害のあるようなものじゃ…あ」
イリヤが容器の入ってた箱の蓋を取り上げてある文字を見つけてフリーズする。…なんだか嫌な予感がするな…。その蓋をイリヤがそっと俺に手渡す。なになに…
「愛の霊薬…?」
…脳裏に様々なことが浮かぶ。これから起こること、そしてその霊薬の効果が切れた時のこと。
「ーーいかん」
このままでは命がない、と俺の脳が告げている。少なくとも遠坂からはガンド、セイバーからは竹刀での強力な一撃。目の前のセイバーが…服を…
「せ、せせセイバー?!待て待て待て待て!!!」
見える!!いや何とは言わないけどいろんなものが!!!というか目が据わってるよね?!?!獲物を狙う目だよね?!?
「イリヤたすっ…」
イリヤに助けを求めようとするが…イリヤがグビグビ霊薬を飲んでいる。ーーなおのことやばいなこの状況。

「しーろーおー…諦めてそこに座りなさいー」
あの遠坂が服をはだけさせて…っておぉい!!だからやめろって!!!!
「まずいぞ、これは過去最高にまずい」
まずは俺を狙う3人。次はこの如何わしい光景を桜か藤ねえに見られた時の対処。この二つが重なると俺は…命がない…。
「逃げないと…!」
まずは部屋の脱出だ…しかし、回り込まれた…あぁ終わった。逃げ場なし…。
「士郎…」
「しろお…」
「シーローウー…」
3人が俺を囲む…ここまでか…俺は諦めて目を瞑って流れに身をまかせることにした…。
☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆
どれほど時間が経っただろうか…特に何も起こらないので目を開けてみる…。
「…んにゃっ?」
「…」
顔が赤くなっていない…効果が切れたのか?助かったーー

「ーーっ」
顔を背ける。正気に戻ったが服は元に戻っていない。
「士郎、なぜ顔を背けるので…?!」
「衛宮君、なんで目を…?!」
二人とも気付いたみたいだ、早くその服何とかしてくれ…。
「セイバー、遠坂…その霊薬の影響でその…」
いろいろなことが一度に起きて言葉がまとまらない。そ、そうだイリヤは…
「はぁ…霊薬への耐性が高いのもまた問題ね…」
どうやら効果がすぐ切れてようだ、よ、良かった…ん?殺気を感じ後ろを振り向く。
「2人とも…?ど、どうしたんだよ…?」
顔を少し赤らめながら怒りの眼差しを俺に向ける。
「えーみーやーくーん?」
「士郎…」
「ち、違う誤解だ!これは霊薬の効果でその…俺がやったわけじゃないんだ!」
遠坂はガンドの構えを、セイバーはすぐそこにあった布団叩きを持つ。あぁもうなんでさ?!と、とにかく誤解を解かないと俺の命はない。
「セイバー、どうしましょうか?」

「そうですね、凛…まずは士郎も同じ目にあってもらうべきではないかと」
「なんでさ?!」
どうしてそうなる?!それじゃ根本的な解決にはならないだろ!
「い、イリヤ俺はどうしたら…」
イリヤは首を振って諦めなさいとアピール。イリヤのせいだと言っても聞いてくれないだろうしそんなことはそもそもできない…。あぁ…くそ!こうなったら…!
「あ、士郎!待ちなさい!!」
「待ちなさい士郎!!」
全力で部屋から出て走る。逃げるが勝ちだ!…逃げきれるとは思えないけど…。この後どうなったかはーー察してほしい。
あとイリヤ、次からはちゃんと確認して持ってきてくれ…。
今日のわが家は騒がしい1日だった…いてて…ったく容赦ないんだから…。

One on one

「おや…これは…」
私、セイバーは夕方に言われた食材を買いに街に出たついでに何気なくあるパンフレットわもらった。
「わくわくざぶーんに新施設、新スポーツ…ですか」
そのスポーツの内容はアーチェリーハント、というものらしい。初めて聞くスポーツです。
「アーチェリーハントの施設がわくわくざぶーんに?おれは全然いいぞ」
土郎に相談してみたところ、なかなか良い反応がもらえました。しかし、大きな問題が。…それは人数の問題である。これはチーム分けして行う競技なので少なくとも４人はほしいのです。
「私とはしてはまず少人数で行って楽しそうであれば大人数で行きたいところなのですが…」
「確かに、楽しかったら大人数で行きたいよな。下見で俺とセイバー以外にあと二人か…」

うーんと士郎が悩む…不本意ではありますが…背に腹は変えられません。
「士郎、ライダーはどうでしょう？おそらくですが快諾してくれるかと」
「ライダーか、いいな！早速誘ってみよう」
あと一人…桜はどうなのでしょうか、予定が合えば一緒に…。桜とライダーのいる部屋をノックする。
「俺とセイバーだけど、二人ともいるか？」
「先輩にセイバーさん？はい、どうぞ」
「なぁ二人とも、突然だけど明日は…暇か？」
桜とライダー目を合わせて何かあるのだろうか？と考えている。
「私は特にないけど…ライダーは？」
「私もありません。士郎、何かあるのですか？」
「新都のわくわくざぶーんに新しい施設を置くみたいでな、それを下見がてらやりに行こうと思うんだが…あと２人足りなくてさ。よかったら行かないかなーと」
わぁ、と目を輝かせる桜。ライダーも少し笑顔に見える。
「競技はアーチェリーハント、というものです。当たっても痛くない矢を使ってドッチボールをするような感じです」
大雑把な説明をする。もっと細かいルールはあるが少人数なので状況次第で制限を

設けるつもりだ。
「弓道部の腕の見せ所ですね！」
桜は嬉しそうだ。たしかに私とライダーは桜と士郎から弓の扱い方を教わらないといけないくらいの初心者だ。
「ただ動きながらだから難しいと思うぞ。まぁそういう訳だからよろしくな」
「はい、楽しみにしてますね」
そっと部屋を桜たちの部屋を後にした後は明日のことでドキドキワクワクしていた。
☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆
４人で新都へ…前を歩く女の子３人の後ろをついていくように歩いていくのは俺だ。よく考えてみれば初めて４人で出かけるし珍しい組み合わせだ。奮発してお弁当も作ったし、今日は中々楽しめそうだな。
「これはこれは、皆さんお揃いでどうしたんですか？」
わくわくざぶーんのオーナーである、金ピカの王様…の子供の頃の姿だ。これがどうしたらあんな王様になるのか未だによく分からない。あいつにはあいつなりの考えがあってあぁなったんだろうけど…まぁ今はその話は置いておいて。
「わくわくざぶーんに新施設ができたって聞いてさ。お試しに４人でプレイしに来たんだ」

「ありがとうございます！楽しんでいってください」
それと、と金ピカの王様が付け加える。
「例えサーヴァントが全力でやっても壊れないようにしてあるから、好きなだけ力を解放してもいいよ」
…嘘だろ…。脳裏に浮かぶはボコボコに打ちのめされる俺の姿…。あとライダーとセイバーの熾烈な争い、か。
「あ、ありがとう…楽しんでくるよ…」
お金を先に払い、指定のフロアまで移動する。…行きて帰れますように…。
☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆
「おぉ～……！」
４人揃って驚きの声を上げる。人工芝に適度に置かれたバリケード、そして弓と矢、顔に直撃しても怪我しないようにフルフェイスマスクまで用意してある。
「こりゃすごいな…」
思わず本音が漏れる。と、そこにセイバーが来る。
「士郎、あそこの的を撃ち抜くことは可能ですか？」
指を指す方向にはそれなりの大きさの窓がある。距離は大体２０ｍくらいか、これなら多分いける…。

「当たるかどうかは別として、近いとこまではいけると思う」
セイバーから弓と矢を受け取ると静かに弓を引く。弓道部の時に使っていた弓とは違う感触だが、弓がしなるのを感じられた。集中してーー放つ。矢は少し放物線を描き、的に命中した。
「ふう…久々だったけど意外となんとかなるもんだ」
そっと弓をセイバーに返す。セイバーは目を輝かせながら俺に問う。
「私も士郎のようにできるでしょうか?」
「セイバーは飲み込みが早いからな、今日だけで俺を超えていけるんじゃないか?」
正直、セイバーはスポンジが水を吸うかの如くルールやコツを吸収する。俺くらいの実力ならばセイバーは今日だけで超えれると思う。
軽く練習をして二人ともある程度扱えるようになってチームを分ける。で、俺とライダーチームと桜とセイバーチームになった。
「よし、じゃあ始めようか」
フェイスマスクをつけて矢を散らばらせる。矢は拾って使えるので移動しながら入手して撃つ、という感じになる。復活ルールもあるが人数は少ないので今回は無し。
「士郎、私たちは本気を出してもいいのですか?」
「いいけど…俺たちが死なない程度ってか怪我しない程度で頼む…」

サーヴァントの本気なんて受け止めるわけがない。まぁ多少力を加減してくれればなんとかなるはずだ。
「士郎、私も頑張りますので」
ライダーは表情にこそ出さないがやる気のようだ。無事に帰れるかなこれ…
「いいかー、当たったら即フィールドから退場で安全なところで観戦だからなー」
熱くなりすぎて、当たっても退場しないで居続けないようにと念押ししてスタート地点へ向かう。
「さて…」
気合いを入れる。遊びとはいえ全力でやらないとセイバーに怒られそうだからな…。
「士郎…投影魔術はこの矢には使えないのですか?」
とライダーが言う。武器ではないが…イメージするーーうん、問題なさそうだ。
「うーん、できないことはないと思うけど。なんでだ?」
「何も対策無しではセイバーを驚かすことはできないでしょう?だから複製された矢で一芝居できるのではないでしょうか?」
…なるほど、俺の投影魔術は材質も変化できる。ライダーの伝えたいことが分かった。
「了解、だけど桜がいるからな。今は投影魔術なしでやらせてもらう」

ライダーは微笑み返すとすぐに真剣な顔になる。ーー完全に戦闘態勢だ。頼むから全員怪我なく終わりますように…。試合開始合図のブザーは自動でお互いのチームが準備が整ったら自動でカウントダウンをする。

「両チーム準備完了を確認、カウントダウン開始します」

始まる…気合いを入れる。これはあの時のように殺し合いではない、だけど負けたくない…本気でやってやる。やれるとこまでとことん…!

「ーー3・2・1…」

息を飲む。そして合図と同時に

「ーースタート」

「セイバー相手にどこまでいけるかな…!」

全速力で前線へ出る。こうして試合の火蓋が切って落とされたのである

☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆

「っはぁ〜〜…ちょいと休憩…」

何試合かやった後の俺はたまらず人工芝に倒れる。多少の加減をしているとはいえセイバーは…

「風よ、荒れ狂え!」（風王鉄槌）

風を撃ち出す。俺の放った矢はたまらず風に耐えきれず地面に落ちる。これを解消

するには近づいて矢を放つしかないがーー
「そこです！」
桜の矢が襲来する。桜の矢を対処しているとライダーと撃ち合っているセイバーもタイミングをずらして矢を放つ。俺も手加減しているわけではないが対処が間に合わない。あと、いまも弓道をやっているという意味で全体的に桜が勝る。制度は俺の方が若干上のようだが、速度と人数差で負ける。ライダーも応戦するがセイバーの風に苦戦する。
「セイバーの風はとんでもない脅威だな…」
何か対策を考えねば、と休憩しているとサーヴァント同士で一騎打ちしていた2人が帰ってくる。
「なかなか良い試合でした、セイバー」
「貴方もなかなかの強敵でした…」
お互いに称え合う。こういう時は仲がいいよな、あの2人は。
「士郎、お腹が空きました」
っと、もうそんな時間か。許可は取っているからここで飯にするか。
「了解、じゃあ飯にするか」
持ってきた弁当でちょっと早いお昼休憩にする。

「全力に近い力でプレイするのはスッキリしていいですね」
弁当に舌鼓しながらセイバーは笑顔で話す。まぁ確かにサーヴァントである以上、常にそういうのに気を使わねばならないから尚のことだろう。
「私もセイバーと同意見です、たまにはこういうのも良いですね」
お茶を飲みながらリラックスした表情のライダー。しかしあんなアクロバットな動きは聖杯戦争以来に見たな。…よし。
「セイバー、この後一騎打ちしたいんだが」
このまま負けてばかりいられない。セイバーに一騎打ちを申し込む。
「ほう…いいでしょう、ご飯を食べて少ししたら一騎打ちです、士郎」
セイバーは嬉しそうに答える。とそこに桜が堪らず注意する。
「せ、セイバーさん、さっきのライダーとの一騎打ちのような力ではしないでくださいね？その…先輩は生身の人間なので…」
「分かっています、士郎には手を抜くつもりはありませんが威力は落としましょう」
昼食後少しゆっくりしてからセイバーと俺はそれぞれのフィールドのスタート地点に立つ。さっきまでの試合では桜もいたから投影魔術は使わなかったがセイバー相手なら存分に使える。
「あとはセイバーに通用するかどうか、か」

サーヴァントに人間が通用するわけがないのは百も承知だ。でもセイバーにあっと言わせたい一心でこの一騎打ちを申し込んだのだ。さっきは桜もいたから投影魔術は使わなかったが…セイバー相手なら問題ないだろう。

「カウントを開始します」

桜とライダーが見守る仲、カウントダウンが始まる。

「3・2・1…」

スタートも同時に投影を開始する

「スタート！」

「投影（トレース・オン）、開始！」

投影をしながら一気に距離を詰める。距離はおよそ15m、近いようで遠い距離だが——三本の矢を同時に撃つ。精度は落ちるが進行方向に放つだけでこいつは役に立つ。

セイバーはそれを確認し剣を握り、風で矢を迎撃する。

「風（風）よ、吼（王）え上（鉄）がれ（柏）！」

迎撃され落ちる矢が地面に落ちたと同時に閃光のようにまぶしく光る。

「ちぃっ…」

セイバーの視界が眩むうちにさらに距離を詰め、滑り込む。

「もらった…！」

先ほど撃たなかった本物の矢を超至近距離で放つ、がセイバーは跳躍し放った矢を回避する。１ｍ未満で放った矢でも回避されるのか…。となると…隙を突くしかないか。
「見事な作戦です、士郎」
フッと一瞬笑うとすぐに真剣な表情に戻る。
「申し訳ありません、士郎。少しあなたを見縊っていたようだ。あなたが本気で来るのであれば私も本気で行きましょう」
「あぁそうしてくれ。じゃないとセイバーに勝ったとは言えないからな。ただ、死ぬような威力でやるのは無しだからな」
「ええ、もちろん。さぁ――始めましょう」
お互いに少しずつ距離をとる。先に仕掛けたのは…
「フッ…！」
セイバーだ。バリケードに隠れ、回避する。お互いに位置が把握されないように移動する。
「投影（トレース）、開始（オン）！」
投影した矢を放ちながらたまに本物の矢を放つ。セイバーの矢も少しずつ精度が上がっているのがわかる。早めの決着をつけなければ俺に勝機はない。
「…ッ」

まずいな、押されている…。こうなったら最後の手段だ…！
「はぁっ！」
矢を3本同時、1本と変則的に連射する。これで風を起こすのを阻止する。
「いまだ…っ」
セイバーの真横へ行く。お互いに無防備で狙うは敵のみ。
「ここだ…っ！」
「決める…っ！」
同タイミングで矢を放つ。一瞬時間が止まっているように感じた。お互いに放った矢がお互いの体にあたる。
「…引き分けか」
「…そのようですね」
お互い息を切らしながら寝転ぶ。久々に全力で動いた気がする。
「引き分けだけど…なんだかスッキリしたな」
「サーヴァント相手にここまでやれるとは大したものです、士郎」
修行の成果でしょうか、と嬉しそうに話す。セイバーとの修行のおかげで間合いや立ち回りの戦術が多く立てることができるようになった。もう必要になることはないと思っていたが、まさかここで役立つとは。

「いい勝負でした、士郎。最後にみんなでやって帰りましょう」
「あぁ、そうだな」
桜とライダーがやってくる。
「士郎、見事でした。引き分けとはいえ、士郎の戦術的勝利ではないでしょうか」
「先輩すごいです、セイバーさんを相手にあそこまでやるなんて！」
はは、そんなことはないさと呟きながら
「最後にみんなでやろうか！」
セイバーとの1戦の後で体力は限界に近いが、もう1戦ならギリギリいけるはずだ。
さぁ…ラストゲームと行こうか！
☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆
帰りのバスの中で静かに寝息を立てるのは私のマスターである衛宮士郎。いえ、マスターだったというべきでしょうか。桜もライダーに寄りかかって寝ている。
「全く、2人もはしゃぎすぎです」
ライダーはやれやれと二人の寝顔を見ながら話す。
「しかし、今日は楽しかったです。同行ありがとうございます、ライダー」
ライダーは驚いた表情で私を見る。
「まさか、あなたからそのような言葉を聞けるとは思いませんでしたよ、セイバー。でも

そうですね、私も感謝しなければいけませんね。私も楽しかったですし、桜も楽しそうだったので」
「また、こういうのにはいきたいですね」
「ふふ、そうですね」
二人して微笑みながらマスターを見る。相変わらず幸せそうな寝顔である。と次が降りるバス停のようだ。
「ライダー、どうしますか?」
「私は背負って帰りますが…土郎は恥ずかしがるかもしれませんね」
「むぅ…しかし起こすのはかわいそうなので私も背負って帰ります」
あとで土郎から恥ずかしいとか言いそうですが仕方ありませんね。背負って家に帰る。
「今日は楽しかったですよ、土郎。今度は凛やイリヤスフィールもつれていきましょう」
寝ている土郎に話す。もちろん反応はないが、独り言のようにつぶやく。イリヤスフィールを連れていくならアーチェリーハントではないところになるでしょう。でもそれはそれでいいのです、みんなが楽しければそれでよいのです。ライダーとともにゆっくりと土郎の家へ帰る、今日も我が家は平和です。

衛宮先生のお料理教室 √Ｓａｂｅｒ

今日は休日、いつものようにみんなで朝食をとるが学校の時のような慌ただしさはなく、ゆっくり朝食を楽しんでいた。
「士郎おかわりをお願いします」
「士郎～、私も～」
相変わらずセイバーと藤ねえはよく食べる。これだけ食いっぷりがいいと作る側としてはとてもうれしい。藤ねえはご飯を食べ終わると
「それじゃ、お姉ちゃんは学校へ行ってきまーす！」
「あれ、藤ねえ今日は学校休みだろ？」
「部活があるのよ～。あ、桜ちゃんも遅れないように来るのよ～」
と言って藤ねえは行ってしまった。桜も続いて学校へ行く。桜は弓道部の部長なので早めに行って準備があるようだ。
「あ、桜これ今日の弁当だ」
朝作った弁当を渡す。休日練習がある時は俺が桜の弁当を作っている。桜は笑顔でお弁当を受け取る。

「ありがとうございます、先輩！それじゃあまたね、行ってきます」
「ああ、気をつけてな。練習頑張れよ！」
と応援して桜を送り出す。あれ、ライダーも出かけるのか。
「あれ、ライダーも出かけるのか」
「はい、今日は弓道部のお手伝いをと思いまして」
「あー、じゃちょっと待ってくれるか」
急いで台所に戻り、昼食としてつくっておいたおかずとご飯を弁当箱に詰め、弁当箱をナフキンで包む。
「お待たせライダー。これ今日の昼食だ」
「おや、申し訳ありません士郎。ありがとうございます、行ってまいります」
桜を頼んだ、と言ってライダーを見送った後片付けのために台所へ…と思ったらセイバーが食器を洗っていた。
「セイバー、俺がやるからいいんだぞ？」
セイバーは食器洗いをしながら俺に話す。
「料理は作れませんが…食器洗いならできますのでまずはそこから始めようかと思いまして」
セイバーが料理に興味を…？俺でいいなら教えれるが…

「セイバー、今日は料理作ってみるか？」
「私にもできるのでしょうか…士郎みたいにおいしく…」
しおらしくなるセイバー。うーん、俺もまだまだけどそんなに理想は高くなくてもいいと思うんだが。
「誰だって初めは下手だ、セイバー。でも練習すれば俺みたいにおいしく作れるようになるだろうし、それに――」
「それに…？何ですか士郎？」
「…笑うなよ？俺はセイバーと楽しく一緒に料理したいから…その、練習してほしい…」
最後の方はもう聞こえてないんじゃないかというくらい声は小さかった。
「な、なるほど…士郎がそういうのなら…私も頑張れます…」
セイバーまで…二人して顔を赤くする。えぇい、このままじゃ埒が明かない。
「と、ところでセイバーは初めての料理は何が作りたいんだ？」
まずは何を作るかを決めないと…材料が無かったら買い物に行かなければならないからな。
「そうですね、まずは卵焼きがよいと書物にありました」
セイバーの部屋に料理本ってあったっけ…まぁいいか。卵焼きか、材料は…っと
「卵もあるし買い物の必要はないな。じゃあさっそく今日の昼作ってみるか」

「はい、頑張りますね士郎」
笑顔で言葉を返すセイバー。お昼までお互いに作業をすることがあったので１２時頃を目処に台所に集合にした。今日のお昼をつくるときは料理教室みたいになりそうだな。
☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆
「お待たせしました、士郎」
セイバーの服を汚さないためにエプロンを貸したが…いかん、似合いすぎる。
「セイバー、よく似あってるぞ」
うん、セイバーも上機嫌だ。今度セイバー用のエプロンも調達してこないとな。
「ではよろしくお願いします、士郎」
「了解、じゃまずは材料だ」
冷蔵庫から卵を3つ取り出す。
「セイバー、卵は割れるか？」
これができなければ困るのだが…
「お任せを。卵かけご飯を食べているうちにコツをつかみましたので」
おぉ、きれいに割れている。そういえば確かにセイバーはよく卵かけご飯食べていたな。

「士郎、次はどうするのです？」
「うちは甘めの卵焼きにするから砂糖を入れるんだ。そのスプーン1杯の砂糖と一つまみの塩を入れたら、お箸でかき混ぜる」
　手際よくセイバーは調味料を入れてかき混ぜる。ある程度かき混ぜたら…。
「よし、セイバー焼いてみようか。四角のフライパンがあるだろ？」
「えぇっと…これでしょうか？」
「正解、じゃあ火をつけてフライパンを温めてくれ。ある程度温まったら油をひく」
　コンロに火を付け、少し待つ。チラッとセイバーの顔を見る。真剣に取り組んでいるというのは見てわかるけど、なんかこうものすごく気合いが入っているというかなんというか…。
「士郎、油の量はこれぐらいでよいのですか？」
　っと、いかんいかん。考えすぎていたな。
「ん、そのくらいでいいよ。で卵を流し込むんだけど、一気に入れるんじゃなくて薄く卵を引いて巻いていくんだ。一回だけお手本でやってみせるな」
　いつもよりゆっくりやる。セイバーはじっくりそれを見る。あんまりそうみられると…恥ずかしいな。
「っと、こんな感じだ。できそうか？」

「はい、何事も経験ですので！いざ」
　ではお手並み拝見、と。卵は…お、いい量だ。そして広げて薄く延ばして…いよいよ巻く工程だが。
「なるほど、こういう感じですね」
　セイバーはサクッとできてしまった。…意外と才能あるのでは…？セイバーはどんどん巻いていく。初心者とは思えない出来栄えだ…。そして普通に完成した。
「すごいなセイバー…これ初心者が作ったようには見えないぞ…」
「あ、ありがとうございます士郎…」
　褒められて嬉しさ半分、恥ずかしさ半分なのだろう。少し顔を赤らめてもじもじしている。
「よし、じゃあ食べやすいように一口サイズに切って盛り付けようか、セイバー」
「はい！」
　お皿にセイバー作の卵焼きを盛り付ける。お昼のおかずにはこれだけでは物足りない。
「セイバー、お昼のおかずをもう少し作ろうと思うんだが…」
　セイバーは邪魔だと思ったのか距離をとり、エプロンを脱ごうとする。
「セイバーも手伝ってくれるか？」

セイバーは動きを止める。予想外だったのだろう、少し困惑気味に聞いてくる。
「よろしいのですか土郎？私はまだ土郎のように上手くは…」
「いや、いいんだよ。セイバーの練習にもなるし、それに…その、セイバーのエプロン姿を見ていたいからな」
「そ、そういうのでしたら…お手伝いいたします」
嬉しそうにセイバーは何をすればいいでしょうか、と表情で聞いてくる。さて、今日の昼飯は何にしようか――
☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆
「はは、たくさん作っちまったな…」
「は、はい…そうですね…」
つい、作りすぎてしまった。その、一生懸命作るセイバーが可愛かったから…歯止めが効かなくてとは言えない。「とりあえず、食うか…残ったら夕飯に回そう」
まぁなんとかできるだろう、夕飯の登板も俺だからな。
「士郎」
「ん、なんだ？」
お箸でセイバーが自分で作った卵焼きをつかみ俺の前に持ってくる。これって…
「せ、セイバー…？」

「あ、あーんです…士郎」
　だ、だよな…この流れは…
「じ、自分で食えるよ」
「ダメです、士郎。始めて作った料理は士郎にあーんして食べさせるというのが目標でしたので」
　いつの間にそんな目標立てたんだ?!…でもあんまり断り続けるとセイバーが可愛そうだよな…恥ずかしいけど、誰も見てないしいいよな…
「あ、あー…」
「！士郎…！はい、あーん」
　くうぅ…死ぬほど恥ずかしい、誰も見てないとしても。
「どうでしょうか、士郎」
「ん…美味いよ、セイバー」
　普通に美味い、分量は俺が指定したとしても、焦げてないし…美味いな。
「それは良かった、ではもう一度あーんしましょう士郎」
「んぐっ?!」
　なんでさ?!1回だけじゃないのか?!あぁ、セイバーその顔はずるいぞその今すぐにも泣きそうな顔は！そんなの断れるわけないじゃないか…

「…あー」
諦めて口を開ける。
「ふふ、士郎…はい、あー…」
ん、とした瞬間に襖が開く。
「…」
「んぐっ?!」
桜にライダー?!なんで?!
「…桜、お楽しみを邪魔してはいけません…一度部屋に行きましょう」
「そ、そうですね、では…」
そっと襖が閉まる。せ、セイバー…?
「…」
「…」
お互いに黙り込む。
「せ、セイバー…とりあえず飯、冷えちまう前に食べちまおう」
「そ、そうですね…」
昼飯を食べ終わったあと、セイバーから耳打ちされる。
「こ、今度、私にあーんしてください士郎…」

「お、おうわかった」
　これで痛み分け、なのか…？っていうか俺が耐えられるかな…。セイバーの顔は見れなかったが耳が赤くなっているのは見えた。それをみた俺も顔が少し熱くなった気がした。
　一方、桜の部屋では…
「ライダー、本当にあの二人お付き合いもしていないの？」
「はい、私は何も聞いておりませんが…」
「なんかもういろいろ工程を飛ばしてあれ新婚さんよね」
「私もそう思います桜」
「（早くくっつけばいいのに）」
　２人とも同じことを思っていたのであった。
☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆
「おはようございます、士郎」
「おはようセイバー」
　セイバーは次の日の朝も早起きして料理を手伝ってくれた。俺は助かるし、セイバーは上手になるし一石二鳥だ。セイバーが料理を振る舞うのもそう遠くはないかもしれない。

「士郎、味見をしてほしいのですが」
「ん、いいぞ…どれどれ」
セイバーは今日は味噌汁に挑戦している。んー…味噌が足りないかな。
「セイバー味見はしたか？」
「いえ、しておりません」
「そっか、んーそうだなこういうのって実際に飲んでみないと味がわからないだろ？だからこういう時はこういう小さいお皿にちょっとすくって味見をした方がいいぞ」
「なるほどでは早速」
味噌汁に味噌を追加し味を濃くしたものを味見する。セイバーは頷いている。どうやら完成したみたいだ。
「完璧です士郎、最終チェックをお願いします」
セイバーから受け取り、味見する。うん、いい感じだ。
「いい感じだ、セイバー。よく出来ている」
顔を輝かせて吉田と小声で言う。
「セイバー、あーん」
俺の作ったミートボールをセイバーに差し出す。
「…い、意外と恥ずかしいですね…あ、あー」

パクッと食べるセイバー。なんだが小動物買ってるみたいで可愛い。
「バッチリです、士郎」
「それじゃあ、盛り付けてみんなで飯食うか！」
今日も一日頑張れそうだ。

衛宮先生（？）のお料理教室 √Ｒｉｄｅｒ

休日の早朝、朝飯をつくるために台所へ。うちは台所と居間が同じ場所にあるんだが今からテレビの音が聞こえる。こんな朝早くに…昨日消し忘れたのか？。
「お、ライダーか」
「おはようございます、士郎」
今ではライダーがテレビを見ていた。良かった、消し忘れじゃなかったんだな。ふとテレビの内容を見る。ちょうど料理番組をやっていた。
「懐かしいな、俺も小さい頃はその番組をみて料理を作っていたっけ」
今でも紹介されたレシピの料理を作るときがある。最近ではてっきり見なくなっていたが…。
「この前桜が独り言で私と一緒に料理をしたいというのを聞いて…」
「あー…」
確かに俺もよく聞く。ライダーも料理してくれるようになったらいいのに、と昨日も言っていたからな。ということは…
「朝早くから料理の勉強ってとこか？」

「そんなところです」
　じっとテレビ見つめるライダー。料理は見てるだけじゃ始まらないからな…よし！
「ライダー、俺と一緒に朝飯作ってみるか？料理は実際にやった方が憶えられるし」
「よろしいのですか？」
「あぁ、ライダーが良ければ。朝飯は簡単に作れるようなものばかりだから初心者でも手を付けやすいと思う」
　我が家の朝飯はあんまり時間がないから簡単に作れるものを作る。弁当にも入れたりするからその時は少し多めに作っておく。休日は時間があるからじっくり作るんだが、平日ならそうはいかない。幸い今日は休日、忙しくないから教えることも作ってもらうこともできる。
「では、よろしくお願いします。士郎…先生」
「普通に士郎でいいよ、先生なんて呼ばれるほど俺は料理はできないし」
「了解しました、士郎」
　さて、朝といえば…
「じゃあライダー、みそ汁を作ってみようか」
「みそ汁、ですか」
　みそ汁といえば、桜にも教えたっけか。あの時はまだ桜があまり料理ができなかった

時だったか、懐かしいな。
「じゃ、さっそくやってみようか」
☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆
「ライダー、昆布は沸騰する前に上げるんだ」
「わかりました」
　我が家では昆布でダシをとって味噌を入れる、具はシンプルにわかめを使う。
「これを溶かすだけでいいのですか？」
「あぁ、それだけでいい」
　着々とみそ汁をつくるライダー。ライダーはポニーテールで桜のエプロンを着ている。いつもと違うライダーはなんというか…珍しいというか…
「士郎？私に何か問題でも？」
「あ、ごめん…いや何もないよ」
　見蕩れていたみたいだ。ライダーはそうですか、と一言いうと作業に戻る。っと、俺も見蕩れてる場合じゃないな、次の料理準備をしないと…。
「士郎、みそ汁が完成しましたので味を見てもらえませんか？」
「ん、了解…。うん、上出来だライダー。俺は少ししか教えてないのによく出来たな」
「桜が作っているのをちょくちょく見ていたので。味噌を溶かす分量は少しずつ入れて

調整はしました」
　意外と料理の心得を知っているなライダー…もっと前から教えてあげれば良かったと少し後悔する。
「ライダー、まだ時間もあるしもう一品作ってみるか?ライダーの腕なら多分できると思うから」
「分かりました、では監督役お願いします、士郎」
　楽しいのかライダーは笑顔になる。ライダーが笑顔になることはあまりないから少しドキッとした。
「じゃ、じゃあ次は――」
　ライダーに指示を出そうとしたところに居間の襖があいて誰かが入ってくる。
「あ、先輩おはようござ――」
　桜だ、あれ今日はゆっくり寝るって昨日言っていたはずなんだけど…。桜とライダーの動きが止まる、まるで石になったかのように。
「…あー、二人とも…?」
「桜、これは…その…」
　ライダーが申し訳なさそうにしながらもじもじする。
「先輩、変わってもらってもいいですか…?」

「え？あ、あぁいいけど…エプロンはライダーが使ってるし」
「大丈夫です、部屋に新調したのがありますから！それはライダーに譲ります！」
桜は走って部屋に戻っていく。おそらくエプロンを取りに行ったんだろう。
「士郎、私はまずいことをしてしまったのでしょうか…？」
ライダーが不安げだ、桜を怒らせたと勘違いしているようだ。怒った桜の怖さはライダーとセイバーが一番知っているからな。
「桜は別に怒ってなんかいないさ。むしろ喜んでいたぞ」
居間を出る時のあの笑顔、とても嬉しそうだった。桜の望んでいたことが叶うだからそりゃ喜んで取りに行くよな。そっとエプロンを脱いで桜を待つ。
「士郎？なぜエプロンを脱いでいるのですか？」
まだ何をするか教えてもらっていない、と困惑気味のライダー。
「桜と交代する。桜の料理の腕は確かだから安心してくれ」
…っと、桜が来たみたいだ。
「桜、あとは任せてもいいか？」
「！はい、先輩！」
桜と変わる。遠目で少し見ているが…見てわかるくらい楽しそうだ。
「…ここにいるのは場違いかな」

そっと居間を出る。鍛錬でもするか。

☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆

「士郎、ご飯ができています」

「あぁ、ありがとう。すぐいくよ」

「ええ、お待ちしています」

セイバーは走って去っていく。どうやらかなりの時間が経っていたようだ。汗を拭いて、上着を着替える。

「さて、あの二人はちゃんとできたかな…」

俺がしてあげたのはみそ汁だけ。それ以外は桜とライダーが協力して作った料理だ。

まぁ、あのセイバーの反応を見る限り美味しそうなのができていそうだ。

「お…これは…」

食卓には焼き魚に卵焼き、きんぴらごぼう…ザ和食って感じだ。

「こりゃ凄いな」

素直な感想が漏れる。

「あはは…張り切って作りすぎちゃいました」

楽しかったんだろうなぁ…ライダーと料理を作るの。

「大丈夫です、桜。美味しいのは無限に食べれます」

セイバー、味見したのか…。ま、セイバーがおいしいっていうなら俺を呼びに来た時のあの反応は当たり前か。みんないつもの位置に座る。
「それじゃ…いただきます」
「いただきます」
ん…美味いな。流石だ。
「このきんぴら、美味いな」
ライダーは少し顔を赤らめる。
「本当ですか?よかったぁ」
多分ライダーが中心で作ったんだろうな、あえて言わないのはセイバーがいるからだ。
「士郎の言う通り、きんぴらも美味しいですが今日の朝食は全体的によくできています」
セイバーはもりもり食べる。この食いっぷりは…いつも通りだな。あとで感想言っておくか。
☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆
食器洗いをする二人に交じって皿を拭く。
「桜、ライダー。今日の飯、美味かったぞ」
「ありがとうございます、先輩。ライダー結構料理がうまくて…びっくりしちゃいまし

た」
「ほんとだよな、ライダー以外とできるからな」
「…ありがとうございます」
　ライダーは少し照れている。美味しかったのは事実だ。俺や桜が教える必要なんてなかったんじゃないのか?
「…桜に教えてもらうのは新鮮で楽しかったですし、それに――」
「こうしてもらうのは、私が望んだことでもありますから」
　まさか、ライダーもこういうのを望んでいたとは…。
「そうだったのライダー…?もっと早く言ってくれればよかったのに」
「その…恥ずかしくて…」
　ライダーは赤くなる。ライダーもこういう顔するんだなぁ。
「ま、これだけの腕があれば即戦力で台所に立てるな」
「そうですね、ライダー、これからも一緒に料理してくれる?」
「はい、もちろんです桜」
　桜とライダーが楽しそうに料理してくれるなら俺は嬉しい。セイバーも料理を始めてくれたし、いつか一緒に台所に立つ、なんてことは…ない、かな…?
「そんな日が来てくれるといいな」

俺はそんなことを思いながら皿を拭く。今日の衛宮家はライダーの新たな一面が見れた日であった。

王様とてるてる坊主

「お、紫陽花が綺麗に咲いたな」
洗濯物を畳みながら庭に咲いている紫陽花をみる。今日は雨に濡れてなおのこと綺麗に見える。
「しかし士郎、こうずっと雨ばかりだとつまらない。外に洗濯物は干せないし、外に行こうなら濡れてしまいます」
うーんと頭を悩ませるセイバー。洋服を治すためにタンスを開けて服を直していくとあるものを目にする。
「これは…」
ハンカチで作ったてるてる坊主が出た。なぜこんなところに、というのと同時に懐かしい、と感じていた。確か爺さんと一緒にこの時期に作ってたっけ。
「士郎、それは…？」
いつのまにかセイバーが正面に来ていた。
「これはてるてる坊主って言うんだ。雨が早く止むようにっていうおまじないがあるんだ」

そっとセイバーに手渡す。マジマジとてるてる坊主を見ているセイバーの横で即席でてるてる坊主を作る、ティッシュペーパーを丸めてっと…マジックペンで顔を描く。
「セイバー、これ」
「なっ、そんな簡単にできてしまうのですか…?!」
驚きの声を上げるセイバー。まぁそうだよな、３０秒足らずでまじないのものができてしまうんだもんな。
「士郎、これには別のものはあるのでしょうか…?その…獅子のようなものは…」
「ぶっ?!」
たまに見せるこういうセイバーの顔は反則だ、ギャップが凄すぎる。…まぁセイバーのいいところでもあるんだけど。
「士郎?」
「あ、あぁ悪い。ちょっと待ってくれ…」
工程はさっきと同じだが…顔のところをライオンにする。ま、簡易ではあるがそれっぽくは見えるだろう。
「いっちょ上がりっと…どうだ?」
「おぉ…」
セイバーは目を輝かせながらてるてる坊主獅子ｖｅｒを見つめる。とはいえ材質は

ティッシュペーパー、すぐに破れてしまう。セイバーが申し訳なさそうにするのもあれだから…

「セイバー、ちょっとてるてる坊主を貸してくれるか？」

「はい、土郎」

「よし…同調（トレース・オン）、開始」

魔術回路に火を入れる。

「構成材質、解明。…構成材質、補強…。」

聖杯戦争が終わった後でも毎日欠かさずやっていることと同じことをやる。前とは比べ物にならないくらい出来がいい。

「…全工程（トレース・オフ）、完了。ふぅ、こんなものかな」

「土郎、何をしたのですか？」

「もともとはティッシュペーパーでできているから破れたりとかしやすいんだ。だから俺の魔術で補強したんだ。これで今の強度は布くらいになっているはずだ」

おぉ！と声を上げ、改めてるてる坊主を手に取り、ぎゅっと抱きしめる。

「セイバー、てるてる坊主にはこんな由来があるんだ。昔、降り続く雨に困っているところに、一人のお坊さんがやってきたんだ」

ほう、とセイバーは呟く。

「お坊さんというと柳洞寺にいるような人たちのことでしょうか？」
「そうだよ、で、その人にお経を唱えてもらいうと必ず晴れるんだと有名な人だった。そこで殿様の前でもお経を唱えたのだけど、雨は止まなかったそうだ」
　セイバーはゴクリと生唾を飲む。セイバーは王様だったからよくわかっているはずだ、王の前で失態を晒すとそれ相応の罰が下ることを。
「それで…そのお坊さんはどうなってしまったのですか？」
「…雨が止まず、怒った殿様はそのお坊様を殺すように命令したんだ。で、白い布で包んで■■■ところ次の日は良く晴れたそうだ。これがてるてる坊主の由来の一つ…ってセイバー？」
　言葉を少し濁すがセイバーには伝わったようだ。セイバーはてるてる坊主を握りしめ、わなわなと震えている。しまったやりすぎたかな…。
「しろお！」
「セッ、セイバー?!」
　涙を浮かべたセイバーは俺に猛スピードで走ってきて…そのままの勢いで俺に飛びつく。
「…うぐっ…」
「どうしてそれを早く言ってくれなかったのですか?!ひどいです士郎！」

セイバーはこういうホラー系はダメだったのか、少し怖がらせたかっただけなんだが…。

「悪い、セイバー…少し怖がらせたかっただけだったんだけど…その、悪い」

セイバーは話してくれない。…この状況はまずいだろという気持ちともう少しこのままでいてほしいという気持ちが同時に現れる。

「ぴゃい?!」

…っと雷か、こりゃまた強くなりそうだな。

「セイバーもそんな声出るんだな…」

「何か言いましたか?士郎」

聞かれて恥ずかしかったのか、少し怒気がこもっている。

「いや、何も…」

それからしばらくはセイバーは俺を放してくれなかった。

☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆

「悪かったよ、セイバー。あの話はあくまでそういう可能性があっただけであって」

「…」

セイバーは言葉すら返してくれない。

「明日天気になぁれ…っと」

てるてる坊主をつくって窓辺に置く、せっかく作ったのだから置いておく。
「セイバー、さっきはすまなかった。その…何かあったら呼んでくれ」
そっと部屋を出る。あぁなってしまったらセイバーは一言も言葉を交わしてくれない。謝罪の言葉を述べてそっと退散した方が良いだろう。しかし…
「あのセイバーが怖い話が苦手、かぁ…」
意外というか、女の子らしいところ見れてうれしいけど…
「毎度あの状態になられちゃなぁ…」
次からは気を付けよう。その一方でセイバーはというと…
「全く、士郎があんな話をするとは思ってませんでした」
拗ねていた、それはもう子供みたいに。
「…しかも我を忘れて士郎の胸に飛び込むとは…なんという失態…」
真っ赤になった顔を手で抑えながら、自室をゴロゴロと転がりまわる。
「…」
早く忘れてください、あれは本来の私ではないのです…士郎…。
「――っ」
士郎が置いていったてるてる坊主をそっと手に取る。片方は士郎の置いていったてるてる坊主、そしても片方には士郎の作ってくれた獅子の顔をしたてるてる坊主。

「…まるで私と土郎ですね」
　机の上に2つのてるてる坊主を置く。肘をつき、手に顔を乗せ、2体のてるてる坊主をじっと見つめる。
「…フフッ」
　私は小さく笑った後、いつの間にか眠りについていた。
☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆
　セイバーが部屋から全く出てこない。もうすぐ夕飯ができるのに、だ。
「いつもなら出てくるはずなんだが…さすがに心配だな」
　エプロンを着たまま、セイバーの部屋の前に行く。
「おーい、セイバー。もうすぐ飯ができるぞー」
　返事はない。何かあってからでは遅い。
「…入るぞ」
　開けるとセイバーは机に突っ伏している。…寝ていたのか…。
「風邪ひいちまうぞ、セイバー」
　そっとセイバーに掛布団を掛ける。しかしまぁ気持ちよさそうに…
「これは…てるてる坊主?」
　2体のてるてる坊主が机に並んでいる。

「こうしてみると、俺とセイバー…に見えなくもないな」
自分で作っておきながら少し恥ずかしくなる。
「こうやってセイバー達と暮らせて俺は楽しいし、幸せだよ。まぁこういうのは寝てるときにしか言えないな。起きてるときは恥ずかしくていえないもんな」
寝ていることをいいことにいつも思っていることが口から滑り落ちる。起きてたり…なんてことはないよな…？
「…おやすみ、セイバー。いい夢を」
そっと部屋を出る。夕飯の仕上げはもう少し後でもよさそうだ。
「士郎…そういうのはずるいですよ」
士郎が出て行ったあと、そっと身を起こす。実は部屋に入る少し前から起きていたのだ。
「…私もあなたと楽しく暮らせて幸せですよ、士郎」
てるてる坊主を軽くつついて立ち上がる。
「ひと眠りしたら、お腹がすきましたね…今日のご飯は何でしょうか？」
部屋を出て居間へ向かう。梅雨が明けたら2人でまた出かけましょう。あのてるてる坊主は私の部屋の机の上に置いておきます。
「士郎、今日のご飯は何ですか？」

「あ、おはようセイバー。今日のご飯は――」

セイバーの部屋にある２つのてるてる坊主は身を寄せるように部屋の机の上に置いてある。いつか、いつかこんな関係になれるますように―。それが今のセイバーの願い、なのかもしれない。

セイバー、おつかいへ行く

「しまった、昨日買い物行くの忘れてたんだった」
冷蔵庫を覗いて頭を抱えるのは士郎です。そんな私はテレビを見ていたのですが…
これは士郎に褒めてもらえるチャンスなのでは…!
「士郎、私が買い出しに行ってきましょうか?」
士郎に近づき、話しかける。士郎と一緒に買い物に行くことはあるが私一人では行ったことがない。
「セイバー一人でか?うーん…」
士郎は悩む。多分私を心配しているのでしょう。ちょっと考えてからあ、と何か思いついたかのように紙とペンを取る。
「えーっと…」
紙にサラサラと文字を書いていく。
「…よしっと、これで一通りかな。じゃあセイバー、これ」
紙とエコバッグが渡される。
「これは…買い物リストでしょか?」

「そそ、このメモに書いてある物を買ってきてくれ。それからお礼じゃないけど余ったお金で帰りに何か買って帰ってきてもいいぞ」
　では、余ったお金で甘味でも買うことにしましょう。みんなでおやつを食べるのはいいものです。
「では行ってきます。士郎はゆっくりしていて下さい」
　私は玄関で靴を履きながら士郎に言う。士郎は玄関まで見送りに来てくました。
「うん、わかったよセイバー。…本当に俺はいかなくていいのか？」
「えぇ、士郎から買い物リストももらいましたので問題ありません」
「そっか、じゃあ頼んだよセイバー。気を付けてな」
　私は笑顔で答え、出発する。士郎にこたえれるようにしっかり成し遂げないと。私は鼻歌交じりで隣町へと向かった。
　一方そのころ。衛宮士郎は…
「…心配だ。実に心配だ」
　頭を抱えていた。セイバーに家でゆっくりしていろ、とは言っていたけど…。
「セイバーは今回が初めてのおつかいだからなぁ…心配だ…」
　今の自分なら我が子を初めておつかいに行かせたときの心境がすごくわかる気がする。うん、心配だ。後ろからこっそりついていきたいくらい…実際にセイバーにこっそ

りついていくとすぐに見つかりそうだし、怒りそうだ。
「うーん…変なことにならなきゃいいんだがなぁ…」
例えば…ライダーと鉢合わせる、とか?
「あーくそっ!考えれば考えるほど心配になるなぁ…」
果たしてセイバーはちゃんと帰ってくるのだろうか、と落ち着きがない士郎なのであった…。

☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆

商店街へ着きました!ここは士郎といつも来ているので慣れた光景です。まずは八百屋です。
「おや、セイバーちゃんいらっしゃい。士郎くんはどうしたんだい?」
「こんにちは。士郎は今日は家でゆっくりしています、私がおつかいにきたのです」
「士郎くんはいつも忙しそうだからな、おつかいに行ってくれて多分士郎くんも喜んでるだろうよ」
はっはっは、と笑う店主。士郎が喜んでくれているならおつかいに行くと行った甲斐があるというものです!
「店主、じゃがいもと人参、あと玉ねぎをいただけますか?」
あいよ、と返事すると店主はささっと用意する。

「いつもありがとね、士郎くんによろしく行っておいてくれ」
「分かりました、では」
　次のお店は…魚屋さんですね。
「確か士郎に頼まれたのは…」
　メモを取り出し確認していると聞き覚えのある声が…
「今日はアジが安いよ！…って、セイバーじゃねぇか」
「ランサー…魚屋さんでお仕事ですか」
「おう、転々としたけどここが一番しっくりきたからな」
　まさかがランサーいるとは思いませんでした。まぁいいです、私は買い物に来ただけですので。
「ランサー、鯖はありますか？」
「鯖か？おう、もちろんあるぜ」
「６匹ください」
「おうよ」
　魚を売るケルトの大英雄…買い物をするブリテンの王、もしこの二人を知っている人が見たら何をしているのか、と問われても仕方のない状況ですね。
「あいよ、セイバー。今日は坊主はいねぇのか？」

「士郎なら家でゆっくりしています、今日は私が買い出しに」
「ほ～、家事の手伝いとは…坊主と籍を入れる日も近いかもなぁ」
「なっ、何を言うのですかあなたは！」
　笑うランサー。ぐぬぬ、ここが何もなければ迷いもなくエクスカリバーなのですが…。
「お？顔が赤くなってるぞセイーー」
「何かおっしゃいましたか？」
　笑顔で見えない剣を首元に当てる。ランサーは硬直して動かない。
「次言ったら問答無用で刎ねますので」
「…じゃあ俺は仕事に戻るわ」
　では、と魚屋さんをさる。ランサーはのちに語る、もう少しで血の海ができた、と。
「買い物が終わったので…甘味を買って帰りましょうか」
　そうですね…今日はたい焼きにしましょう。で、お店の前に着いたのですが…
「…なぜあなたがいるのです、アーチャー」
「なぜと言われてもな、私も買いに来たのだが？」
　アーチャーと会うとは…ランサーといいアーチャーといい、今日はそういう日なのでしょうか。

「たい焼きを６つください」
　手で６を表しながらお店の人に伝える。
「食べる量は相変わらずだな」
「違います、土郎や桜の分も含めての６つです。６つ全部私が食べるわけではありません」
　まぁ一人で６つは食べれなくはないのですが…お財布の都合と言いますか…アーチャーといると調子が狂いますね。
「わっ、私のことはいいでしょう！早く自分が必要な分買ったらどうです？」
「ふむ、そうだな。たい焼きを６つ頼みたい」
　アーチャーのところは凛を含めても４つくらいで足りるのでは…？
「あなたも６つ頼んでるではないですか…凛が食べるのですか？それともあなたが？」
　気になって聞いてみる。アーチャーはフッと笑う。
「まさか。凛はともかく私は食事を必要ないからな、どこぞの騎士王様は違うようだが」
　私のことを言っているのはすぐに分かりました。
「アーチャー！」
　と、文句を言おうと思ったところにずいっと紙袋を渡される。これは…さっきアーチャーが頼んでいたたい焼き…？

「…どういう風の吹き回しですか、アーチャー。まさか先ほどの一瞬で何か変な薬を」
「君な」
やれやれという表情のアーチャーは続けて言う。
「まぁどう思うかは勝手だが…いらんというのなら捨てるぞ」
「！」
捨てるとは勿体ない…第一あの一瞬で薬を盛るのは不可能でしょう。
「捨てるのであればいただきましょう。しかし、アーチャーこれはどういうことですか…？」
「いや何、たくさん食べる君がさっき買った分だけでは足りないと思ってな。皆に分けるのであればなおさらだ」
「なっ、理由はそれだけですか？」
「それだけだよ、私としては不本意だがーー」
ハハッと困ったような笑顔になるアーチャー、その表情はどこかで見たことあるような…。
「どうも、セイバーの腹ペコそうな顔には弱いようだ」
この顔は士郎がたまにする表情だ、そうだった、アーチャーは士郎の理想の果て。似てて当たり前でしたね。

「…　い、いらぬ世話です！でも、その…ありがとうございます…■■■…」
　最後の方が小声になる。アーチャーに士郎、なんて言えるわけない。
「最後の方が聞き取れなかったが…まぁいいさ、ではなセイバー」
「アーチャー、必ずお返ししますので」
　ひらひらと手を振り帰っていくアーチャー。いつか何かしらでお返しなければなりませんね。
「…士郎が待ちくたびれているかもしれないですね、少し急ぎ足で帰宅しましょう」
　こうしてセイバーの初めてのおつかいは幕を閉じたのであった。
☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆
「ただいま戻りました、士郎」
「お帰りセイバー。荷物持つよ」
　いや、良かった何事もなく帰ってきてくれて、と安心するのは俺衛宮士郎である。にしても荷物が多いな…ん？これは…
「セイバー、それは…」
「これですか？たい焼きを買ってきました、みんなで食べようと思いまして」
　にしても多くないか…？って１２個?!
「せ、セイバー…１２個も買ってきたのか？」

「いえ、６個しか買わなかったんですけど…アーチャーが」
…あいつが？うーん、なんというか、珍しいというか…。
「私が貰わないのであれば捨てるとのことでしたので」
ある意味脅しじゃないかそれ…。
「なら今度アーチャーにお礼をしないとな」
「そうですね」
冷蔵庫に買ってきたものを入れながらアーチャーにはどんなお礼をすればいいか考える。あいつは料理は俺より上手いしな…うーん。
「士郎、一緒にたい焼きを食べましょう！」
時計を見る。まだ夕食には早い時間だ。
「そうしよう、夕食までまだ時間をあるしな」
セイバーの隣に座る。まぁいつものセイバーで安心した。
「はい、士郎」
「サンキュー、セイバー」
セイバーからたい焼きを受け取る。相変わらずよく食べるな…。
「セイバー、おつかいありがとな。助かったよ」
「いえ、あれくらいなら容易いことです」

また次もお任せを、と胸を張るセイバー。今度からよく行くところにセイバーを連れて行かないとな、場所がわからないとおつかいに行けないからな。

「じゃ、また今度お願いしようかな」

「はい、士郎」

たい焼きを頬張りながら返事をするセイバー。今日も我が家は平穏である。

Ｓｔｅｐ　ｕｐ　Ｓａｂｅｒ

夕食の後、食器洗いをしているとセイバーが手伝いに来た。珍しい、というわけじゃない大体手伝いに来たときは俺にお願いがあるときだ。
「士郎…あのですね…」
「なんだ、セイバー？」
セイバーはモジモジしている。…うーん、嫌な予感！
「…明日お昼からお出かけできませんか？…二人で」
…二人で。これはつまり――
「分かった、じゃ昼飯のあと出かけようかセイバー」
これはデートだ。久々だなぁ…でどこに行くんだろうか。
「生きたいところがあるのですが…付き合っていただけますか？」
「セイバーの行きたいところ？あぁ、構わないよ」
食器を洗いながら快諾する。まぁ俺もどこに行こうか考えてなかったし、セイバーに生きたいところがあるなら丁度いい。
「では、明日のお昼の後お出かけですね。楽しみにしておりますので」

ニコッと笑顔で返答するとそそくさと部屋に戻っていってしまった。…まぁ女性にはいろいろ準備があるもんな。

「しかしセイバーとデートか…」

エプロンを脱ぎながら呟く。楽しみで一人笑顔になる。こんな顔人には見られなくないので俺もそそくさと部屋に帰る。部屋に戻ってよし、とこぶしを握りながら久々のデートを楽しみにしている俺であった。

☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆

昼食後、新都へ向かうためにバス停まで移動する。そういえばどこに行くかを聞いていない。

「セイバー今日はどこに行くんだ?」

「えっあっ…えーっと…ひ、秘密です!」

何処に行くのか、と聞いて狼狽するセイバー。…ん?俺なんかそうな狼狽するようなこと聞いたか?

「秘密か…まぁセイバーが行くところにはついていくけど」

「そうしてくれると助かります士郎」

セイバーの顔が赤い。えっと…どういうことなのかさっぱりわからん。女心は複雑だ…。とりあえずセイバーについていこう。

〜1時間後〜

「セイバー、確かに俺はセイバーについていくと言ったけど…」

ある店の前で俺は立ち往生する。いや、この展開は予想していなかった。いやセイバーの態度で察するべきだったか。その店とは…ランジェリーショップだ。

「帰る」

「なっ?!帰宅など許しません士郎!」

１８０度向きを変え帰ろうとする俺の肩をグイっと掴むセイバー。いやいやいやいや、俺が行くところじゃないし!そこは遠坂とか桜を連れてくるべきだろ!

「セイバー!場所を言ってくれなかったのはそういうことか!」

俺をだましたのか、と怒りより悲しみの目をセイバーに向ける。うっ、とセイバーが声を漏らす。

「その…場所を言わなかったのは謝ります士郎。しかし私は…凛や桜ではなく士郎に…」

しゅんと落ち込むセイバー。アホ毛がしなしなだ…本気で落ち込んでるな。あんなセイバー見たら…仕方ない、腹を括るか。俺もどこに行くのか、と聞いたときにもっと聞かなかった俺の落ち度でもある。

「ほら、行くぞセイバー」

セイバーの手を取る。そんな悲しいセイバーの顔を見て我慢できなくなった。ええい、行ってやるよ！行ってやるさ！

「…さっさと買って帰るぞ。長居はできないからな」

長居なんて俺の理性が持たない。当のセイバーは始めこそびっくりしていたがすぐ笑顔になる。

「士郎…！」

「その、セイバーさっきは言い過ぎた、ごめん。今度行くときは事前に言ってくれ…そうじゃないと心の準備ができない」

まぁ…過去事前に言われて全力で拒否したからなぁ…。今回、セイバーは苦肉の策で連れてきたんだろう。…こういう場所に行くのは慣れないがそれはセイバーも同じだ。…頑張れ俺…！

と、セイバーが俺の手を放し小走りでランジェリーショップの扉へと向かう。

「ちょ、ちょっと待てよセイバー」

俺も小走りでついていく。セイバーが入るのに続いて俺も入る。こういう店に男が入るということは…

「まぁ…うん、そうだよな」

当然カップル、ということになる。セイバーはきょろきょろしながらあたりを見渡

す。
「士郎、まずはどれから見ればいいのばいいのでしょうか？」
「お、俺に聞かれてもなぁ…」
全く分からない。そもそもこんな店に入るなんて想定してなかったし…。勢いで入ったとはいえ場所違いすぎる。どこをみても下着ばかりで目のやり場に困る。
「いらっしゃいませ、どちらをお探しですか？」
俺たちのそばに店員がやってくる。
「彼に下着を選んでもらうためにこの店に来たのですが」
「?!」
…今セイバー彼って言ったか…？ってか余計なことを言わないでくれセイバー！そもそもまだ俺とセイバーはそんな関係になってないだろ！
「なるほど～、こちらに新作がありますが…サイズを測りますか？」
今のセイバーの一言で店員さんがまるで初々しいカップルを優しく見守るかのような笑顔をする。恥ずかしくて顔が熱くなる。
「お願いします」
そういうとセイバーは店員さんとお店の奥に消えていった。…俺一人で待っているが周りからの視線が痛い。と、フフッと笑う声が聞こえる。

「いいなー、私も彼に選んでもらおうかなー」
完全に俺とセイバーのやり取りを見ての発言だろう。何だろう、心にチクチク刺さるというか…精神的疲労がたまっていってる気がする。というか耳まで真っ赤になっているんではなかろうか…。
「お待たせしました、士郎。このサイズまでなら入るようです」
と測った結果の紙を俺に見せてくる。
「せ、セイバー?そういうのは自分の心だけに入れておくものだぞ…?」
「そうなのですか?…私は士郎に知られても何も問題ないのですが」
「俺が気にしちゃうからセイバー…」
小声でセイバーに伝える。セイバーはまぁいいでしょうというと俺の手を引く。
「では、士郎さっそく見ていきましょう!」
セイバーに手を引かれお店の中を見てまわる。…今日は疲れてよく眠れそうだ。
☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆
「かなりの数を持ってきてしまいましたね…」
「あぁ…本当にこれ全部試着するのか?」
「当たり前です、士郎が良いといったものの中から選りすぐりを買うのですから」
見て回ってる時どれも似合っているからどれでも良いのでは、と言ったらセイバーは

怒ってしまった。今思えば何という失言だ、と思ってしまうレベルだがお詫びとしてちゃんと選んでくれとのことだ。ちなみに俺の見立ててくれた下着以外身につかないのでそのつもりでと念押しされて選りすぐりを選んだのだが…

「セイバー、これ１０はあるよな…店員さんに申し訳ないな…」

いや本当にごめんなさい店員さん…。いきなりセイバーが腕を掴み引っ張る。

「うおっ…?!」

後ろでシャッとカーテンレースが動くような音がした…嫌な予感がする…。

「セイバ…」

振り向いて何の用かと聞こうとして絶句する。セイバー服！服脱がないで!!

「ま、待てセイバー俺は出るから…」

「ダメです士郎、士郎に着ているところを見てもらってからではないと評価とは言えません」

セイバーこういうのは男女関係で…。

「セイバー、とりあえず待――」

「士郎、後ろ外すのを手伝ってもらえますか?」

は…? 下着をとるのを手伝えというのですか…。いやいやいや、いくらなんでもそれはまずいだろ、第一俺はまだ高校生で…。

「士郎、私も恥ずかしいので早くしてもらえますか…？」
セイバーは顔を耳まで赤くしながら俺に伝える。…いかん、一瞬とんだ気がする。
「お、おう…い、行くぞセイバー」
手を伸ばす、その手は震えている。これを外すと…セイバーの…。
「――。」
頭が真っ白になる。これ以上は俺の想像を超える。…というか気が遠くなってきた…。
「あっ…」
ん…？なんか落ちたぞ…これは…。白色の…。
「し、士郎…あまり見ないでください…」
あ、これ…セイバーの…。あ、だめだ…。
「し、士郎?!しっか――」
俺の記憶はここで途絶えている。
☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆
いつの間にか俺は帰路についていた。セイバーは満足そうだ。
「…悪いセイバー、ぼっとしてた。俺変な事してたか？」
「まさかあんなに積極的とは思いませんでしたよ、士郎」

「…は？」
嘘だろ…？なんか変なことしたのか？全く記憶にない。と、セイバーがフフッと笑う。
「冗談です、気を失ってしまったので結局全部購入しました」
通りで袋がパンパンなわけだ。
「というかセイバー、こういうのはこれ以降無いようにしてくれ。…誰の差し金だ？」
疲れたような声でセイバーに問う。セイバーが騙すなんて考えにくい、まぁだいたい見当はついている。
「凛からこうした方が早いといわれまして…士郎はランジェリーショップに行こうなんて言うと拒絶するのは分かっていましたので」
「まぁ…そうだな…」
セイバーは申し訳なさそうにいうが俺にも非がある。でも男をランジェリーショップに連れていくのはこう…カップルといいますか…その…。
「士郎、なぜあなたを誘ったかわかりますか？」
セイバーから質問が飛んでくる。俺を連れてきた理由か、確かセイバーは…。
「俺に選んでほしかったから、だろ？」
「そうです、ということはどういうことかわかりますね？」

??全く分からない。
「…セイバー、ちなみになんだがそれはセイバーの生まれでは良くあったことなのか？それとも誰かに言われたのか？」
流石にわからなかったので少しくらいヒント欲しさでセイバーに聞いてみる。
「ライダーから教えてもらいました…おかしいですね、ライダー曰くこれでイエスノーが返ってくるはずなのですが…」
ますますわけがわからない…ライダーは何を吹き込んだんだ…？
「…セイバーそのイエスノーって…」
「…」
セイバーは頬を赤らめて何も言わない。こ、告白の流れ…なのか？…覚悟を決めろ、衛宮士郎！いうぞ、言ってやるぞ……！
「お、俺は…その…」
口から出かけた寸前で詰まってしまった。
「士郎、それはまた今度でも良いのですよ？」
何となく分かったのか、セイバーは微笑んで俺に話しかける。どこか寂しそうなセイバー。今ここで言わなかったら…ずっと後悔しそうだ。
「セイバー」

「はい、士ろーー」
そっと抱きしめる。セイバーは驚いたのか何も言わない。
「…もし嫌だったら振りほどいて欲しい。俺は…俺はセイバーが好きだ」
言ってやった、今まで言えなかったこの言葉を。あの戦い(聖杯戦争)が終わってからなかなか言う暇がなかった…いや、俺に勇気がなかった。
「…私もです、士郎。やっと聞けた、貴方から…」
ギュッとセイバーも俺を抱きしめる。
「ごめんな、セイバー。随分と待たせてしまったみたいだ」
「長いこと待たされました…最後に言われてからかなり経ってましたから…」
何分経ったか分からないくらいお互い抱きしめ合う。そういえばセイバーから答えを聞いていない。
「セイバー、どうなんだよ?」
「何がですか?」
「その…告白の答えなんだけど…」
目を逸らしながら頬をかく。今思い返せばものすごく恥ずかしい告白だな…。
「はい、喜んで。これからもよろしくお願いしますね、士郎」
満面の笑みで言われる。…ずっとこうしていたいけどもう帰らないと流石に桜とラ

イダーに心配をかけてしまいそうだ。
「セイバー、そろそろ帰ろうか。流石に桜とライダーに心配をかけてしまいそうだ」
セイバーと俺はそっと手をほどく。
「そうですね、心配をかけないように早く帰りましょう」
お互い家に向かって歩みを進める。
「セイバー、手を」
「?どうぞ」
「左じゃない、右手」
セイバーは右手を差し出す。セイバーの右手に俺の左手を絡ませる、恋人繋ぎと言うやつだ。
「恋人同士ならこれくらいいいよな…う?」
セイバーは何も言わず体を寄せてくる。何も言わないけど、体を寄せてきたセイバーの体は熱かった。
「また、デートしような」
そう一言呟いて家へと向かった。もっとこうしていたいけど今日はこれでおしまい。セイバーとはこれからも一緒にいるのだから。
「士郎、今度は…お祭りに行きたいです」

「お祭りか…夏も近いし、近いうちにお祭りはあったはずだ」

こんな会話をしながら家へと帰った。桜や遠坂には言った方がいいのか、それとも秘密の方がいいのかとか色々悩まされるのはちょっと先の話。今日は2人にとっては大切な日となった日なのであった。

そうだ、プールへ行こう。

「「あ”っ”い”〜〜」」

お昼頃、今で机に突っ伏するのは凸凹コンビと俺が呼んでいる藤ねえとイリヤ、そして赤い悪魔こと遠坂と暑さのあまりアホ毛がしなしなと弱っているセイバーだ。

「確かに、暑いなぁ…もう夏って感じだ。ってなわけでお昼はそうめんにしたぞ」

「士郎〜エアコン付けようよ、エ・ア・コ・ン」

エアコンねぇ…つけたいけどまだちと早いかなぁ。

「もう少しだけ我慢してくれ藤ねえ、まだ整備とかもろもろが終わってないんだ」

適当な理由をつけてつけさせないようにする。エアコン付けると電気代がな…。

「凛、溶けてます」

大の字で横になる遠坂。遠坂だけでなく、みんな暑くてぐったりしている。

「あっ」

ふと思い出す。あるじゃないか、夏らしいレジャー施設が。だが…うーん…。

「どうしたのよ士郎、何かいい案でも思いついたの？」

「あー…いや、わくわくざぶーんなら涼めるんじゃないかなと」

「考えたわね士郎、いい案ねそれ」
遠坂は乗り気だ。他のみんなは…
「いいですね、私も賛成です」
「士郎が行くなら私も行く～」
「むむ、これは保護者として付いていかなければいけないでしょう！」
全員が行く気満々だ。というかさっきまでのぐったりしてたのはどこにいったんだ…。っとあとは桜とライダーか。あの二人はついさっき買い物行ったばかりだしまあしばらくかかるだろう。
「ところで士郎は水着持ってるの？学校指定の水着しかないなんてことはないでしょうね？」
「それ以外もちゃんとある、問題ない。セイバーのはあるのか？」
「はい、ついこの前大河と凛に選んでもらいました」
そっかそっか…いやしかし、女子ばかりなのにそこに俺が混じってもいいものなのかどうか…。
「士郎？まさか言い出しっぺが来ないなんて言わないわよね～？」
「うっ…それは…」
他のみんなも『もちろん、来るよね？』とオーラを滲み出して圧力をかける。こうな

ると逃げることはできない。
「あぁ～もう！分かったよ、行くよ！」
　耐えれるかなぁ俺…頑張らないと…血液パックでも持って行っておくか？とまぁ冗談はさておき、不安でもあるが同時に楽しみでもある。みんなの水着を見れるわけだから男としてこれほど嬉しいことはない。だが逆に俺の理性が保てるかどうかも分からない、俺は健全な男子高校生だ。そりゃまぁ…そういうことだ、うん。
「士郎は幸せ者ねー。こーんなに大勢の女の人が水着を着て遊んでくれるんだもの」
「ばっ…遠坂…！」
　そう、このメンバーで唯一男なのは俺だけ。側から見ればハーレム状態である。
「士郎、顔が紅潮してます」
「お、俺は部屋に戻る！明日ちゃんと用意しとけよな！」
　急ぎ足で部屋を出て行く。しかしみんなの水着姿か…。
「…いかんいかん、しっかりするんだ俺！」
　頬をピシピシと叩いて明日の準備をする。邪心を振り払い、バッグにいろいろ詰めながら明日のお弁当のことを考える。施設の中の飯も美味いけど出費は抑えたいからだ。ん～…がっつりは食べた後が動かないしな…軽めのやつで行くか…。明日、俺は生きて帰るのだろうか…

☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆

「ヨーロッパの本格リゾートを思わせる、ゆったりとした空間が魅力的！水温は体温に近い温度で保たれ、1年通じて楽しめる屋内ウォーターレジャーランド！」

遠坂は手を空に掲げる。

「来たわよ！わくわくさぶーん！」

「せ、説明どうも…遠坂…」

遠坂はめちゃくちゃ楽しみで仕方ない、といった感じだ。みんな水着を着ているが上着を羽織っているから俺はまだ平常心を保っていられる。うぅ…心配だ、持ってくれよ俺の体…！

「おぉ…これはすごいです…あれはなんですか？士郎」

セイバーも興味津々だ。

「あれはウォータースライダーだ、なんと言ったらいいかな…川下りに近いかな？」

「なんと…屋内で川下りができるのですか！早速行きましょう、士郎」

「おわっ?!ま、待ってくれセイバー！まだみんなと話をつけてないだろ?!」

そう、バラバラで行動するのはいいけどお昼時は集合しないといけない。その辺を決めなければ行けないのだ。

「む…そうでした…。では早く決めましょう」

「俺はセイバーについていく、他のみんなはどうするんだ？」
「衛宮くんについて行くけど？」
「しろーについて行くわ」
「先生として、士郎を見守るとしましょう！」
　遠坂とイリヤ、藤ねえは俺とセイバーと同行するようだ。
「桜とライダーはどうするんだ？」
「えっあっ…わ、私も先輩について行きます…」
「私は桜について行くつもりでしたので…自動的に私も士郎と共に行動することになりますね」
　みんなついてくるのか…それはいいんだが…その…。
「…はぁ」
　ここにいる全員の水着を見ることになるのだ、男として嬉しいが…うぅ…耐えてくれよ俺…！
「どうしたのですか士郎？早く行きましょう！」
「ううわ?!せ、セイバーちょっと…！」
　セイバーは手を握りスタスタと歩き始める。それに合わせてみんなも動くのだが…いや、この光景他のやつに見られたら…やばいな…いろいろと…。

「セイバーも乗り気みたいだし、今日は楽しみましょ！」
「「おーっ!!!」」
あはは…楽しそうで何よりデス…。はてさて俺は行きて帰れるのか…心配だよ、じいさん…。

☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆

「ふぅー…みんな元気過ぎだ…」
俺は疲れてプールから上がり一休みしている。座っているところからはしゃいでいるみんなが見える。
「…今更だけど露出がすごくないか…？」
顔が熱い。みんなから目をそらして頭を振り、煩悩を取り払う。みんなが上着を脱いだ時は脱いですぐプールに入ったから特にじっくり見るということはなかったので特に何も感じなかったけど…離れて見ると…すごいな、いろいろと。
「休憩ですか？士郎」
「あぁ、セイバー少し休憩を…」
顔を上げるとセイバーがいた。雪のように真っ白なビキニ、普段のセイバーの見えないところが見える。

「…？何か私におかしなところでも…？」
「わ、悪い！つい見とれて…」
　ジッと見つめてしまっていたようだ。顔軽くペチペチと叩いて煩悩を振り払う。いかんいかん、平常心平常心…。
「そういえば感想を聞いていませんでしたね、この水着どうでしょうか士郎」
「あー…うん、正直このタイプをセイバーが着るとは思わなかった」
　感想ではなくなぜこのタイプを着たのが気になってしまい聞いてしまった。学校指定の水着のようにお腹とか隠れているような水着をセイバーなら取るだろう…と思っていただけに正直驚いた。
「えぇ…私も初めは違うものを手に取ったのですが士郎はこちらの方が気に入ってくれる、と凛が」
　まぁそうだろうな…というかなんで分かるんだ…。
「なんというか…存在感がすごいな、輝いているというか…」
「私がですか？」
「セイバーもだけど、わくわくざぶーんの日差しの入り方とかいろんな原因があるんだろうけどみんないつもの倍以上に輝いて見える」
　なるほど…とセイバーもみんながはしゃいでいるところに目をやる。セイバーは俺

の横に座りしばらく2人してみんなを見ていた。それから何分経っただろうか、セイバーが口を開いた。

「私と士郎が初めて会った時はこんな風になるとは思いもしませんでしたね…」

フフッと笑いながら話す。あの時は俺も聖杯戦争ってなんだ、魔術ってなんだ、といろいろ無知だったからな。

「そうだな…そこからセイバーに俺が惹かれて…」

「そうでしたね、私に猛アピールしていましたね」

ニコニコしながら俺に言う。今思い出すと…恥ずかしいと言うか必死と言うか…。

「はは…恥ずかしいな…でもそのおかげで今があるからな」

照れ臭くなって頬を掻く。顔が熱い、あれ、なんでこんな会話になったんだっけ…。

「…」

…なんだろう、どうしたらいいんだ…。と、とりあえずセイバーの様子を…。

「…」

お互いに目が合う。どうやらセイバーも俺と同じ考えだったようだ。

「とっ、とりあえずそろそろ飯にしようか、お昼だしな！」

「そっ、そうですね、みんなを呼んできます！」

セイバーは走り出そうとしたときに声をかける。

「セイバー！さっき感想言い忘れたけどすごく似合ってる、綺麗だ」
ニッと笑ってセイバーに伝える。水が光を反射したのか、眩しくて目を細める。
「…！ありがとうございます、士郎！今度は2人でいきましょう！」
そういうとセイバーはみんなを呼びに走って行ってしまった。水着の感想を伝えた時のセイバーの顔は見えなかったけど走っていく後ろ姿は何か嬉しいことがあった子供のように見えた。

☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆

「はー…満足満足、もう動くのも億劫だわ…」
夕方、わくわくざぶーんから帰宅した我ら一行は俺の家でゆったりしていた。あれからお昼を食べたあとはビーチバレーに波のプール…もういろんなところを回りまくった。…今日はよく寝れそうそうだな。
「私今日止まって帰るわ～、いいでしょしろー？」
イリヤもヘトヘトなのかうちで一泊すると言う。
「おれは良いけど…あの二人は怒らないのか…？」
「あぁ、セラとリズのことね…大丈夫よ、もう連絡済みだし許可も貰ってるから」
そっか、それなら安心だ。藤ねえは…大の字で寝てる…そっとしておこう。
「あれ、遠坂、桜とライダーはどうしたんだ？」

いつのまにか横になっていた遠坂は寝返りをうって俺の方を向く。
「あの二人は自宅に帰ったわよ、なんでもやることがあるんですって」
なるほど…セイバーは…部屋か。
「セイバーに飯聞いてくる、遠坂とイリヤはゆっくりしててくれ」
「そうさせてもらうわ…」
「私も～…」
２人ともすごくはしゃいでたからな…そりゃ疲れるわけで。っと、とりあえず飯どうするか聞いて来るとするか。
「セイバー、ちょっといいか?」
セイバーの部屋をノックする。
「士郎ですか、少々お待ちを…」
返事は早く帰ってきたが部屋の中でバタバタ音がしている。…何をしているんだ…?
「お待たせしました、どうぞ入ってください」
「お、おう…」
さっきの物音が怪しすぎる…慎重にドアを開けるとそこには…
「…」

セイバーがいる、いるのだが…水着だ。いや何を言っているか分からないと思うがセイバーが部屋で水着を着て正座している。
「セイバー…それは…」
「あまりゆっくり見れてないかと思いまして」
なんだーそういうことかー…ってなるわけないだろ！慌てて近くにあった上着をかける。
「セイバー、家の中で水着はその…し、下着と見間違えるから…」
苦し紛れの言い訳だがとりあえず服を着てもらわないとまともに話すこともできない。
「それは…申し訳ありません」
申し訳なさそうな顔でセイバーは上着のボタンをとめる。
「セイバーは綺麗だからな…その、今日の水着で改めてそう思ったというか…」
何を言ってるんだろうか俺は。夕飯は何がいいのか聞きに来たはずなのに。
「…ありがとう、士郎。今日は恥ずかしさを捨ててこれを着て本当に良かった」
「やっぱり恥ずかしいのか？その水着は…」
わくわくざぶーんではそんな恥ずかしそうな表情とかしてなかったから意外だった。
「もちろんです！第一この水着は肌の露出が多過ぎます！」

死ぬほど恥ずかしかった、と言わんばかりの圧を感じる。はは…たしかにセイバー普段長袖に長いスカートだもんな。水着選びの時、あわあわしてるセイバーが想像できた。

「でも似合ってた、セイバーがより一層輝いて見えたよ」

「衛宮くーん、ちょっといいー？」

俺が感想を伝えたのと同時に遠坂からのお呼び出しがかかる。

「そうだセイバー、今日の夕飯は何がいい？」

今行く、と言ってセイバーに本題を聞く。

「士郎が作るものであればなんでも構いません」

「りょーかい、飯できたら呼ぶからそれまで待っててくれ」

障子を開けて部屋から出る直前に不意に腕を掴まれる。

「士郎、次は…次は2人で…」

これは…デートの誘い…だよな？

「あぁ、喜んで！楽しみにしていーー」

口に柔らかい感触。不意打ちだった。

「フフッ楽しみにしてますね、士郎」

ぽかんとしてる俺をよそ目にセイバーの部屋の障子が閉まった。

「ちょっとー、士郎ー？」
遠坂の声でハッと我にかえる。
「わっ、悪いすぐ行くから！」
走って遠坂の元へ移動する。やられたらやり返す、見てろ絶対にやり返してやるからなセイバー…。そんな決意をするのだった。

夏の夜に咲く『花』

商店街で買い物中、とあるポスターにふと目が止まる。
「冬木大橋花火大会…もうそんな時期か、早いもんだな」
冬木大橋花火大会ではあるが夏祭りのようなもので出店がたくさんある。昔、切嗣や藤ねえと一緒に行ったっけ、懐かしいなぁ。最近は家で花火が上がってる音だけ聞いてるな…ひさびさに行くのもまたありだよな。そんなことを考えながら買い物から帰宅。
「ただいまー」
「おかえりなさい、士郎」
居間のところからひょこっと顔出して笑顔で答えてくれるセイバー。
「飯は今から作るからちょっと待っててくれ」
食材を冷蔵庫に直しながらセイバーへ伝える。桜は部活で遅くなるって言ってたし、遠坂とイリヤは今日は来ない。藤ねえは来るのか分からないけど部活なら桜と一緒に来るよな、多分。
「分かりました」
セイバーはテレビを見ながら待つようだ。ふとテレビを見ると花火が映っていた。

「士郎、この花火というのはどこで見えるのですか？」
「花火は…あ、花火で思い出したんだけど明後日の夜は何か予定はあるか？」
「いえ、特に用事はありませんが…それと花火になんの関係が…？」
「その日花火が見えるからな、良かったら一緒に見に行かないかなーー」
と誘おうとした時、スパーン！と凄い勢いで襖が開く。
「なになに、士郎がセイバーちゃんと…？んん～これは青春の香りがしますなぁ～」
…なんというタイミング…。
「おかえりなさい大河。士郎が明後日花火を見せてくれると言ってましたので…」
ふーんと藤ねえが呟く。首を少し傾げてから閃いた！と言わんばかりに手を打つ。
「花火…？あぁ、もしかして士郎冬木大橋花火大会に行くの？」
「そうだよ、丁度テレビで花火が映っててさ。んで誘おうとしたら藤ねえが遮ったってわけ」
「なによ、私が悪者みたいないいかして～。そうだ、セイバーちゃん！」
あれは何か閃いた、って感じだな…変なことしなきゃいいんだが。
「なんでしょうか、大河」
「せっかく花火を見に行くんだからそれなりの格好していかないとね～、明後日の夕方くらいにうちに来れる？」

「大河の家ですか、分かりました」
　うんうん、と頷く藤ねえ。
「士郎は持ってるでしょ、浴衣！」
「ん？あぁ、多分あると思うぞ…ってまさか」
　ニヤリとする藤ねえ。
「デートなんだから、それなりに綺麗な格好しなきゃダメに決まってるでしょ～？」
「んばっ…?!」
「大河…！」
　２人しておどおどする。それを見て藤ねえはかーっと言って俺とセイバーを見る。
「いや～いいね～青春ね～！うんうん、明後日は張り切っちゃおうかな～」
　ニコニコ笑顔で料理する俺に近づいてボソッと一言。
「セイバーちゃんは何も知らないんだから、ちゃーんと士郎がエスコートしてあげないとだめだからね？」
「分かってるよ…頑張る」
　耳が熱い。それを見てか俺からそっと離れてセイバーの元へ。
「いいなー、私も青春したいなぁ～」
「大河、その青春とは…なんなのですか？」

「それはね～ーー」
　藤ねえの青春語りが始まったところで料理を手早く進める。セイバーの浴衣姿か…。
「明後日のプラン、考えておくか」
　ボソッと呟いてたからできた料理を盛り付ける。夕飯のあとから明後日のことでうんうんと頭を悩ませるのであった。
☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆
「セイバーちゃん、お待たせ！浴衣持ってきたよ～」
　夕暮れ、自室で俺が浴衣を着ていると玄関の方から藤ねえの声が聞こえた。学校が終わってからすぐにバイクで来たのだろう。こういう時の藤ねえの行動の早さ、仕事をさっさと終わらせる早さは天下一品だ。
「士郎～、セイバーちゃん着替えるから居間に入ってきちゃダメだからね！」
「了解、大人しく部屋で待ってる」
　セイバーの部屋があるのだからそこで着替える必要はないのでは…？と思ったが別に居間に用があるわけでもないので部屋で大人しく待つことにした。にしても浴衣を着るのは何年振りだろうか、最後に来たのは中学生くらいの時か。あれから大きくなったとはいえ少し大きいサイズを買っていたおかげかすごく丁度いい。
「…ふう」

これから二人でお祭りデート…。こんなシュチュエーションはドラマくらいだとばかり思っていた。鼓動が速くなる。
「落ち着け…落ち着け…」
落ち着くために呟いてみるも逆効果でむしろ悪化した。横になって天井を眺める。
「大丈夫、今日のためにちゃんと計画も立てた。大丈夫だ」
自分に言い聞かせる。と、ドアをノックされる。
「士郎、着替えは終わりましたか?」
セイバーだ、どうやら着替えが終わったようだ。
「あぁ、終わっているぞ。何かあったのか?」
「いえ…その…げ、玄関で待っておりますので!」
そうセイバーは言うと走って行ってしまった。待たせるわけには行かない、起き上がって荷物を取る。
「お待たせセイバー」
玄関に行くとセイバーがぎこちない様子で下駄の感触を確かめていた。
「士郎、どうでしょうか?」
「うん、似合ってる。写真に収めたいくらい」
指でカメラのような四角形を作り、セイバーを見る。セイバーは嬉しそうだ。

「ありがとうございます、士郎も似合っていますよ」
「はは、サイズが少し心配だったけどぴったりで良かったよ」
　などと話していると後ろから足音が。
「はーい、２人ともこっち向いて～」
「？」
　２人して声のある方へ向く。パシャっと音がなる。
「ふふーん、２人の青春の思い出なんだからちゃんと残さないとダメでしょ？士郎のお姉ちゃんとしてこれほど嬉しいことはありません！」
　カメラで俺たちを撮ったのは藤ねえだった。セイバーはというと…
「それがカメラですか…」
　カメラに興味津々だった。声こそ冷静だったが目が輝いている。
「そうよ～これで思い出もパシャっと取ればずっと残せるってわけなのよー！これお古だけど貸してあげようか？」
「良いのですか？では大河の言葉に甘えて…」
　トントン拍子で話が進んでいく。カメラはセイバーが持つことになった。
「いいのか藤ねえ？今年も花火を取るために使うんじゃ…」
　あのカメラは毎年冬木大橋花火大会の写真を取るために藤ねえが使っていた。つま

りカメラを貸すと言うことは藤ねえは写真を撮りには行けないということになる。
「いいのよ、今年は士郎とセイバーちゃんが行くんだから行く人に貸してあげないと！いい写真、期待してるからね～」
ほら、行った行ったと俺たちの背中を押す。
「それじゃ、楽しんで来てね～」
手をひらひらと振ると玄関を閉めてしまった。このまま玄関の前で突っ立ってても何もならない、冬木大橋の方まで行くとしよう。
「じゃあ行こうか、セイバー」
「はい、士郎」
カランカランと音を鳴らしながら冬木大橋の方へと向かった。
☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆
「おぉ…！」
「まだ始まっていないのに…やっぱり人は多いな」
冬木大橋の近くにある海浜公園に来た。冬木大橋花火大会とは言っているがメイン会場は海浜公園である。まだ花火は始まっていないがすでに多くの人がいる。出店もたくさん並んでいた。花火大会と言うよりはお祭りのような雰囲気だ。
「士郎、あれは何ですか？」

少し先の方をセイバーが指差す。あれは…
「ん？あぁ、あれはりんご飴だ。まぁこういうところでは定番かな」
「なるほど…」
食い入るようにりんご飴を見つめるセイバー。いつも通りのセイバーで安心する。せっかくだし買うとしよう。
「すいません、これ２つください」
「あいよ！」
お金を払ってりんご飴を２本受け取る。
「はい、セイバー」
「ありがとうございます、士郎」
目を輝かせながら受け取り、早速頬張るセイバー。うん、いつも通りのセイバーだ。もぐもぐと食べ進め…一瞬で食べ終わってしまった…。
「なかなか美味でした、甘くてシャリシャリで…」
と、言いながら俺のまだ一口も食べてないりんご飴を見ていた。そんなに美味かったのか…ん？待てよ…これはチャンスだな。
「もう一口、食べるか？」
「いっ、いえ！私は先程いただきましたので…！」

ハッとして顔を赤くし、顔をブンブンと横に振るセイバー。りんご飴を顔の近くに持っていく。
「はい」
「…いいのですか？」
「どーぞどーぞ」
「では、お言葉に甘えて一口失礼します…！」
?!?!?!?!セイバーは顔を明るくし、ぱくんと食べると同時に俺も食べる。
「」
?!?!?!?!セイバーの顔は真っ赤になる。うん、作戦成功だ。こういう時しか隙がないからな～。ん、りんご飴美味いな…。
「な、な、なな何をするのです、士郎！」
「はは、悪い悪い。あまりにも隙があったもんで」
俺の脇をポカポカと叩くセイバー。よっぽど恥ずかしかったのか耳まで赤くして今にも頭から湯気が出そうだ。隣に入るがしばらく俯いたままだった。しくじったかな…。
「…絶対に仕返ししますからね、士郎」
「ん？何か言ったかセイバー？」

「い、いえ、何も言ってません！ええ、何も！」
　そ、そうか…なんだろう、小声で聞き取ることができなかったんだけど…大丈夫だよな…？そんなこんなしながら行く途中で焼きそばや焼きとうもろこしとか…それなりの量を買ってある場所へ向かう。
「か、買い過ぎでは…？」
「そうか？セイバーならこれくらい余裕だろ？」
「なっ…で、ですが士郎こんな大勢の前で食べるのは…」
　恥ずかしい、と…。セイバーのこういうところを見るとやっぱり女の子なんだと改めて実感する。
「そういうことか。安心してくれ、今から行くところは特等席みたいなところだから人は居ないはずだ」
　しばらく歩く。次第に人混みを抜け、冬木大橋を渡り反対の岸へと向かった。
「…懐かしいな、何も変わってない…」
　冬木大橋から少し歩いたところの大きな木。その木下にひっそりと設置されている椅子。切嗣は特等席だと言っていたっけ。
「ここが特等席だ、セイバー」
「ここから見えるのですか？」

「あぁ、昔来た時もここで見ていた。穴場スポットなんだ」
セイバーに焼きそばと飲み物を渡す。ヒューと高い音が聞こえた。
「お、始まった」
大きなドーンとお腹に響く音が鳴ると同時に大きな花が暗闇を照らす。数秒でそれは消えてしまった。
「これが…花火…」
セイバーは焼きそばを握りしめたまま花火を見つめていた。
「毎年家にも音は聞こえてくるんだが…こうやって見るとやっぱり綺麗だな」
ドーンドーンと花が咲く。夏の夜に咲く花、それは数秒で消えてしまうけどそれがいい。数秒という一瞬だからこそ、それがなおのこと綺麗で心に残る。パシャっとカメラの音がする。セイバーが写真を撮っていた。
「確かにこれは綺麗ですね…写真ちゃん取れてると良いのですが」
「問題ないさ、まだまだたくさん上がるからな」
「そうなのですか!それなら大河も驚くような写真を撮らなければいけませんね!」
セイバーはご飯のことなど忘れて花火を撮る。そんなセイバーを横目に花火を見ているとセイバーがオレを呼ぶ
「士郎」

「ん？」
　振り向くと同時にパシャっとシャッター音が聞こえた。
「思い出に1枚、です」
「はは、不意を突かれて変な顔になってなかったか？」
「へんな顔にはなっていないと思います」
　笑顔で答えるセイバー。そうだ、どうせなら…
「セイバー、カメラ貸してくれるか？」
「どうぞ、士郎」
　タイマーにセットしてっと…。すこし高いところにカメラを置いて走って戻る。
「士郎、何を…」
「ほら、セイバー！カメラの方！」
　セイバーの肩に腕を回して密着する。それに合わせてセイバーも腕を回す。二人して笑っていると後ろで花火が打ち上がり、炸裂した。炸裂と同時にシャッターが切られた。
「なんか豪華な写真になったな」
「そうですね、タイミングよく花火が上がるとは思いもしませんでした」
　花火もフィナーレなのか、すごい数が打ち上げられる。もうすぐ花火の打ち上げが終

わる。
「土郎」
不意にセイバーが呼ぶ。
「なんだ、セーー」
セイバーと言おうとした口が塞がれた。人肌の温もりと柔らかい感触。それと同タイミングで大きな花火が炸裂した。
「先程のお返しです、土郎」
突然のことで真っ白になる。えっと…俺はキスされた…よな?そのまま抱きつくセイバー。俺も自然とセイバーに手をまわす。
「…やられた」
「ふふ、土郎も隙だらけですね」
俺も人のことは言えないな…。
「土郎、今日はありがとうございます。花火はとても綺麗でしたし、何より土郎と思い出が作れた」
俺の胸の中でセイバーは話す。声は穏やかで表情を見なくとも笑顔だと分かった。
「俺もセイバーと来れて良かった」
「また来年も…連れていってくれますか?」

「もちろん、セイバーが行きたいなら」
　そんな俺たちことを話している後ろで最後の一輪の花が夜空に咲く。最後の一輪は大きく、青と赤の色をした花だった。
☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆
「テレビで見るのとは全然違いました、迫力がありながらとても綺麗でした」
「そうだな…家庭用のもあるんだけどこうはいかない」
「家庭用…！自宅でも花火が楽しめるのですか？」
「打ち上げるんじゃなくて手で持ってやるんだけどあれはあれでいい。気軽に楽しめるしな」
「なんと…是非今度やって見たいです！」
　そんな話をしながら帰路についた。花火は終わったが出店はまだ出ていたためか帰りのバスもそんなに混雑しておらずすんなり帰ることができた。その日はお風呂だ洗濯だをしているうちに時間は過ぎ、すぐに寝た。後日、藤ねえから写真が渡された。最後に撮れたあの写真は額縁にいれ、俺の部屋に飾ってある。セイバーはあの写真と他に何枚か保管しているようだが…俺も詳しくは聞いてない。また来年も行くつもりだ、浴衣を来て二人で花火を見に。

秋と言えば…？

「庭の掃除、しないとなぁ…」

はぁ、とため息をつく。俺の家の庭は自慢じゃないが広い。…が広いが故に掃除が面倒なのである。特にこの時期、秋は落ち葉も相まって掃き掃除をして落ち葉を定期的に無くさないと大変なことになる。幸いなことに今日は学校は休み、やる事も出かける用事もないから掃除をすることにしよう。

「えっと…箒は確か土蔵にあったかな」

とりあえず土蔵に向かい、箒とゴミ袋を握りしめる。落ち葉をちりとりに入れるより手で掴んでゴミ袋に入れる方が効率がいい。

「土郎、何をしているのです？」

「庭の掃除。定期的に掃いておかないとこの時期は大変なことになるからな」

「なるほど、一人では大変でしょう。箒は土蔵ですか？私も手伝います」

「あぁ、助かる。箒は土蔵にあるから適当に1本持ってきて使ってくれ」

こうしてセイバーとともに清掃を始めたのだが…

～2時間～

「これは…どうするのですか?士郎」
「あはは…どうしよう」
　こんもりと山のようになる落ち葉。冬木市指定の燃えるゴミ袋だと何袋使うんだろうな、これ…。
「焚き火にしようか、セイバー」
「焚き火…ですか」
「あぁ、何かあるのか?」
「いえ、今の時代にはもう電気で明かりが灯っているので焚き火はなんだか久しぶりな気がしまして…焚き火はよくするのですか?」
「いや、年に2回やるかやらないかくらいかな。こうやってつもりに積もってる時とかにな」
　次はもっと早くやろう、と思いながら落ち葉の中にアルミホイルで巻いたサツマイモを入れていく。
「士郎、それは何ですか?」
「さつまいも。一緒に焼いて焼き芋にしようと思ってさ」
　それに秋といえば食欲の秋とも言うしな、と言おうとすると
「なるほど、秋とは言えばさつまいも、秋といえば食欲の秋。さすがです、士郎」

とセイバー。なるほど、セイバーは食欲の秋か。セイバーらしい。
「焼きあがるまで時間かかると思うから火を見ながらゆっくりするか。セイバーは火を見ててくれ、お茶入れてくる」
「分かりました」
確かイリヤからもらった紅茶があったっけ。あれにしよう。小走り気味に部屋に戻り、紅茶を淹れる。紅茶なんてうちではインスタントばかりで淹れ方には慣れなかったが、ここ最近は慣れてきて手際よく作れるようになった。
「おまたせ、セイバー。冷めないうちに」
「ありがとう士郎」
二人で紅茶を飲みながら火を眺める。
「こうやって焚き火してると前藤ねえに怒られたことを思い出すよ」
「大河にですか？なぜ？」
「今時焚き火とかする家はないから煙が出てると火事と間違えられるんだ」
あの時も煙がもくもくと立たないようにはしていたけど、藤ねえにゲンコツされたっけ。
「なるほど、たしかに今時では焚き火なんてものはしませんよね」
納得するセイバー。火を眺めてる目は癒されてるというよりは…

「…セイバー、さつまいもが気になるか?」
「い、いえ!そんなことは!」
とぶんぶんと手を振るが視線は火、さつまいもに向いている。
「はは、セイバーは食欲の秋、か。とすると、遠坂や桜は…」
「桜も私と同じ、食欲の秋かと。ええ、間違いありません」
と力説するセイバー。言われてみれば桜もよくご飯を食べる。
「まぁ桜は身体を動かしてるからな〜。そりゃお腹が空くのは当然か」
部長もやっているのだから仕事も多いだろうから食欲も出るのだろう。
「それでは私が何もしてないのにお腹が空いている悪者みたいではないですか!」
騎士王様はお怒りでいらっしゃる。セイバーの悪口を言ったつもりはないんだけど…と、とりあえず嵐になる前に静めないと!
「さ、桜はスポーツでセイバーは俺と買い物行ったり、お手伝いしたりして身体動かしてるだろ?そういう違いだよ!」
苦し紛れの言い訳だがとりあえず効果はあったようでスッと嵐が静まる。
「なるほど、そういうことでしたか。では次に…凛はなんの秋になるでしょうか?」
「遠坂か…うーん…」
遠坂か…食欲には該当しないし、スポーツも違うよなぁ…。あ。

「…強いて言うなら勉強の秋、かな」
「勉強ですか？」
「あぁ、遠坂ここ最近魔術の勉強をしてるみたいでさ。この前教えを受けようと思ったら明らかに寝てない顔で。んで問いただしたら勉強しているって言ってたな。だから勉強の秋」
「なるほど、だからこの前帰ってくるのが早かったのですね」
「そういうこと。それじゃあ次は…ライダーだ」
「ライダーですか…読書の秋ではないでしょうか？」
「あー確かに。本読んでるもんな、ライダー」
本読んでるも何もライダーの部屋には本が山のようにある。まるで図書館のように。俺もたまにライターから本を借りて読んでいるし、暇があれば本棚でも作ってあげたいところだ。
「では次は…イリヤスフィールはどうでしょうか？」
「イリヤか…うーん、難しいな…」
イリヤは何というか食欲…読書もあまりしてないからなぁ。あ、そういえばこの前テレビを見ながら俺も見るべきだ～って指摘してたっけ。
「イリヤも遠坂と同じで勉強、じゃないかな」

「ほう、理由を聞かせていただきますか?」
「この前イリヤが芸能人のニュース見ててさ。あんなにつまらないのを何で見ていられるか聞いたら世間に詳しくなっておかないといけないからって言われたんだ。だから勉強かなって」
　実際俺は見るとしたら政治とかのニュースか天気予報くらいだ。そろそろ芸能人関係のニュースとか見ておかないとイリヤに怒られそうだ。
「なるほど、私もよくニュースは見ますが最近はイリヤスフィールも一緒に見てますね。特に芸能人関係のニュースの時は食い入るように見ていましたが…なるほどそういうことでしたか」
　納得するセイバー。意外と見てないようで見てるんだよな、セイバーは。何だかんだライダーのことも気にかけたりするし…何でこうぶつかり合うかなぁ。
「それじゃあ最後」
「…大河、ですね」
　藤ねえかぁ…藤ねえはいっぱい食べるし、教師だから常に勉強してるし。スポーツは…いや、顧問だからってスポーツやっているには入らないか。
「スポーツ以外当てはまる…?」
「スポーツ以外当てはまるのでは…?」

セイバーと同じ意見だった。
「セイバーもそう思うか？」
「はい。大河はよく食べますし、教職員なので常に勉強もしているでしょう。スポーツは…顧問しているからと言ってこの前士郎から聞いた話ではやっているには含まれないでしょうからないでしょう」
「俺と全く同じだな。はは、藤ねえのスポーツといえば剣道だけどセイバーに構えろとか言って、セイバーは竹刀すら持ってないのに攻撃してさ～、んでセイバーが藤ねえの竹刀を取って…懐かしいな」
「そんなこともありましたね。まさかあれだけで士郎を盗られた、と大泣きされるとは思いませんでしたが」
苦笑するセイバー。あの時の桜と藤ねえは突然のことで何が何だかだっただろうなぁ。藤ねえがしばらく泣き止まないもんで全員で介抱したんだっけか。
「いや、俺もあんなことになるとは思わなかったんだけどな。ちなみに藤ねえ、ああ見えてスポーツ万能でいろんなスポーツにすぐ順応できるんだってさ…団体競技以外は」
「すごいのですね、大河は。やはり見習わなくてはいけませんね」
いや、あれを見習うのはよしてくれ…手のつけられない猛獣が増えてしまう…。冬木の虎に獅子王様ですか…ひえぇ…考えただけでゾッとする。俺は気を失うだろうし桜

に関しては闇落ちしかねん。そうならないようしないようにしないと…っと。
「そろそろ、焼き芋が出来てる頃合いかな」
　土蔵にあった少し長めの棒で真っ黒になった落ち葉を探り、その中からアルミホイルに包まれたサツマイモを取り出す。取り出しながらセイバーに1つパスする。
「セイバー、焼き芋は焼きたてが美味いから先に食っててくれ。熱いから気をつけてな」
　焼き芋を受け取ったセイバーは左右の手に芋をパスしながら少しずつアルミホイルを剥がしていく。残りは藤ねえや桜たちに残しておこう。あとは水をかけて…っと。
「では、士郎。お先にいただきます」
　焼き芋のアルミホイルを剥がし終わったセイバーが焼き芋を頬張る。
「…おぉ、これは…。士郎、これはどのような味付けを施したのですか?」
「味付け…? いや、味付けはしてないぞ。ただほんとに芋を焼いただけだ」
　まあま強いていうなら火で炙るとかで高温ではなく、低めの温度でしているから甘みが増してるってくらいか。
「なんと…これさえあれば私はまだ数年、いやもっと戦えたはずだ…」
　クッと悔しそうなセイバー。そういや前も言ってたな、料理はとにかく雑だったとか。初めてじゃがいもを見せた時は少し絶望したような目をしてたもんなぁ。…それだけで芋づくしの料理だったのかなと容易に想像できるくらいに。

「それと、今のゆったりした雰囲気も相まって余計に美味く感じるんじゃないかな」
「確かに一理あります。戦いの前は味を気にしたりなんてできないですから」
もっきゅもっきゅと平らげるセイバー。いつも思うがセイバーは美味いものを食べると分かりやすく態度や非常に出るから作る身としては嬉しいしありがたい。
「セイバー、そんなに急いで食べなくても焼き芋は逃げないぞ?」
「ふぁい?!」
「はは…ほら、セイバー」
もう一本セイバーに渡し、俺も1本食べる。夕飯まで時間もあることだしセイバーは2本食べても問題ないだろう。
「あぁ、美味です。あと30本は食べられる…!」
「30本は勘弁してくれ、俺の財布がすっからかんになっちまう…。けど、まださつまいもはあるからまた今度もするか?」
「その時は私も呼んでください、手伝いますので」
グッと親指を立てるセイバー。まさかそこまで気にいるとは思わなかった。
「さてと、俺はそろそろ夕飯の仕込みを始めないとな」
焼き芋を食べて箒やちりとりを土蔵に戻す。セイバーも手伝ってくれたおかげですんなりと片付けも終わった。

「さて、セイバー。今日の夕飯どうしようか?」
どうせなら何か食べたいか聞いておこう。そのほうがセイバーも喜ぶだろうし。
「では、今日は秋の味覚を使ったメニューでお願いしたいです」
なるほど、そうきたか。確か秋刀魚と栗と…結構色々あった気がする。
「わかった。今日の夕飯のコンセプトは秋の味覚大集合って感じだな。待ってろ、今日も腕によりをかけた料理を作る」
「ええ、楽しみにしてます、士郎」
そんな会話をしながら料理をする準備に入る。焼き芋、また作らないとな~と思いながら今日のメニューを決めるのであった…。

2人で素敵な1枚を

「～♪」

あら、キッチンから誰かの鼻歌…ははーん、これは桜ね。そういえば今日は当番だったわね、それなら当然か。

「どうしたの桜、何かいいことでもあった？」

キッチンのある部屋にひょこっと顔を覗かせるのは私、遠坂凛だ。

「あっ、姉さん。いえ、特に嬉しいとかないんですけど…」

「さっきのフレーズ、確かテレビCMのよね？」

「はい、なんだが耳から離れなくて」

私はテレビとかあまり見ないけどあれは独特のテンポというか、何か耳に残る。桜はつい鼻歌で出てしまったんだろう。

「姉さん、それは…」

桜が私の持つ物を指差す。

「あぁ、これね。少し散歩に行こうと思って…この前家の掃除をしてたらカメラがひょっこり出てきたから使ってみようと思って」

今時のカメラといえばデジタルカメラってものらしいけどこれは違う。年季の入ってところどころボロがあったけどそこは衛宮君に無理言って治してもらった。今時フィルムを使うカメラなんて珍しいのか、フィルムを買うのに少し苦労した。…あと操作に慣れなくて1ヶ月かけて使い方をマスターした、なんて死んでも桜や衛宮君には言えないわね。

「なるほど…じゃあこの食器を食器棚に戻したら準備するのでちょっと待っててもらえますか？」

「いいわよ～…あっそうだ桜」

「なんですか？ねえ…」

パシャっと…ふふん、どんな感じに撮れてるかは後でフィルム見てみないと分からないわね～。なるほど、そう考えると今のデジカメってやつはすごいのね。

「桜の写真いただきよ！衛宮君にあげちゃおうかしら」

なーんてそんな冗談…。

「…」

ちょっと、そこ黙るとこじゃないと思うんだけど。しかも顔がちょっと赤いんだけど?!

「と、とにかくそういうわけだから！準備が出来たら声をかけてね、桜」

「あ、はい！分かりました、姉さん」
キッチンを後にして自室へ戻る。部屋のドアを閉じ、大きく息を吐く。
「…ふぅ、緊張した…」
姉妹とはいえ、長くは一緒にいなかったし。こういう風に誘うのは今回が初めてだから。
「〜〜〜!!」
布団にボフン、と倒れこむと枕に顔を埋めて声にならない声を出す。とりあえず誘えた、嬉しい、とそんな気持ちを枕にぶつける。姉らしいことはあんまりできていないのよね、桜は部活で忙しくて私は魔術協会に報告のために色々まとめててバタバタしてたし。
「…何着て行こうかしら」
タンスをひっくり返す。衛宮君の家に置いている分の服を全部出す。
「秋も終わりかけで冬だし、そろそろ冬物よね〜。入れ替えの時期かしら」
あれでもないこれでもない、とあたりに服が散らかっていく。衛宮君がみたら呆れられそうね、これ。…っていうかこれ絶対片付け面倒だわ、致命的なミスね私…。
〜約1時間後〜
一応だけど衛宮君に出かけてくると言っておく。…ってあれ…？

「…あれはセイバーね。どうしたのかしら」
見た感じセイバーは多分どうしたらいいのだろうと迷ってるように見える。
「姉さん？どうかしたんですか？」
「しっ、今ちょっと面白そうだから…静かに見ていましょう」
はぁ、と桜は返事をすると私と同じように壁から顔を出して見る。ははーん、なるほど士郎が干してる布団の上で寝てしまってて、セイバーは風邪を引くからと布団をかけたけどそれじゃ干す意味がないからどうしようかと困っている、と。これは見ものね。
「先輩お布団で寝ちゃってますね」
「そうみたいね、セイバーはどうするのかしら…？」
そうね、ここは添い寝してくれるとあとで色々面白いことになりそうね、フフフ…。と決まればカメラを構えますか。
「失礼します、士郎」
し、しし、士郎が…お姫様抱っこされてるぅ!?ええ…セイバーの方が絶対軽いと思うのだけれど…？ってそんなことしてる場合じゃないわね。
「フッフッフッ…予想とは違ったけど…いただきっ！」
シャッターをきる。多分綺麗に撮れてると思うけど、まあ出してみないと分からないわよね。

「行ってしまいましたね、先輩とセイバーさん…」
「そうね…とりあえずセイバーに出かけると伝えてから出かけましょう、桜」
ライダーに伝えるのもありかな、と思ったけどそういえば今日はバイトだったわね。このまま後を追うとバレそうだし…ここで待っていればいっか。縁側に2人して座る。うーん、いい感じに日差しが…これは確かに眠くなるわね…。
「おや、凛に桜ではないですか。お出かけですか?」
おっと、以外とお早い…。もう少しかかるかと思ってたのだけど。
「ええ、ちょっと桜と一緒にお出かけしようと思ってね。そんなに遅くはならないと思うから」
「分かりました、士郎には伝えておきます。いってらっしゃい」
笑顔で答えるセイバー。あゝ、早くあの写真を見せてみたい…という気持ちをぐっと抑えて平然な顔で士郎の家を出る。さて、まずはどこから行こうかしら。
「姉さん、まずは柳洞寺に行きませんか?」
柳洞寺かー、確かに秋だし紅葉は綺麗だろうけど…あのメガネ(一成)がいるのよね…でも桜の期待してるような目は…裏切れない…。よし、覚悟を決めなさい私!せっかく桜も一緒に行くんだから少しは我慢してあげるのよ!
「いいわね!じゃあまずは柳洞寺へ行きましょう桜」

笑顔で桜に答えながら心の底では奴には会いませんようにと呪文のようにと願った。

☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆

「ところで姉さん、写真を撮りに行こうって突然どうしたんですか？」

柳洞寺に向かいながら桜が私に問う。

「せっかくだし、何かいい写真撮っておきたいなって。特別理由があるわけじゃないのよ」

カメラもたまたま見つけて治してって感じだし。それに今の時期は暑くもなく寒くもなく適温なのである。冬は寒くて出たくなくなるから、今使わないと春まで使うことはないという本音は心の何処かに投げ捨てた。

「許可されるなら桜が部活してるところ撮るのもありかしら？」

サッとカメラを桜に向ける。

「いいですけど…恥ずかしくてちゃんと出来ないかもしれないです…」

と弱気な桜。この子プレッシャーとかそういうのに弱いものねぇ…なら気付かれないようにこっそりと取りに行くしかないわね、藤村先生に相談してみようかしら。…お、見えてきた見えてきた。

「相変わらず、ここの階段は…試練だわ…」

長い階段を登りきったところに柳洞寺はある。

「私は部活してますし、姉さんは身体を鍛えてますし…多分楽に登れると思います」
まあ確かに鍛えてはいるけど…こんなの毎日は私なら死ぬわね、めんどくさくて。まあ何言っても始まらないし、とりあえず登りますか。
２人して石段を登る。普段来ないから不思議な感覚ね。ふと桜を見ると途中で足を止めて街を見下ろしていた。天気も良いからか、反対側の山まではっきり見える。
「桜」
桜を呼ぶと同時にカメラを構えて…。
「あ、すいまーー」
写真を撮る。うん、我ながら結構いいのが撮れたと思うのだけれど？
「振り向いた桜、すごく綺麗だからつい撮っちゃったわ」
「姉さんずるいです！私も姉さんの写真撮りたいです！」
耳が赤い。オホホ、隙がありすぎよ桜！
「分かったわよ、はい」
桜にカメラを渡す。桜はカメラの扱い方を知っているようで早速ーーえ？
パシャッ
「やりました！姉さん、これはさっきのお返しです」
フフンとしてやったり顔の桜。…やられた、隙がありすぎるのは桜だけじゃなくて、

私もか。
「ちょ、ちょっと桜!·今のはずるいわよ!·どうせならもっとこう…素敵な写真をー!」
　顔と耳が熱い。うぅ、これ絶対赤くなってるぅ!姉妹だからってここまで似る必要はないでしょー!!!
「分かってますよ、姉さん。ちゃんと先輩やアーチャーさんにも認めてもらえるような素敵な写真を撮ってあげます!」
　やる気な桜。ほんとは桜の素敵な写真を、とは思ったけれど…ま、この際だから別にいいわよね。
「そ、じゃあお願いするわね桜。とびっきり素敵な写真を撮ってよね!」
　と、後ろから足音。顔を向けるとそこには眼鏡をかけたーー。
「げ…」
「げ、とはなんだ遠坂。ここは俺の家でもある、俺がいてもおかしくはあるまい?」
　会いたくなかったやつに遭遇。ここは皮肉のひとつでも…いや、桜の前でそんな見っともない姿は…。
「まあそうね。で、何しに来たのよ」
　とりあえず返す。ここは冷静に、落ち着いて対処よ、ここで挑発には乗らない…。
「む、それはこちらの台詞であろう遠坂。…それはカメラか?」

「ええ、桜と写真撮って回ってるのよ」
「そうか、なら好きに見て回るといい。言っておくが、何か壊したりしたらちゃんと弁償してもらう、だから壊すなよ」
「壊すって…壊さないわよ。また写真撮るだけなんだから」
横を通り過ぎる。さっさと写真を撮って帰りましょー。…事例があるから警告したのだが、とかなんか聞こえたけど知らない。ええ、何も知らないわ。ナニモシリマセンヨー。

☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆

あれからたくさん回った。柳洞寺の後は公園へ、そして商店街へ、その次は新都へとたくさん回ってたくさん写真を撮り、近くのカフェに入ったのである。
「はあ～つっかれたぁ…。もう足が棒のようになってるわよ、明日は筋肉痛かしらね～」
「そうですね、こんなにたくさん歩いたのは私も久しぶりです」
メニューを手に取り、とりあえず飲み物と軽く食べれる物を注文する。考えてみればお昼すら食べずに回っていたのだからそりゃ疲れるってものよ。
「もうそんなに写真も撮れそうにないし、カフェを出たらゆっくり帰りましょ」
「そうですね、あんまり遅くなると先輩やライダーが心配してしまいますし」
注文したコーヒーを飲みながらふぅ、と息を吐く。始めこそトラブルがあったけれど

…桜は楽しそうに写真撮れてたし、良い息抜きになったかしら？
「良かった、桜が楽しそうで」
「え…？」
「最近、何か思い詰めてるような顔してたというか。暗い顔の桜を見る時があったから、誘ってみたのよ」
　案外、そういうのって他の人から見るとすぐバレちゃうわよね。私もセイバーや士郎にたまに言われる時がある。そういう時は大体魔術関連で行き詰まってる時だけど。
「ちょっと部活で悩み事があって…それでどうしようかなと悩んでいたんです」
「なるほどね～、具体的に話せるなら聞かせてくれる？何か力になれる…かどうかはわからないけれどアドバイスくらいなら出来るかもしれないわ」
「ええっと…その、ライダーとセイバーさんについてなんですけど…」
「あぁ…」
　大体察する。あの２人は犬猿の仲だから、士郎も手を焼いてるっていってたっけ。
「どうしたら仲良くしてくれるのかな、って…。姉さんならどうしますか？」
　ずいっと顔を近づけて聞いてくる我が妹。うーん…そうね…。
「難しいわね…。私ならーー」
　諦める、と言いかけて止める。これは一番いけない回答だわ。…桜が怒った時はもの

すごく仲良くなるのよね、多分桜が怖いから。
「私ならまずは士郎付きで４人で出かける、とかかしら？まずはお互いのことをもう少し知るとか、小さなことから始めるのがいいかなって」
苦し紛れっぽいけど仕方ない。もしこれが実現したら頑張ってね、士郎。…私は悪くないわ、えぇ！…多分。
「なるほど！流石姉さん！」
参考になります！とそのままどうしたらいいかをメモに書いてる様子。あー、ごめんなさい士郎。多分これ実現するわね。そんなことを思いながらコーヒーを飲み目を閉じてふぅ、っと息を吐く。まあ楽しかったし、桜の悩みも多分解決したしいっか！
「姉さん」
「なーに、桜？」
目を開けるとカメラのレンズがこちらに向いている。が、となりに桜が居るから多分桜も一緒に映るだろう。
「自撮り、って言うんでしょうか。やりましょう！」
手が震えてる。片手で持つには少し重いカメラだから当たり前よね。手を伸ばし、カメラを半分持つ。これで重みは少し減ったはず。
「桜、手が震えてちゃ綺麗な写真が撮れないわよ？私も少し持つから素敵な写真お願い

ね？」
「姉さん…！はい、任せてください！」
　恥ずかしさは無かった。恥ずかしさの代わりに自然と笑みがこぼれた。そしてそのまま、シャッターが切られたのであった。
☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆
「はいこれ、桜が欲しいって言ってた分」
　現像した写真が入った袋を渡す。枚数が多くて現像にすこーしだけ時間がかかってしまった。桜に渡す前に士郎に例の写真を上げたら顔真っ赤にしてたけど…フッフッフッ、隙を見せる士郎が悪いのだ！
「ありがとうございます、姉さん！」
　少し話をして家に戻る。私もまだ現像した写真はちゃんとみてないから帰ってちゃんとみよう。
「さてっと…」
　帰宅して早々、写真を見る。たまーにブレてるやつがあるけどそれはご愛嬌。
「どれも綺麗だけどやっぱこれが1番のベストショットよね」
　手に取った写真は最後にカフェで取った桜とのツーショット写真。空いている写真立てを手に取り、そっと入れて飾った。

「これでよし、っと。アーチャー！ちょっといい？」
庭でのんびりしているアーチャーを呼びつける。どうせ暇なら写真でも見てもらおう。
「これ、桜と撮ったんだけどどう？」
撮った写真を吟味するアーチャーとそれを見守る私。この後何時間もかけて写真を評価しあったのであった。
☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆
一方その頃、衛宮家の桜の部屋。
「～♪」
服をタンスに入れながら鼻歌を歌う桜。
「桜、ちょっといいですか？」
「ライダー？どうしたの？」
今日は何もなく、お互い衛宮家でゆっくりしていた。
「桜、士郎が呼んでいます。おそらく今日の献立についてではないかと」
「分かったわ、ちょっと行ってくるねライダー」
メニューの相談に向かう桜。と、ライダーはあるものに目をつける。
「これは…」

ライダーが見つけたのは写真だ。写真立てに入ってる。その写真に写っているのは恥ずかしいのをグッとこらえてカメラを持って、笑顔の少女と同じく恥ずかしいを我慢しているのか、少し顔が赤いが笑顔の少女が写っている写真だ。

「桜と凛のツーショットですか…。なるほど、成長しましたね桜」

フフッと笑うライダー。

「ということは凛も同じように飾っていたりして…姉妹は外は似てなくても中が似ている時はありますし」

手に取っていた写真立てを元の位置に戻す。お互いに写真立てに入れて飾っていることに気がつくのはこれからまた少し先のお話である。

衛宮家のクリスマス

「うぅ～寒い…」

息は白く、凍てつくように寒い。この季節が来るといつも負担が恋しくなる。家主兼料理番の俺は朝一番に起きて部屋にあるストーブをつける。

「さて、今日の朝は…鮭の塩焼きと卵焼きと…」

冷蔵庫にあるもので朝食を作る。これがいつもの俺の仕事。料理をしてる間にいつのまにか皆起きてきたり、朝食を食べにうちに来たりと炬燵に大集合である。

「あー、もうすぐクリスマスねー」

ふと遠坂がテレビを見ながら呟く。ちょうどクリスマスのＣＭでも流れたのだろう。

「クーリスマスがこーとーしもやって来るー、ってか？」

「それコンビニのＣＭでしょ」

最近よく見るＣＭのワンフレーズだ。しかし、クリスマスかぁ…。去年まではこんなにたくさん人いなかったからなぁ。確か去年は桜と藤ねぇと俺とでクリスマスケーキをつくったっけ。

「今年のクリスマスみんな予定はあるのか？」

「私は別に～、というよりクリスマスなんてあんまり意識してなかったから今年もいつもどうりゆっくり過ごす予定だけど」
「私と藤村先生も予定は特にありません。部活はありますけど遅くはならないそうです」
　遠坂と桜、藤ねえは予定なしと。…藤ねえは毎年ベロベロになるまで飲むからな、遠坂が来てくれると助かる。
「ライダーとセイバーは？」
「私は何もありません」
「私も特には」
「ん」
　とりあえずみんな暇はある、と。せっかくだしクリスマスパーティーといきますか。
「それじゃあクリスマスパーティーをやろう。と言ってもまだ何にも考えてないけどな」
　イリヤも誘ってみよう。イリヤが良くてもメイドさんがどう出るか分からんが…。
「私はそういうのあまりやったことないから士郎に任せる形になっちゃうけど？」
「遠坂、安心してくれ。俺や桜だってこんな大人数でクリスマスパーティーなんてしたことないから」

「えぇ…あんまり安心できないわね、しょーがない私も手伝うわよ」
　ありがとう遠坂、実のところ料理人２人では大量の料理を作るのは厳しかったから即戦力の人材は非常に助かる。
「クリスマス…というのは具体的にはどのようなものなのですか？」
　セイバーの質問は最もである。ライダーも私もよくわからないのですが、と言わんばかりの視線を投げる。
「俺もそんなには分からないけど…まあ身内と一緒に過ごしたりする、って言い方が近いかな」
「へぇ～、士郎。セイバーが効いてくるだろうと思って勉強しておいたの？」
　さっきテレビで見た…とは言わないでおこう。
「えっ？あぁ…まあそんなとこ。家族や恋人と一緒に食事したりして楽しく過ごすのが今のクリスマスかな」
「なるほど、それは是非やってみたいです！料理、ということはクリスマスにしか食べられないものもあるのですか？」
　流石セイバー、食べ物に目がない。…今にもヨダレが垂れそうだぞ～王様の威厳なくなっちゃうよ～。
「まあ全部が全部そうとは限らないけど…大きなケーキはクリスマスくらいじゃないか

な」
「おぉ…クリスマスという文化には感謝しなければなりませんね！」
「なるほど、クリスマスの概要は分かりました。何か手伝えることがあれば私もセイバーも手伝いますので気軽に声をかけてください、士郎」
　自分の世界に飛び込んだセイバーを置いておいて冷静に話すライダーだが少し楽しみなのか笑顔が見える。そのたまに見せる笑顔、反則級なり。
「ありがとう、その時はよろしくな」
「イリヤスフィールは呼ばないの？」
「声はかけてみるよ、まあその…もしかしたらイリヤのお城が会場になったりして…なーんて」
　そんな会話を朝してたわけなんだが…
　～夕方、イリヤスフィール城～
「クリスマスパーティー？うちでもやってるわ、どうせならみんなを呼んでここでやろうよ、士郎！」
「へっ？」
　まさか現実になるなんて…いやいやいや、朝のあれは冗談半分だったんだけどなぁ…。

「お嬢様！そんな勝手に決めてもらっては…」
　まぁ当然の反応だ。メイドさんの1人であるセラはなんかこう…あれだけ当たりがひどくないか…？もう慣れたんだけど…慣れって怖いな。
「セラ、私が決めても別にいいでしょ？聖杯戦争はもう終わってるし、士郎の料理は美味しいんだから」
　プイッと顔を背けるイリヤ。頬が少し膨らんでる、お怒りのご様子。
「私はイリヤに賛成。士郎の料理は美味しいから」
　リズはイリヤに同意することが多い。イリヤ曰く、リーゼリットさんとは繋がりがあるらしく、意見がよく合うそうだ。
「リーゼリットまで…！た、確かに衛宮様のお料理が美味しいのは認めますが…衣装はお持ちでは…」
「確か衣装室にあったと思うけど…？セラはそんなに嫌なの？」
「い、いえそう言うわけでは…仕方ありません」
　はぁ、とため息をつき承諾するセラ。保護者の立ち位置ではあるけど城の所有者はイリヤなので権力はイリヤが上という…。結局はイリヤの言う通り、と言うことになる。
「やったぁ！そう言うわけだから士郎、みんなにも伝えておいてね！」
「うおぁっ?!イ、イリヤ?!」

満面の笑みで抱きついてくるイリヤ。セラ、目が笑ってないヨ。違うヨ、これは事故だヨ。
「と、とにかく俺に手伝えることがあったら言ってくれ。やれる範囲でやるから」
「うーん、士郎はやっぱり料理担当ね。セラとリズでも十分作れるけど士郎の料理も食べたいし」
料理を作る者としてこれほど言われて嬉しいことはない。うむ、これは奮発して良い材料でいつもより良い料理作らないとな。
「イリヤ、当日にお迎えは私がしてもいい？」
「そうね、よろしくねリズ」
トントン拍子に話は進んでいく。やると決めればそれにちゃんと従うメイドさんもそうだけど…なんか夢みたいだな、お城でクリスマスって…。
「衛宮様、聞いておられますか？」
「うぇっ？あぁ…ごめん、聞いてなかった」
「士郎達にもクリスマスの時は私のお城にある服を着てもらうけどって言いたかったんだけど、何か考え事？」
「考え事っていうか…こんなお城みたいなところでパーティーってのがなんか…楽しみだなって」

いやほんと。我々庶民じゃおとぎ話みたいなものだし。
「そっか、士郎は大きなパーティーとか出たことないもんね。うーん、セラ」
「何でしょうかお嬢様」
「士郎に基本的なことだけは伝えておいてね。セラと士郎がちゃーんと意見を合わせておかないと上手くいかないんだから」
「お嬢様がそうおっしゃるなら…仕方ありませんね、衛宮様」
「は、はい！」
思わず背筋が伸びる。
「クリスマスの件で少しお話し合いを。そうしなさいとお嬢様からの指示ですので」
「あ、あぁ分かった」
この後2時間くらいで話し合いを終え、早速準備に取り掛かることにした。
〜その日の夜、士郎の自室〜
「…うーむ、予算オーバーか…」
電卓を打ちながら頭を抱える。うぅーん、メイドさんからはできるだけ質のいいものを、とのこと。多少は妥協してもらうとして問題は料理だよなぁ。
「肉料理、か。んー…あっ」
突然閃く。肉料理はチキン、と先行していたがアレがあるじゃないか。

「しかも安くても高級感も出せる。…よし、これに決定だ」
買い出しリストに書き込んでいく。クリスマスは明後日。決まったのがギリギリなのもあって料理もたくさんは作れないと思っていたけどメイドさんもある程度作ってくれるらしい。とりあえず明日にはある程度仕込みやらなんやらを終わらせておかないといけない。
「明日は忙しくなりそうだなぁ…」
そっと目を閉じる。明日の予定を整理しているうちに自然と寝てしまった。
☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆
～クリスマス当日～
「わぁ～…素敵です、姉さん！」
「あら、桜も綺麗よ、よく似合ってるわ」
女性陣はドレスを着る。遠坂は自前で桜はイリヤからレンタルしている。イリヤ曰く、凛に貸すのは嫌だけど桜ならいいとのこと。俺はスーツかタキシードらしいが…料理をしないといけないのでイリヤのお城で着ることになっている。
「どうです士郎！似合ってますか？」
「桜、私たちも着替え終わりました」
もちろんセイバーとライダーも女性なのでドレスを着る。…のだが。

「セイバー…なんでスーツなんだ？」
「えっ？あっいえそのですね…ドレスは落ち着かないというか…」
真っ黒なスーツに革手袋、まるでボディガードである。
「…」
なんと言えばいいか、似合ってるから何も言えない。だけどせっかくだしセイバーのドレス姿も見たいなー…とか…。
「衛宮君、ちょーっとセイバー借りてもいいかしら？」
「へっ？」
俺の返事を待たずして遠坂がセイバーの肩に手を置く。
「セイバー、ちょっといいかしら？」
「凛…？わわっ、凛?!」
ズリズリと連れて行かれるセイバー。遠坂のやつ…ありゃ本気だな…。
「ライダー素敵！可愛い～！」
「さ、桜…その、私可愛くは…」
タジタジのライダー。桜にタジタジなのは珍しくないがドレス姿はお目にかかるのはこれ以降ないかもしれない。
「先輩、ライダーのドレス姿どうですか？」

「似合ってると思うぞ、桜がドレスを選んだのか？」
「はい、ライダー初めは私はいいですって言ってたんですけど、ほらライダー、私の言った通りでしょ」
「そうですが…その…」
　ライダー…こんな格好したことないから恥ずかしいのか？これもまたもう見れないかもしれないものを見た気がする。
「さて…俺は先にイリヤところで料理しなきゃいけないから、先に行ってる。桜たちはあとでリズが迎えに来るからそれで来てくれって」
「わかりました先輩、また後で」
　上着を羽織り、家を出る。１２月中旬なこともあり、雪が積もっている。…ってあれは…
「シーローウー！」
「イリヤ?!」
　走って飛び込んでくるイリヤ。とっさの判断で受け身を取る。相変わらずすごい勢いである。いやしかし…
「なんでここにいるんだ？」
　お城で待ってるのかと思ったら我が家の前にいるし、１人で来たのか？

「リズがね、雪積もってシロウが来るの大変そうだから迎えに行くって言ってたから付いてきたの！」
　イリヤが指を指す方を見ると車が止まってる。なるほど、あれで…。
「イリヤ、寒いし風邪引く前に乗ってしまおう」
「そうね、風邪を引いたらせっかくのクリスマスも台無しになっちゃうわね」
　車に乗り込むとリズがこちらを覗き込んでいた。
「シロウ、こんばんは」
「こんばんはリズ」
　挨拶を返すと笑顔で話を続ける。
「今日雪が凄くて寒いから家まで迎えにきた」
「あぁ、おかげで助かったよ。ありがとうリズ」
　ふぅ、と息を吐き座席に背を預ける。流石イリヤのところの車なだけあって乗り心地が良すぎる。一般庶民の俺たちじゃ普通じゃ乗れないよな…。イリヤとリズの会話に混ざって話してるうちにイリヤのお城に着く。早速厨房に入り料理をしておくとしよう、セイバー達が来る前に終わらせておかないとな。それから厨房に入る直前にセラさんからお嬢様のお口に合うような料理を、と念押しされた。
「よし…やるか」

こうしてせっせと料理に取り掛かる俺をイリヤは静かに見守っているのであった。

☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆

「ん…？」

「どうやら、到着みたいね」

どうやらセイバー達がイリヤのお城に到着したようだ。…が。

「つ、疲れたわ…」

「はいー、疲れてしまいました…」

「あっ、士郎！今着きました！」

「お、おう…」

桜と遠坂は疲れ切っている。何かあったんだろうが深くは聞かないでおこう。

「セラ、お客さん連れてきた」

「ご苦労様ですリーゼリット」

これで全員だけど、みんなドレス姿だから全然雰囲気が違う。ぱっと見なら貴族のようにも見える…ってあれ。

「セイバーは…私服か？」

セイバーだけ私服である。するとセイバーは顔を赤らめ、桜と遠坂はフフッと笑っている。

「そのことなんだけどね、士郎の仕事はもう終わった？」
「ん？あぁ、あとは机に運ぶだけかな」
「じゃ、セイバーのドレスを選んであげなさい」
「…は？」
　ええっと…俺がセイバーの着るドレスを選べ、と…？
「士郎、その…私からのお願いなのですが…」
「そういうことよ士郎、私が選ぼうとしたらどうせなら士郎に選んでほしいって」
「り、凛！それは言わないと約束したではないですか！」
　ははー、なるほどー。うん、これが幸せってやつかなー…。
「わかった、セイバー。一緒にドレス見てみるか？」
「…はい…」
　顔は見えないが耳が赤い。こういう所は何も変わらないよな、セイバー。
「えっと…勝手に進んでるけど、いいのかイリヤ？」
　ここはイリヤのお城で、ドレスもイリヤからの借り物ということになるのだが…。
「別にいいわよ。それに騎士王様のおめかし姿も気になるしねー♪」
　小悪魔イリヤの意地悪な一言である。詳細は省くがセイバーは遠坂からもらった服と甲冑以外着たことはない。…まぁ例外はあるが。

「ん…まぁ、セイバーに似合うドレスを選ぶよ」
「エミヤ様だけでは心もとないでしょうから…リーゼリット」
「わかった、シロウ。こっち」
　リズが案内してくれるようだ。
「それじゃ、行こうか。セイバー」
　セイバーに手を差し伸べる。
「お、お願いします士郎」
「それじゃあとは私たちでやっておくから、ごゆっくり～」
　遠坂たちにあとは任せて、俺はセイバーのドレスを選びに行くことになったのである。

☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆

「ここ、ドレスがたくさんある」
　リズがドアを開ける。
「おぉ…」
「…」
　セイバーは声を上げるがその量に俺は思わず絶句する。たくさんあるというかその次元を超えてるというか…。

「こ、この中から…ありすぎて迷うな…」
「シロウ、これは私のおすすめ」
リズが指さしたドレスは雪のように白く、青色の…。
「あー…リズ、ありがたいけどあれはセイバーが嫌がるかな」
「そっか、じゃあ仕方ない」
例外の時の服装とすごく似ている。ウエディングドレスっぽくて俺が緊張してしまいそうだ。…いやいやそんなことを考えてる場合じゃない。あたりのドレスに目をやる。ちなみにセイバーだが、周りに目をやるだけで俺が選んでくれるのを待っているようだ。
「お…？」
1つのドレスはすごく惹かれた。暗めの青色がメインで腰のあたりに布で花を模したものに黒色の長手袋。可愛いというかクールな感じになりそうだ。
「リズ、あれ取れるか？」
「あの青色のやつ？わかった」
あの、その長い棒はいったいどこから…？長い棒（？）でひょいとそのドレスをとると俺に渡す。
「サンキュー、リズ。それと俺はドレスの着せ方分からないからセイバーのお手伝いを

してもらってもいいか？」
「うん、わかった」
　そのドレスを持ってセイバーの元に行く。
「士郎が選んだのは…それですか？」
「あぁ、多分だけど似合うと思う。リズが手伝ってくれるからちょっと着てもらえるか？」
「わかりました、少々お待ちを！」
　そして着替えるために消えていく。さて…こうなると暇だな。俺は上下に来ている服を脱げばタキシードになるわけだが…。
「うーん、似合わないと思うなこれ…」
　釣り合ってないというか、なんというか…。アイツなら似合うんだろうな、そういうところは羨ましい。俺が着ると子供っぽさが余計目立つ、気がする。
「…まぁ滅多に着ないしな」
　とりあえず良しとする。笑われても話のネタにはなるだろう。
「お待たせしました、士郎」
「シロウ、ちゃんと着れた。問題ない」
　振り向くとそこには、凛々しいセイバーがいた。俺の予想通り、クールな感じになっ

た。うーんすごい、似合いすぎて。
「うん、似合ってるぞセイバー」
「さすがですね士郎。私のことをよくわかっています」
「そりゃーどうも。俺的にはもっと可愛くてもいいかなって思ったけどこのドレスだとセイバーらしさが出るかなと思ってさ」
セイバーはうんうんと頷いてる。まぁ気に入ってくれて何よりだ。
「シロウもタキシードに着替えないと部屋に入れない」
「うっ…」
リズ、しっかり見てるなぁ…。
「似てないから…笑うなよ?」
部屋に移動して、ササっと上下を脱いで鏡の前で髪を整えたりして身だしなみを整える。
「シロウ、似合ってないことはないと思う」
「そうかなぁ…」
「大丈夫、似合ってるから安心していい」
人に言われると似合ってる、のかな…。どう考えたって何も変わらないもんな、とりあえずセイバーの所に行くか。

「お待たせセイバー」
「士郎、似合ってますよその服」
「そ、そうか？」
「えぇ、私と同じであまり見れない姿なので…目に焼き付けとかないといけませんね」
フフッと小さく笑うセイバー。たまにセイバーも遠坂やイリヤのように小悪魔みたいになるよな…まぁ遠坂の売位は小悪魔というか悪魔そのものだが。
「それじゃ、そろそろ行くかセイバー」
「えぇ、行きましょう士郎」
3人して衣裳部屋から出ていく。で、いざ会場に行くと5人が待っていた。
「お、来た来た」
遠坂がワクワクしているのが声のトーンで分かる。
「おぉ～」
「わぁ～」
遠坂と桜はセイバーを見て驚きの声を上げる。
「ねぇ、セイバーのドレスはほんとに士郎が選んだの？」
「えぇ、士郎が選んでくれました」
「先輩はセンスがありますね！」

３人でワイワイと盛り上がっている。そりゃそうだ、正直俺もびっくりしてる。ここまでとはなぁ…。
「ふーん、士郎もセンスあるじゃない」
いつの間にか隣にイリヤがいた。
「いや、俺にはセンスはないよ。イリヤがたくさんドレスを用意してくれたおかげだ、ありがとう」
「そ、そう？じゃあ今度は私の洋服も選んでもらおうかしら」
「士郎！じゃあ私のも選んでよ」
遠坂が歩きながら俺に言う。えぇ…遠坂にはアーチャーがいるからアーチャーに選んでもらえばいいんじゃ…。
「もう凛のドロボー猫！またそうやって！」
「何よーいいじゃない。別に減るもんじゃないんだから」
「じゃ、じゃあ私も…」
今度は桜?!続いてライダーも…おおぅ、勘弁してくれぇい…。
「あーあー、いいか？」
流石に声をかける。喧嘩をしに来たんじゃないからな。
「飯が冷めちまうから、温かいうちに食べよう」

「それもそうね…あっ」
　イリヤが何かを思い出したように、ポンと手をたたく。
「どうしたんだイリヤ？」
「そろそろアレが届く時間ね」
　アレ…？何が、と聞こうとするとバン！扉が開く。
「ば、バーサーカー?!」
　遠坂が驚きの声を上げる。って何か担いでないか？
「おかえりー、バーサーカー！わぁーおっきい！」
　あれは木か。…あぁ、なるほど。
「わかったぞイリヤ、それの正体」
「ははーん、なるほどね」
　俺と遠坂はあれの正体がわかったが他の人は分かっていないようだ。
「もうある程度飾りつけは済ましちゃってるから、あとは電源を入れるだけね」
　コンセントに差して電源を入れる。
「なるほど…」
「あの大きな木は…」
「クリスマスツリーだった、ということですか」

桜とライダー、セイバーも電装で分かったようだ。
「やっぱりこれがあるとクリスマスって感じだな」
「それじゃ、食事にしましょう!」
待ってましたと言わんばかりにセイバーはささっと席に座る。はは、見た目は凛々しいけどやっぱりセイバーはセイバーだな。
「それじゃ、いただきます!」
『いただきます!』
今年のクリスマスはお城でエレガントなクリスマスだった。来年もやるかどうか、それは分からないけどこういう慣れない格好してクリスマスもなかなかいい体験になった。クリスマスも平穏な1日であった。